

学位論文要旨

論文題目：奄美大島における今日的葬儀の民俗学的研究—龍郷町円および宇検村平田・湯湾の事例を中心として—

氏 名：立 神 作 造

本研究は、日本本土とも沖縄とも一線を画した特有の文化的背景を持つ、奄美の中でも奄美大島を中心として、今日行われている葬儀における伝統の変化と継続の関係性に関する研究である。以下、各章ごとの内容について触れておきたい。

## 第1章 本論の目的

第1節では、本論の目的および研究課題と研究方法を述べる。本研究の発端は、土葬の複葬を行ってきた奄美大島において、火葬の導入と普及は、葬送儀礼の外部化とともに伝統の変化と継続という問題への直面であった。にもかかわらず、その点に関する研究はほとんど見られない。

本論文は、奄美大島の中でもより少子・高齢化・人口減少の進んでいると考えられる、龍郷町円および宇検村平田・湯湾における今日の葬儀を取り上げ、変化しながらも継続する奄美大島の伝統を見てとることを目的としている。

調査は、2015年11月より2023年8月まで延1年間にわたり、龍郷町円と宇検村平田・湯湾を中心に龍郷町(円、安木屋場、龍郷)、宇検村(平田、阿室、屋鈍、湯湾)、奄美市内の墓地、葬儀社(2社)、寺院(奄美市内2寺院、瀬戸内町内1寺院)、および関東太平(平田)会で行った(但し、2020年4月より2022年9月まではコロナ禍のため、電話およびメールによる調査を行った)。

上記の調査において得られた龍郷町円および宇検村平田・湯湾の二つの葬儀事例を記述することとする。この二つの事例を比較検討し、両者に共通する側面に伝統の継続が認められるのではないかとという仮説のもとに結論を導き、かつそれでもって従来の研究の検討を行う。

第2節では、葬制と墓制に関する基礎的概念と奄美大島における近世以降の葬制と墓制の変化の過程について次の先行研究を援用した。火葬が導入される以前の奄美における葬制と墓制に関する主な先行研究として、赤田光男「与論島の洞穴墓と改葬習俗」[赤田 1993]と津波高志『沖縄側からみた奄美の文化変容』[津波 2012]および奄美大島の1960年代から1970年代の葬儀について、恵原義盛『奄美生活誌』[恵原 2009]を援用した。

奄美における土葬から火葬への移行は、洗骨改葬の消滅と同一視されている傾向がみられる。洗骨改葬の消滅に関する先行研究として、蔡文高『洗骨改葬の比較民俗学的研究』[蔡 2004]を、火葬への移行後も火葬と洗骨改葬に関連する先行研究として、加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制—変容と持続』[加藤 2010]と津波一秋「火葬後の洗骨改葬に関する問題の可視化と再定位—那覇市小緑地区の事例研究から—」[津波 2022]を援用した。また、火葬の普及による葬儀の外部化について、加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制

—変容と持続—』[加藤 2010]を、葬儀に関わる葬祭業者における活動の先行研究として、山田慎也『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』[山田 2007]と田中大介『葬祭業のエスノグラフィ』[田中 2017]および田中大介「多死社会」[田中 2019]等を援用し検討する。

## 第2章 龍郷町円における葬儀

第2章の「龍郷町円における葬儀」では、人口減少と高齢化が比較的ゆるやかな龍郷町にあって、近年、急速に人口減少と高齢化が進む、円における土葬の葬儀と火葬の葬儀を比較し、その変化をみてとる。

第1節の「龍郷町円の概要」では、龍郷町円の概要と地域社会と高齢者との関係性について述べ、第2節の「土葬の頃の葬儀」では、葬儀は他の通過儀礼と異なり直接的な観察が難しく、体験者への聞き取り調査という間接的な観察で行った。

第3節の「今日的葬儀」では、円において家族・親族が参列するソウシキ(葬式)と集落の人々に関わるノウコツノギ(納骨の儀)の二つの儀礼が行われている。このような今日的葬儀のソウシキ(円では葬儀をソウシキと呼んでいる)と火葬およびノウコツノギに立ち会ったことのある当事者および奄美市内の葬儀社への聞き取りを中心に3家の葬儀に関する観察を行った。また、本論で用いる葬制と対置にある墓と墓制について、円における近世以降の変化の過程についてみる。

## 第3章 宇検村平田・湯湾における葬儀

第3章の「宇検村平田・湯湾における葬儀」では、奄美大島南部地域で最も人口減少と高齢化の進む宇検村平田・湯湾における土葬の葬儀と火葬の葬儀を比較し、その変化をみてとる。

第1節では、宇検村平田・湯湾の概要を述べ、第2節の「土葬の頃の葬儀」では、前述の龍郷町円と同じく、葬儀は他の通過儀礼と異なり、直接的な参与観察が難しいことから、平田と湯湾における土葬のкокベツシキ(平田・湯湾では葬儀をкокベツシキと呼んでいる)について、土葬の葬儀を体験したシマ(集落)の長老への聞き取り調査という間接的な観察で行った。

第3節の「今日的葬儀」では、火葬の定着後の今日的葬儀における平田と湯湾のкокベツシキ(告別式)と火葬およびノウコツノギ(納骨の儀)の二つの儀礼に立ち会ったことのある当事者への4家の葬儀に関する聞き取りを中心に観察を行った。また、都市移住者の葬儀と墓の共同化についても東京奄美会と関東太平会の会員に対して、聞き取りと観察およびアンケート調査を行った。

## 第4章 二つの事例の比較検討

第4章「二つの事例の比較検討」では、第2章、3章でみてきた龍郷町円と宇検村平田・湯湾の葬儀事例を比較し、今日的葬儀における外部化の部分と非外部化の部分について検討する。

## 第5章 今日的葬儀の構造



本研究の発端は、土葬の複葬を行ってきた奄美大島において、火葬の導入と普及は、葬送儀礼の外部化とともに伝統の変化と継続という問題がないとは必ずしも言えないことからであった。

第5章の「今日的葬儀の構造」では、龍郷町円および宇検村平田・湯湾における今日の葬儀の比較検討をもとに、地域において変化しながらも継続する奄美大島の伝統の葬儀の構造をみてとることを目的とする。二つの事例から今日的葬儀の構造をみてとることで課題の解明に取り組んだ。

以上

2023年度

奄美大島における今日的葬儀の民俗学的研究  
—龍郷町円および宇検村平田・湯湾の事例を中心として—

神奈川大学大学院 歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻

立 神 作 造

## 目 次

第1章	本論の目的	4
第1節	研究課題と研究方法	4
1	研究課題	
2	研究方法	
第2節	基礎的概念と先行研究	5
1	葬制と墓制に関する基礎的概念	
2	奄美大島の葬制と墓制に関する先行研究	
	まとめ	
第2章	龍郷町円における葬儀	13
	はじめに	
第1節	龍郷町円の概要	13
1	円の概要	
2	地域社会と高齢者との関係	
第2節	土葬の頃の葬儀	18
1	土葬による葬儀	
2	カイソ(改葬)	
第3節	今日的葬儀	24
1	A家の事例—故人：男性・享年83歳	
2	B家の事例—故人：女性・享年94歳	
3	C家の事例—故人：男性・享年63歳	
4	葬墓制の変化	
5	儀礼様式の分化	
	まとめ	
第3章	宇検村平田・湯湾における葬儀	50
	はじめに	
第1節	宇検村平田・湯湾の概要	50
1	平田・湯湾の概要	
第2節	土葬の頃の葬儀	55
1	葬儀の準備	
2	コクベツシキ(告別式)	
3	カイソ(改葬)	
第3節	今日的葬儀	61



1	D家の事例(平田)一故人：女性・享年 94歳	
2	E家の事例(平田)一故人：女性・享年 86歳	
3	F家の事例(湯湾)一故人：女性・享年110歳	
4	G家の事例(湯湾)一故人：女性・享年100歳	
5	墓の共同化による儀礼の移行	
6	墓の共同化と都市移住者の関係性	
7	都市移住者の葬儀と改葬事例	
	まとめ	
<b>第4章</b>	<b>二つの事例の比較検討</b>	<b>100</b>
	はじめに	
第1節	葬儀における外部化の部分	100
1	奄美大島における葬儀の現状	
2	葬儀社の役割	
3	死者儀礼の簡略化と簡素化	
第2節	葬儀における非外部化の部分	105
1	分離儀礼の継続性	
2	伝統儀礼の変化と継続性	
3	葬儀におけるシマの関係性	
	まとめ	
<b>第5章</b>	<b>今日的葬儀の構造</b>	<b>114</b>
1	葬儀の外部化と非外部化の構造	
2	葬儀の伝統と遺骨との別れの儀礼化	
3	葬儀の外部化と奄美大島の伝統の継続性	
<b>謝 辞</b>		<b>118</b>
参考文献		119
参考資料		123
図表・写真リスト		124
A・B・C・D・E家葬儀参列者数		128
平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査票		133
平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査結果		135

奄美群島・奄美大島位置図

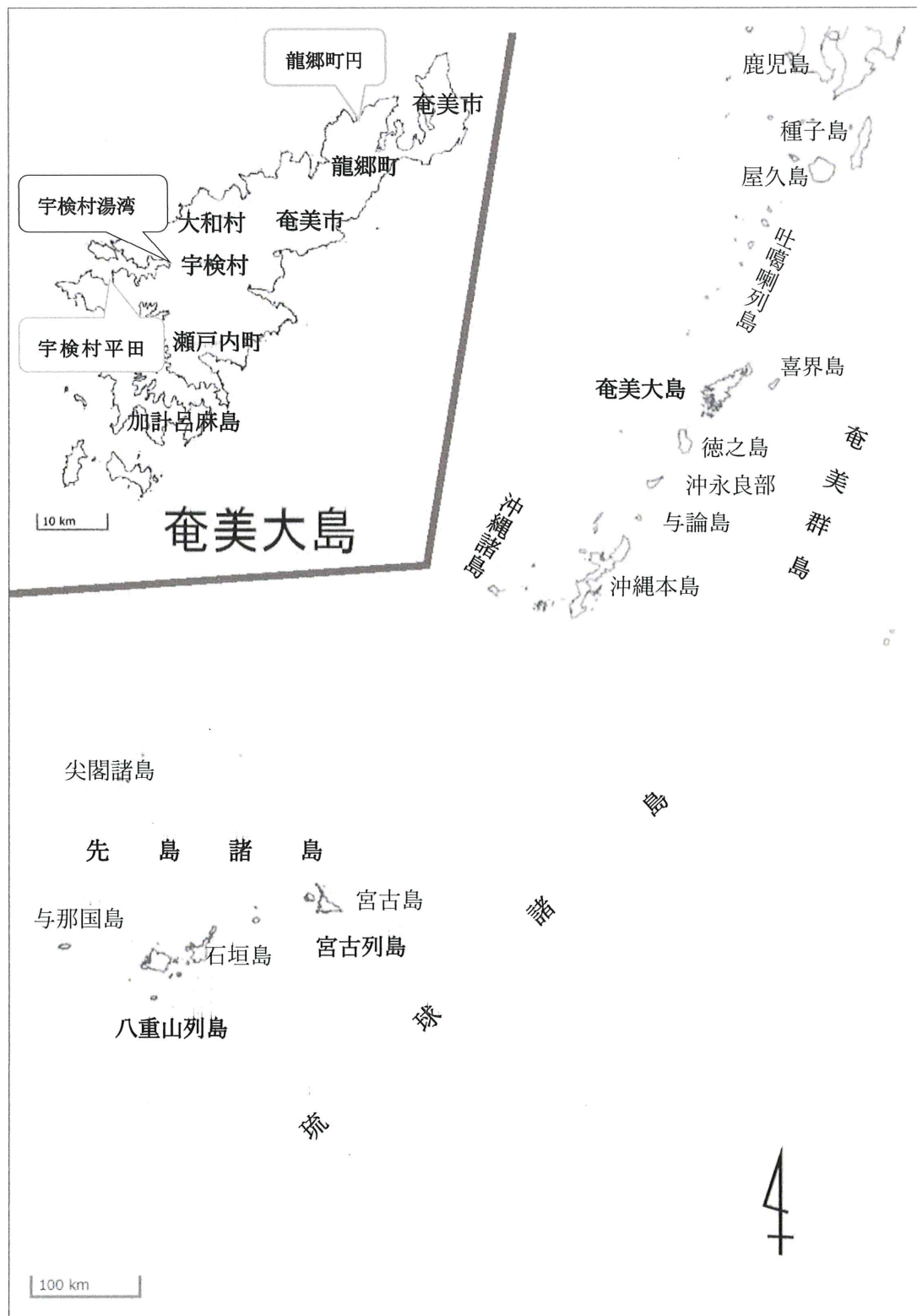


図 1-1 奄美群島・奄美大島位置図[国土地理院地図より作成]

## 第1章 本論の目的

### 第1節 研究課題と研究方法

#### 1 研究課題

土葬の複葬を行ってきた奄美群島(以下奄美)への火葬の導入と普及は、葬送儀礼の外部化とともに伝統の変化と継続という問題に直面することとなった。にもかかわらず、その点に関する研究はほとんど見られない。本研究は、日本本土とも沖縄とも一線を画した特有の文化的背景を持つ、奄美の中でも奄美大島を中心として、今日行われている葬儀における伝統の変化と継続の関係性に関する研究である。

鹿児島県大隅半島(南大隅町)に生まれ育った筆者が、奄美の葬送儀礼に興味を抱いたのは、修士論文で奄美大島における島唄(シマ唄)<sup>1</sup>、八月踊り<sup>2</sup>など民俗芸能<sup>3</sup>の観光資源化を研究課題としていたことにある。当時、同県出身の誼で利用していた東京の郷土料理店の店主B氏より、店主の出身地である龍郷町円(えん)に、奄美市内の葬儀場での告別式および集落の共同墓地において納骨の儀の二つの儀礼が行われているというユニークな葬送儀礼が存在する情報を得たことが発端であった。

研究の状況および筆者の関心から、本論は、奄美大島の中でもより少子・高齢化・人口減少の進んでいると考えられる、龍郷町円および宇検村平田・湯湾における今日の葬儀を取り上げ、変化しながらも継続する奄美大島の伝統を見てとることを目的としている。

#### 2 研究方法

##### 1) 現地調査

2015(平成27)年11月より2023(令和5)年8月までの延べ1年間の葬儀に関する現地での調査を行った。調査地においては、資料収集と関係者への聞き取り調査を実施した。

調査地は、龍郷町円と宇検村平田・湯湾を中心に龍郷町(安木屋場、龍郷、秋名)、宇検村

<sup>1</sup> 奄美群島で歌われる民謡(奄美民謡)のことをいう。各集落(シマ)において島口(奄美方言)で歌われる民謡であり、集落ごとに歌う歌詞も違うと言われている。かつて自分たちの集落の島唄が盗まれないようにあえて違う歌詞を歌ったとも言われる[立神 2017:58]。

<sup>2</sup> 南島の正月は旧暦八月とされ、この八月正月を中心に、ミハチガツ(三八月)といい、アラセツとシバサシを七日あけ、その二ヶ月後にドンガと三つの祭りが行われる。奄美大島ではこのミハチガツの時期に高祖祭が行われ無病息災と五穀豊穡を祈願する。その時に歌い踊られるのが八月踊りである。それぞれ歌と踊りに練達した人たちを先頭に輪になって、八月踊り唄を男女交互に歌い合い、楽器はチジン(太鼓)を打ち踊りながら集落の家々を廻る[立神 2017:59]。名越佐源太が嘉永三年三月末から安政二年四月まで奄美大島(小宿)に遠島の際に、書き残した『南島雑話』によれば、近世後期の八月(旧暦)に高祖を祭る八月踊が行われていたことが記されている。「八月朔日、二日、丙丁日、高祖を祭る。男女太鼓を打ち、踊をする事にて、村中を廻り、昼夜の無レ分家毎に至り、残りなく廻り済て銘々帰るなり。西間切、東間切、宇検方は丁日を用いる。名瀬方は両日用る。是八月踊と云ふ。」[名越 國分・恵良校注 2007:132]。

<sup>3</sup> 近代以前から連綿と続けられてきた庶民の日々の暮らしの中で育まれ、口頭伝承によって伝えられてきた芸能をいう。以前は郷土芸能とも称されていた[久万田 2011:10]。



(平田、阿室、屋鈍、湯湾)、奄美市内の墓地、葬儀社(2社)および関東太平(平田)会で行った(但し、2020年4月より2022年12月まではコロナ禍のため、メールおよび電話による調査を行った)。

## 2)資料の分析方法

本論文では、上記の調査において得られた龍郷町円および宇検村平田・湯湾の二つの葬儀事例を記述することとする。この二つの葬儀事例を比較検討し、両者に共通する側面に伝統の継続が認められるのではないかという仮説のもとに結論を導き、かつそれでもって従来の研究についての検討を行う。

## 第2節 基礎的概念と先行研究

### 1 葬制と墓制に関する基礎的概念

奄美大島において、今日行われている葬儀<sup>4</sup>の伝統の変化と継続の関係性を調査研究するなかで、筆者の用いる主要な葬制と墓制の概念を定義する。

まず、葬法とは死者の葬り方であり、葬制とは葬法に関する慣行の総体である〔内堀 1987:429-430〕。「葬制には死体を一度だけ処理する単葬、および一定の年限において二度以上処理する複葬との二種がある。複葬は一度だけ葬り直すとは限らず、二度目、三度目と繰り返すこともある、最初の死体処理を第一次葬と呼び、それ以降は第二次葬、第三次葬という用語を用いて区別する。」〔津波(高) 2012:15〕。

第一次葬に関する主な用語としては、風葬、土葬、火葬などがある。埋葬ないし土葬は遺体を土のなかに埋める葬法、そして火葬は遺体を焼く葬法である〔津波(一) 2022:368〕。

また、複葬における第二次葬以降の処置を改葬<sup>5</sup>とし、改葬において洗骨が行われるものを洗骨改葬と呼ぶことにする〔蔡 2004:9〕。洗骨は遺体や遺骨を水や酒で拭くなどして洗い清める儀礼であり〔津波(一) 2022:368〕、奄美群島では洗骨後の白骨を石塔の後ろに骨甕を半分埋める、あるいは家形の蔵骨器などに改葬する〔平敷 2006:308-309〕。したがって、洗骨改葬とは、単なる改葬ではなく、まだ肉片や土の付着した骨を綺麗にするために、洗うとか拭くとかの行為が伴うものとする。

本論で用いる葬制に対置する墓と墓制に関しては次の通りである。墓は人を葬り、また弔いの儀礼をする場所であり、墓制とは墓に関する慣行の総体である〔内堀 1987:583-

<sup>4</sup> 葬儀とは一般に死者を葬る儀礼であり、死体の処理に伴う諸儀礼と理解されている。死によって肉体は徐々に破壊されていくため、刻々と変化しつつある死者の体に対し、何らかの形で処理を必要とする。葬儀がこうした肉体の処理を目的としていることは明らかである。従って葬儀を臨終から埋葬あるいは火葬を中心とする一連の儀礼と捉えることとする〔山田 2007:7-13〕。

<sup>5</sup> 法体系上における改葬の解釈は、1948(昭和23)年に制定された墓地、埋葬法等に関する法律によれば、「改葬とは埋葬した死体を他の墳墓に移し、又は埋蔵し、若しくは収蔵した焼骨を、他の墳墓または納骨堂に移すことをいう」〔昭和23年法律48号第二条三項〕。

584]。葬制と墓制は密接な関係にあることから、葬制と墓制を併せて葬墓制と呼ぶことにする。葬制と墓制は、対象となる制度や慣習によっては厳密な区分が難しい場合もある。死者の扱いという点からすれば葬制であり、また墓の扱いという点からみれば墓制となる。議論の文脈に応じて強調点がいずれかになることはあっても、実際上はどちらか一方に限定できるものではなく、特にこうした場合は、葬墓制という用語は極めて重要である[津波(一) 2022:369]。

## 2 奄美大島の葬制と墓制に関する先行研究

### 1) 葬制と墓制の変化過程

本項では奄美大島における、近世以降の葬制と墓制の変化の過程を整理しておく。火葬が導入される以前の奄美における葬制に関する主な先行研究として、赤田光男の「与論島の洞穴墓と改葬習俗」[赤田 1993]と津波高志『沖縄側からみた奄美の文化変容』[津波(高) 2012]が挙げられる。

まず、奄美における葬墓制の近世末期から近代初期までを見てみたい。奄美においては、薩摩・鹿児島の影響下で、少なくとも第一次葬に関しては全域で風葬から土葬に変わった[津波 2012:80-81]。この奄美の葬墓制の変化を捉える上で、赤田光男の指摘を踏まえたい。赤田は火葬導入以前の与論島の葬墓制を検討した上で、「土葬になっても改葬することは、琉球文化に系譜を引くものであり、改葬の根強さを物語る。石塔が発生しても改葬は途絶えることがなく存続している。石塔もなく、風葬をして改葬をする沖縄諸地方と比較すると、改葬という習俗に関してのみ共通項がある」[赤田 1993:336]。

奄美と沖縄との違いでいえば、第一次葬として土葬を行うことであり、第二次葬の改葬は共通している。それではなぜこのような違いが生じたのか。津波はこのことを奄美の文化変容に関わる問題として指摘している。

この問題を如実に物語っているのが『沖永良部島郷土資料集』に収録された「沖永良部島諸事改正令達摘要録」に関する1877(明治10)年9月21日に鹿児島県庁から葬制に関する諭達である[和泊町 1956:71]。

死人葬式之儀は随意に任すといふとも先ず地葬、空葬の二つに有之、当島に於いては近年神葬祭に相改め候、爾来地葬すべきは当然に候処或いは其棺を墓所に送り「喪屋(もや)」と唱ふる小屋内に備置き、親子兄弟相連れ「喪屋」に至り、其棺を開きみる数回終に数日を経、屍の、腐敗するも臭気を不厭趣に相聞右は人情の厚きに似たれども、其臭気を嗅ぐ者は甚く健康を害し候は勿論、近傍通行の者と雖も其臭気に触るれば病を伝染しあるいは釀すものに有之衛生の甚く不宜事に付き、自今右様之弊習は岐度相改め、死する者は速やかに埋葬に改云々諭達す。

文中の「地葬」と「空葬」とは土葬と風葬のことである。要するに、近年、神道式の葬

儀に改められ、土葬をするのが当たり前なのに、墓地に「喪屋」と称する小屋を設け、親子兄弟が数日も通って死者を見る慣習(すなわち風習)が続いているので、その悪習は止め埋葬せよ、との論達である。同様の論達が徳之島から北の島々にも発せられたかは不明である。しかし近世から近代にかけて多少の時間差はあったとしても、また階級差や地域差があったとしても、従来の研究は大筋として奄美全域において薩摩・鹿児島の影響下で、風葬から土葬への変化が起きたと見做している[津波(高) 2015:44]。

つまり、奄美における第一次葬の風葬から土葬への変化は、支配・被支配の関係の中で起きた長期的文化接触の一端として捉えられる。奄美では、近世末期から明治初期にかけて土葬が次第に採用されていった。その結果、第一次葬は土葬、第二次葬は土葬による遺骨を堀上げ、洗骨し、改葬するという葬法になった。

松山光秀は、人が死んだらそれを地上に安置して、風化による骨化を待って、残った骨を洗い清めるという、いわゆる風葬の習俗が古くは奄美・沖縄に分布していた。これは人間の霊が、骨、特に頭蓋骨にとどまるという信仰によったものであり、骨を直接対象にして祀るものである[松山 2004:77]と論じている。

酒井正子によれば、洗骨改葬は土葬ののち死後三年から七年後ぐらいの奇数の年に、遺体を再び掘り起こし、骨を洗い清めて別置して祀る葬法である。アーガリニーシリ(明かりを見せ)、キュラサナシユン(清くする)、アトオガム(後拝み)などといわれ、死霊の浄化と再生をも目的とする[酒井 2005:190-191]と論じている。

松山と酒井の洗骨習俗に関する両論について、奄美では第一次葬の風葬から土葬に変化するなかで、第二次葬の洗骨改葬が頭骨を意識した霊魂の浄化という観念のもとに行われていたことに留意する必要がある。洗骨後の洗骨を安置する墓でいえば、「沖縄流の亀甲墓や破風墓は奄美には生じず、それに代わるべき人工的な積石墓や板石墓が奄美大島に生じたが、奄美全域に普遍的に存在したのは洞穴墓<sup>6</sup>である」[赤田 1993:336]。つまり、奄美の洞穴墓(ギシ・ギシ)は、亀甲墓や破風墓以前において沖縄に普遍的であった洞穴墓の存在と軌を一にするものである。

奄美大島の1960年代から1970年代の葬儀について、恵原義盛『奄美生活誌』[恵原 2009]が挙げられる。恵原自身の目撃経験によると、奄美群島の各島の間で葬制の若干の違いはあるが、名瀬地方(現奄美市名瀬)の方式と著しく異なることはなく、奄美大島の葬祭は、大方、薩摩藩統治下における習俗とみられ、それは1970年代まで続いていることが述べられている。

### 葬式の準備

葬式はソウシキともクヤミともいう。息を引き取ると、顔に白布を被せ、両掌を組み、

<sup>6</sup> 奄美における葬墓制の変容過程をみると、第一次葬における風葬から土葬への変化、および第二次葬におけるギシ・ギシ(洞穴墓)から骨甕(フニガミ)、納骨堂(ノーコツドー)への変化が見られる。土地の人によれば、ギシ・ギシもフニガミもノーコツドーも役割はすべて「納骨堂」である[津波 2012:42]。



北枕に寝かす。葬式はその日か翌日に行われる。死去のことを親戚知己に通報するとともに、板と食品および葬式用品の買い出しにでる。若者数名は、イケ(埋葬穴)掘りに墓地に行く。一部の人はヤギョ、マエジユク、棺、灯籠、足駄、草履等作りにあたる。ヤギョは龕のようなもので、マエジユクはその前に置き、供え物を載せるものである〔恵原 2009:318-319〕。

#### 納棺・葬列

死者は出棺前に湯浴みをする。サカミズを汲むとき、柄杓は左手で逆に持って逆手に注ぐ。清めがすむと白衣を着せる。前から着せ、後で左前に合わせる。棺は表縁側の戸口からだす。葬列は松明(灯明)を先頭に、弔い旗、マエジユク(前卓)、棺(ヤギョが載る)、担ぎ手4人、松明、ツカ(塚木)、線香、花、水、酒、灯籠、参列者と続く。葬列は墓地の入口で左周りに三回まわる。これが終わると棺を止め、一般の村人の礼拝をうける。これをカドブリ(門送り)という〔恵原 2009:319-320〕。

#### 埋葬・告別

イケの前で棺をおろし、左手で柴を持ち、逆手で三度ふる。棺をイケに吊るすように降ろす。納まったら棺の上に広いナバイシ(板状テーブル珊瑚石)を載せ、その上にツカを立て、周囲の土砂で穴を埋める。ヤギョを据え、中に足駄と草履を置き、前にマエジユクを据える。灯籠はヤギョの後方に立てる。ヤギョを立て終わると一人一人礼拝をする。告別が済んだ人は次々に墓の外に出る。入口で酒瓶を持った係りの人が一人一人に酒を両手に授ける。受けた人は頭から体を撫でて身祓いをする。次いで浜に降り、汀で潮を三度指三本ではねてシュウバレ(潮祓い)をする〔恵原 2009:322-323〕。

#### ミキャンカ・マブリワシ

埋葬の翌日を三日弔いとするが、七日弔いと合わせてミキャンカと称して酒宴を開く。七日目ごろから四十九日の間に死者の霊魂(マブリ)を呼び招いて生きている人たちに、ユタの口を通じて話をさせるマブリワシを行う〔恵原 2009:325〕。

#### 改葬

埋葬した遺骸は、やがて腐敗し崩れて遺骨は土や腐肉に汚れているので、それでは浄土に行けないので、極楽にいけるように綺麗にしてあげる必要がある。そのため埋葬後三年以降に遺骨を掘上げ、多くはドンガに洗骨改葬をおこなった。改葬の墓堀りは近親者があたる。骨を日光に晒すことを忌むので、骨が出かかると傘を翳す。頭蓋骨(コーベ)がでると、骨を受取った女達は、潮水を汲みいれてある盥に傘を翳してその下で洗う。コーベは真綿でくるみ、他の骨は体の下部から順に骨甕に納め、最後に上方にノドボトケとコーベを載せて蓋をして墓に納め、参列者による墓前礼拝が行われる〔恵原 2009:326-327〕。

恵原の報告で特徴的なことは、①湯浴みのサカミズを汲むときや埋葬時に柴での祓いを逆手で行うこと、②納棺のとき白い着物を後前に着せ左前に合わせること、③共同体で葬列を墓地まで行うこと、④イケの遺体が土に埋もれないように棺の囲いに板状のテーブ

ル珊瑚が使用されていること、⑤墓に草履と下駄を置いて帰ること、⑥告別のあとに潮でシュバレをすること。⑦ミキヤナンカに酒宴を行うこと、⑧ユタによるマブリワシを行うこと、⑨第二次葬の洗骨改葬において洗骨した頭蓋骨を真綿でくるむなど頭骨が丁寧に扱われているなどの習俗が一般的に行われてきたことが挙げられる。

このような葬送儀礼が今日の奄美大島に現存または継続しているのか、第2章、3章の二つの葬儀事例で見てみたい。

奄美における土葬から火葬への移行は、洗骨改葬の消滅と同一視されている傾向がみられる。洗骨改葬の消滅に関する先行研究として、蔡文高『洗骨改葬の比較民俗学的研究』[蔡 2004]が挙げられる。蔡文高によれば、かつて南西諸島に広く行われていた洗骨改葬は、第二次世界大戦後各地が火葬を相次いで導入したことによって、今ではもはや火葬場ができていない一部の小島にしかのこされていないとの見解がある。

しかし、火葬への移行後も火葬と洗骨改葬の関係について取り上げてきた研究もある。その先行研究として、加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制—変容と持続』[加藤 2010]と津波一秋「火葬後の洗骨改葬に関する問題の可視化と再定位—那覇市小禄地区の事例研究から—」[津波(一) 2022]が挙げられる。

その中で加藤は、火葬への移行に伴う奄美・沖縄の葬墓制に関する問題を多岐に取り上げ、複葬を持つ奄美・沖縄の葬墓制における火葬の導入とその影響について論じている。

奄美大島における現在の火葬は、道路などの社会基盤が整う 1970 年代以降に普及が進み、今日では一部の地域を除きほぼ火葬率 100%に近い。

そのなかで奄美における火葬の導入と普及は、伝統的な複葬文化の破壊であり、ここに矛盾と葛藤が生まれる。現実の社会過程のなかで、人々はこの矛盾と葛藤にどのように対処し、最終的に火葬を受容、ないし受容しつつあるのか[加藤 2010:85]という問題提起である。

奄美大島<sup>7</sup>では、火葬が始まってからしばらくは土葬と並行して行われていたとされ、火葬の普及期の初期に、人々の間で、第二次葬の際に死骨を火で焼く(焼骨)<sup>8</sup>行為が行われることがあった。加藤によれば、奄美大島の住用村(現奄美市住用)と宇検村芦検での洗骨改葬による火葬事例を中心に、従来の報告から事例を取集・整理しつつ、奄美の伝統的な洗骨改葬の方法として、すべての骨をその対象とするやり方と、頭骨のみを対象として他の骨は処分する二つのやり方をあげている。

洗骨改葬に焼骨を取り入れる場合、頭骨への火葬を避けるものと頭骨も火葬の対象にするものの二つからなっている。奄美大島では頭骨への火葬を行わない例が多くみられ、そ

<sup>7</sup> 奄美大島には、名瀬市と瀬戸内町古仁屋の二ヶ所に火葬場が設けられている。このうち名瀬市の火葬場は村営火葬場として 1918(大正 7)年に設置されている。また、瀬戸内町古仁屋の町営火葬場は 1966(昭和 41)年に設置されている。

<sup>8</sup> 焼骨という言葉は、沖縄で複葬の第二次葬に行われる火葬行為や古骨の火葬行為をさすものとして用いられている[加藤 2010:116]。

れは頭骨に対して、伝統的価値を表出するものである。また焼かれた頭骨は骨甕または骨壺の最上部に置かれるので、同じ価値が表出されるとしている [加藤 2010:109]。この頭骨に対する価値観の表出は、靈魂觀念に基づく頭骨を重要視したものである。

津波一秋は、近年の沖縄における調査事例のなかで、儀礼にともなう作業が必然的に簡略化される火葬後の洗骨改葬においても、頭骨がかつての頭蓋骨のように行動と觀念の次元で重要視されていること、また火葬後の洗骨改葬がしばしば沖縄南部で報告されていると論じている。しかし、奄美大島においてこのような火葬後の洗骨改葬が行われているとの研究者の事例報告は不明である。

蔡文高によれば、火葬は、仏教とともにインドから中国・日本などの国々に広げられたもので、火を用いて遺体を処置し、仏教の世界観や靈魂觀念などにに基づき、遺体全般を処理する葬法である。しかし、実際の操作では火力などの技術的な原因で、遺骨を焼却することは出来ないで、ほとんど骨拾いという二次葬を伴っている。このため、火葬は一般的には単葬であるが、日本的な火葬骨を残して改葬する手段を講じることによって第二次葬になりうることを論じている。

ただ、火葬の骨拾いは、仏教の火葬が民間に受容される過程で、人々の遺骨尊重と習合して生み出されたもので、洗骨改葬のような清めた遺骨を重要とする觀念にもとづくものでなく、近現代では、衛生的觀念や土地使用の問題から行政当局が火葬を提唱した。従って洗骨改葬と火葬は、同様に複葬といわれても、両者には宗教的背景や遺骨に対する考えの違いがあることも述べている [蔡 2004:384]。

この火葬の問題について加藤は次のように述べている。火葬は基本的に単葬であり、遺骨を残して改葬する火葬は日本的な火葬である。そのなかで火葬を導入しつつ、複葬の破壊をまぬがれる方法として、第一の方法は、火葬のもつ死体処理方法としての技術的・手段的側面だけを取り入れて、火葬に結び付く単葬という儀礼体系を排除するものである。第二の方法は、日本的な火葬の手法を強調して、単葬のなかに複葬を組み入れることを挙げている [加藤 2010:83]。

奄美大島における葬墓制の変化過程をみると、第一次葬における風葬から土葬への変化、および第二次葬におけるジシ・ギシ(洞穴墓)から骨甕(フニガミ)、石塔納骨堂(ノークツドー)への変化が見られる [津波 2012:42]。そして、第一次葬における土葬から火葬への変化、および日本的な火葬である火葬骨を石塔納骨堂または共同納骨堂へ安置する変化が見られる。はたして、このような葬墓制の変化がみられる奄美大島において、加藤の提示するような複葬の残存と継続がみられるのか。本論文では、この火葬の問題を第2章と第3章の二つの葬儀事例から、第4章で検討する。

## 2) 葬法の変化による葬儀の外部化

津波高志は、先行研究のなかで火葬が導入される以前の奄美の葬墓制の変化について、奄美において火葬が導入されるおよそ 100 年以前に風葬から土葬への転換期があり、そ



れにともなう葬送儀礼の一度目の外部化が起きた。そして、その後の火葬の導入は、葬送儀礼の二度目の外部化であると位置づけている〔津波 2012:86-87〕。

加藤正春は、先行研究のなかで葬送儀礼の外部化をキーワードとしながら、複葬を持つ奄美・沖縄の墓制における火葬の導入とその影響について多岐に論じている。加藤はそのなかで、奄美大島における土葬から火葬の導入に伴う葬送儀礼の変化の過程に関し、次のように言及している。

一般的に、火葬の導入は、葬送儀礼の導入の外部化を導くと考えられている。地域社会の自生的規範にしたがってその社会の人々の手で行われていた儀礼行為が、外部の別の規範をもった専門家の手にゆだねられるようになることを儀礼の外部化と呼ぶならば、火葬の導入は、葬送儀礼の少なくとも一部分(あるいは大部分)の外部化をうながす。また、それは、地域社会内外の社会整備基盤や、それにとまなう社会生活の変化などと並行し、相互に影響しあっている〔加藤 2010:16〕。

葬送儀礼の外部化は、火葬だけが単独で導入され普及していくのではなく、それと前後して葬祭業者の参入がみられることや、奄美大島をみると道路などの社会整備と火葬の普及が相互に関連しており、さらに1980年代になると過疎化の問題が関わってくる〔加藤 2010:66-70〕。また、奄美全体でみて、戦後の火葬の普及は、沖縄に比べて10年から20年ぐらいの時間差があることを指摘しており、奄美大島における道路など社会整備の遅れを要因の一つとして挙げている。

葬送儀礼の外部化のなかで、葬法の変化が葬儀にどのような変化をもたらしたのかについて、津波高志は次のように論じている。「土葬の導入は、イキフリ(池堀り)やヘゴ切り、ナバイシの板加工、ヤギョ作りやツカ作りなどの労力をシマの人たちに押し付けるかたちで進行している。一方、火葬の導入は、過疎化と高齢化によってシマの人々の互助的な労力の交換ができなくなり、それを金で補う形で進行している。つまり、シマの人たちの労力という点で言えば、火葬は軽減し、土葬は増加させたことにある」。

葬儀に関わる労力という点でいえば、土葬は増加し、火葬は軽減しており、それを金で補う形で進行している。つまり、葬儀の外部化は、葬祭業者と消費者との対価のやり取りを介在した市場経済の展開ということになる。このような葬儀に関わる葬祭業者における活動の先行研究として、山田慎也『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』〔山田 2007〕と田中大介『葬祭業のエスノグラフィ』〔田中 2017〕および田中大介「多死社会」〔田中 2019〕が挙げられる。

山田慎也は、葬制の近代化において、葬祭業の活動自体を無視することは出来ず、葬儀社が誕生し葬儀のさまざまなサービスが商品化されていくことで、葬儀社という商品の提供者とそれを購買する消費者という、新たな相互依存関係が成立してきたことを指摘している〔山田 2007:27-28〕。

一方、日本では1990年代以降、急速に墓制の変容が進み、従来の葬儀や墓の維持が困難となり、その社会的関心も高まっている。葬送儀礼は小規模化や簡略化が進み、家族

葬という言葉も一般化し、訃報の範囲を限定して近親者のみで行う〔山田 2014:i〕ことが増えていることを山田は指摘している。

田中大介は、近年、急激に進展する高齢化の傾向は、「死亡数の増加＝葬儀案件数の増加」を示すものであるが、それは表面的な見方にすぎず、葬祭業界全体としては一種の閉塞状況を感じ続けている。このような中で、葬祭業界としては、低予算の家族葬や一日葬が増えることは、死亡数の増加が必ずしも売上げ増に結びつかないという経営上のジレンマもあるのではないだろうか〔田中 2019:142〕と前述の山田と同じような見解を述べている。

葬送儀礼の変化は、伝統的な儀礼の衰退を促し、地域の個性を薄めるものであるが、それは他方で変化しながらも継続する新たな伝統を創造する〔加藤 2010:120〕という見解もある。また、山田慎也は、葬制の変化が一般に理解されている社会構造の変化よりもむしろ地域の論理によって変化していくことを明らかにし、一元的な変化でない、地域の在り方について問う必要性を述べている。

また、田中大介は、今日の葬祭業について、多様な地域事情に即して発揮される葬祭業の創造性と、それを選択する人々を取り巻く社会―文化的動向という双方向的枠組みの中での葬祭業に向けられるまなざしは、現代社会における相関の力学のもとに葬儀を把握する視座として捉え直す必要性を述べている。

いずれの見解も葬儀の外部化による変化が、必ずしも一方的な衰退を促すものでなく、むしろ伝統の継続や新たな伝統を生み出す原動力になりうることを示唆している。

先行研究において触れてきたように、奄美大島では、第一次葬が風葬から土葬に移行後も第二次葬は洗骨改葬が続けられてきた。しかし、土葬から火葬へ移行後、第一次葬は火葬へ変化し、第二次葬として沖縄でみられるような火葬後の洗骨改葬あるいは日本の火葬の中に複葬的儀礼がみられるかは不明である。そのような中、人口減少と高齢化の進む奄美大島において、今なお、継続する葬儀場でのソウシキまたはコクベツシキと共同墓地または共同納骨堂でのノウコツノギの二つの儀礼は、奄美大島の伝統の動きとみることも可能ではないか。

本研究はこのような仮説をもとに、人口減少と過疎化の進む奄美大島の龍郷町円および宇検村平田・湯湾の葬儀を取り上げ、今日行われている葬儀における伝統の変化と継続性の関係を検証的に調査研究するものである。

本論文の構成として、第2章では、龍郷町円における葬儀という題で、円における土葬の葬儀と火葬の葬儀を比較し、その変化をみてとる。第3章では、宇検村平田・湯湾における葬儀という題で、宇検村平田における土葬の葬儀と火葬の葬儀を比較し、その変化をみてとる。第4章の二つの事例の比較検討では、第2章、第3章でみてきた龍郷町円と宇検村平田・湯湾の葬儀事例を比較し、今日的葬儀における外部化の部分と非外部化の部分について検討する。最後に結論として、二つの事例の比較検討をもとに、地域において葬儀が変化しながらも継続する奄美大島の伝統の構造をみてとることを目的とする。



## 第2章 龍郷町円における葬儀

### はじめに

奄美大島北部の龍郷町円では、近世から近代以降それまで近隣集落の安木屋場に近い自然洞穴などで行われていた風葬から土葬に移行後も洗骨改葬を継続させてきた。葬儀は地域の生活共同体規範に従い、地域の人々の手によって行われてきた。やがて火葬が普及する要因の一つである、1960年代以降に道路交通網が整備されると名瀬(現奄美市名瀬)から葬祭業者<sup>9</sup>が進出するようになった。それに伴い葬儀も自宅での葬儀から奄美市内での火葬場や葬祭場に移行して行われるようになった。

本章では奄美大島における葬法の変化が、葬儀に与える影響がどのようなものであったか見ていきたい。奄美大島の中でも人口減少と高齢化が比較的ゆるやかな龍郷町<sup>10</sup>のなかで、過疎と高齢化が急激に進んでいる円の葬儀事例を取り上げ、土葬の葬儀と今日的葬儀の変化をみてる。

### 第1節 龍郷町円の概要

#### 1 円の概要

龍郷町の人口動態は、1920年の11,584人から一貫して減少し、2016年は6,765人と約半減となっている。ところが1950年以降、火力発電所の設立や黒糖焼酎工場の進出、また奄美空港に近いこともあり、医療福祉を含めたサービス産業への就業機会に恵まれていることから6,000人前後で推移している。そのような町のなかにおいて、調査地である円は、過疎と高齢化が急激に進んでいる地域である。

円〔写真2-1〕は、町内でも日本海のようにもっともニシカゼ(北風)にさらされている地域であり、冬場の気温は10度になることもあるという。風の強いときは波が家々まで打ち寄せてきたといい、このような厳しい環境に耐えかねて市街地や奄美市内に移り住む人もいるといわれている。

円の構成は、図2-2に示すように、神聖なるカミヤマ(神山)やシマの生活空間となるミヤー(宮・祭祀の広場)、海に通じるハマオレミチ(浜下り道)やカミヤマに通じる集落の中央を走る道(ナカミチ)がある。港から集落に通じるすぐ右側に共同焼香場と橋を渡る

<sup>9</sup> 奄美市内の葬儀社は、V社、Y社、JA系E社の3社が中心である。

<sup>10</sup> 奄美大島は、15世紀半ばから17世紀初頭まで琉球王府の統治下にあり、地方行政単位である7間切(笠利間切、古見間切、名瀬間切、住用間切、屋喜内間切、東間切、西間切)に区分されていた。1609年の薩摩侵攻による薩摩藩直接統治時代にも間切制度は引き継がれ、元禄年間に笠間間切(赤木名方・笠利方)、古見間切(古見方・瀬名方)、名瀬間切(龍郷方・名瀬方)、住用間切、(住用方・須垂方)、屋喜内間切(大和浜方・宇検方)、東間切(東方・渡連方)、西間切(西方・実久方)の7間切14方で構成されていた。現在の龍郷町は赤木名方、瀬名方、龍郷方に跨っている。その中で龍郷方の集落(秋名、幾里、嘉渡、円、安木屋場、龍郷、久場、瀬留)は琉球王府統治下から明治時代まで廃村等がなく龍郷町20集落の半数近くを占めている〔奄美市教育委員会 2015:16-21〕。

と裏山の山裾に墓地が整備されている。龍郷町誌によると、今でも小字名として、ハマガネク（浜）、ニヤト（港）、ナカミチ、ミヤー（ノロによる祭祀広場）、ノロの住居跡の空間が存在している。港から集落へ通じる道路端にある墓地の川沿いには、かつて水田が広がり稲作も行われていたとされる。

龍郷町 20 集落位置図

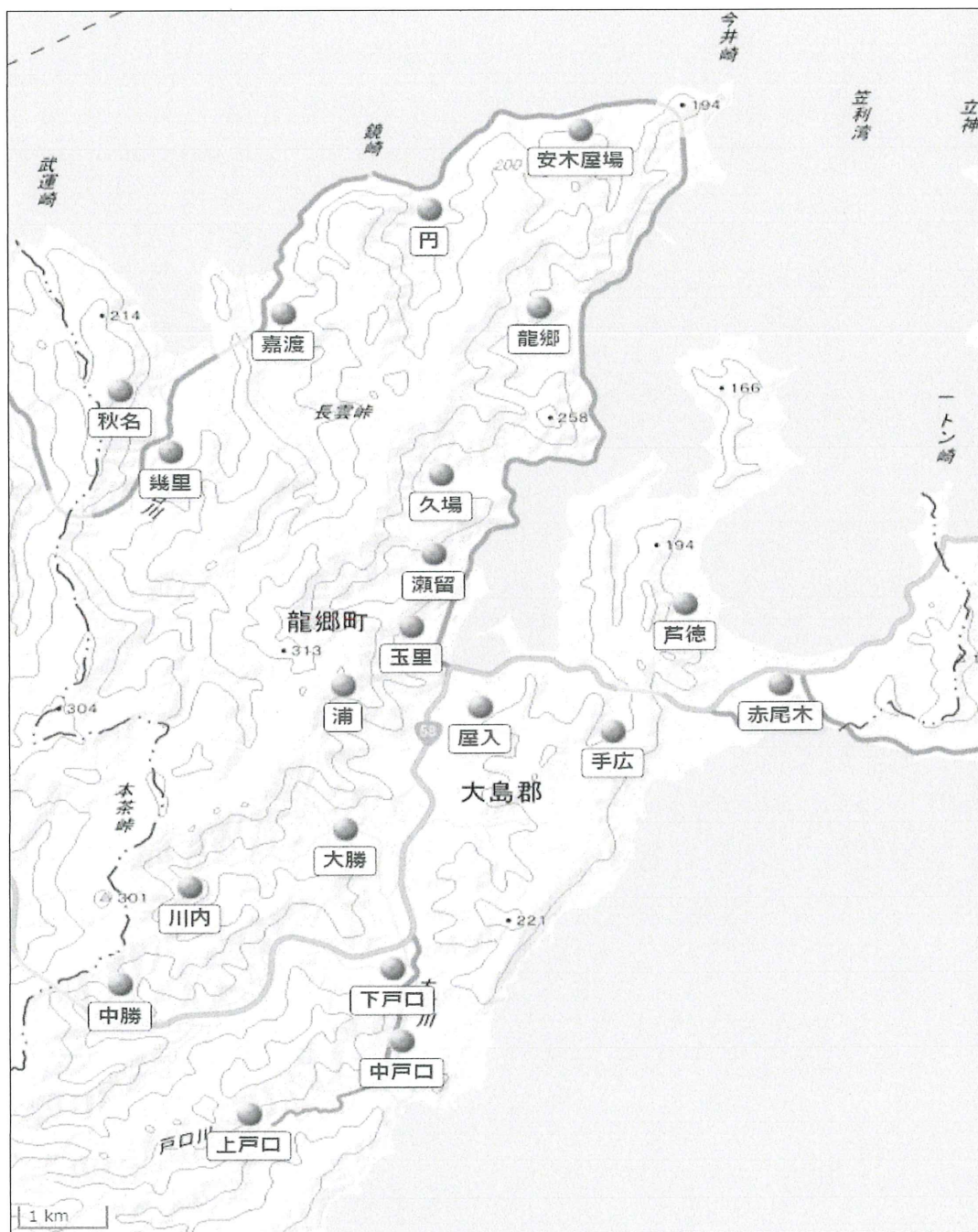


図 2-1 龍郷町 20 集落位置図 [国土地理院地図より作成]





写真 2-1 共同埋葬墓地からみた円集落



図 2-2 円地図 [国土地理院地図より作成]

円は、県道沿いに荒波(あらば)地区(安木屋場・円・嘉渡・秋名・幾里)として行政区分されている [図 2-1]。人口は図 2-3・2-4 に示すように、年々減少し 2017 年 169 人(86 世帯・高齢者率 46.1%)と社会学者大野晃が提唱している限界集落<sup>11</sup>[大野 2008:21]に近い集

<sup>11</sup> 65 歳以上の高齢者が集落人口の 50%を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落。老人夫婦世帯、独居老人世帯が主である[大野

落となっている。その中で円の高齢者比率は、奄美群島および龍郷町全体と比較しても各段に高い。

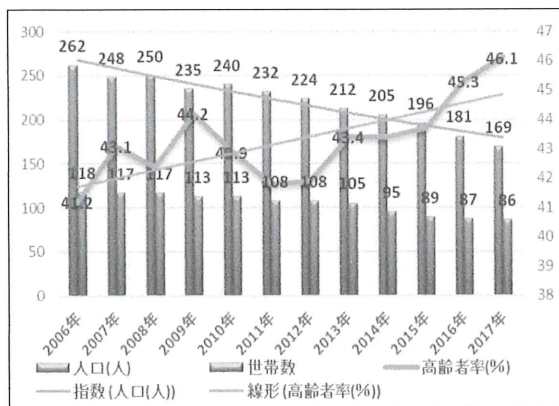


図 2-3 円人口・世帯数・高齢者率 推移

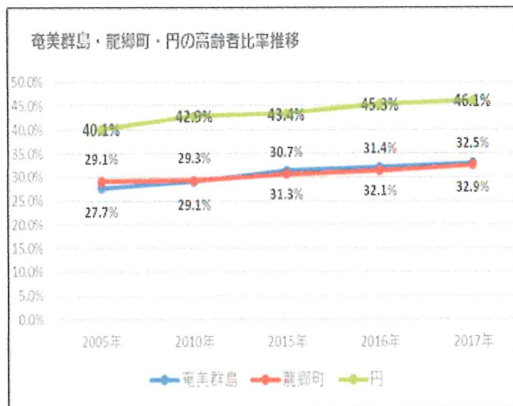


図 2-4 奄美・龍郷町・円高齢者率推移

図 2-5 は、2010 年から 2020 年までの円集落における U ターン者の推移である。2013 年から 2020 年まで(2019 年を除く)毎年 1 名から 4 名の U ターン者があり、家督の相続がなされている。

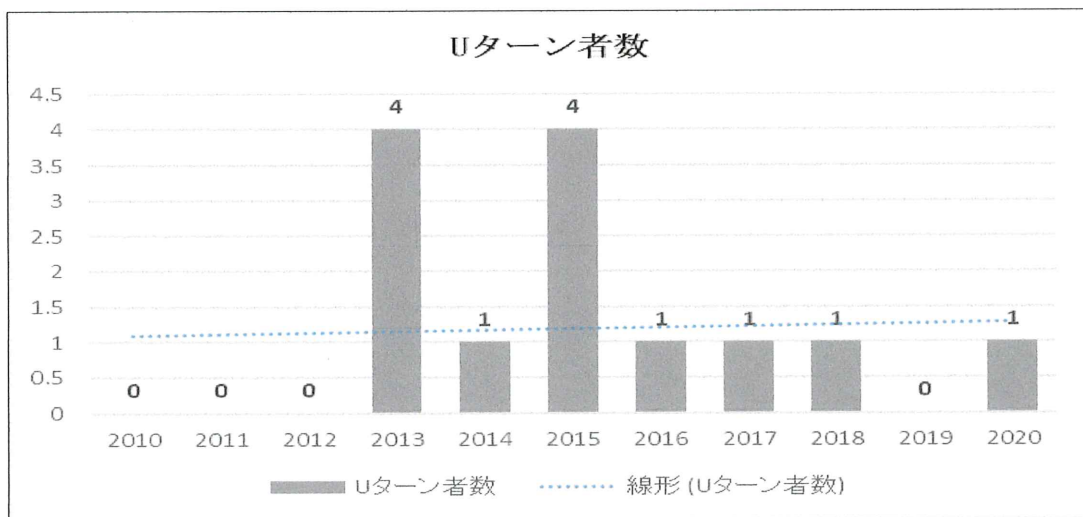


図 2-5 U ターン者数推移[区長の資料に基づき作成]。

2013 年の U ターン者は、2011 年の東日本大震災の翌々年に東京から家族 4 人(夫婦、子供 2 人)で移住している。夫婦ともに 30 代で配偶者は関東圏の出身である。夫は区長(2016 年当時)として活動している。子供 2 人はともに小学生<sup>12</sup>であり子供の少ない集落に

2008 : 21]。

<sup>12</sup> 2022 年現在、長女は大学生(関東在住)、二女は中学生である。



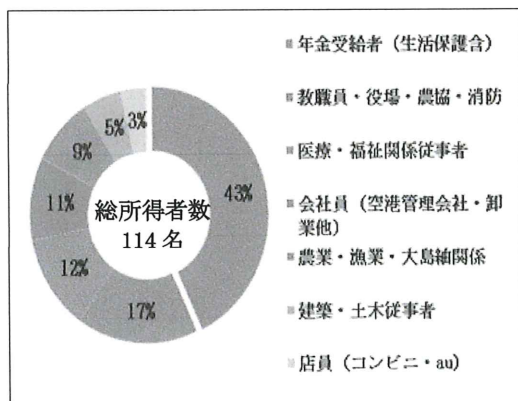


図 2-6 所得者・就業者比率(2016 年)

いの漁師が生まれたとされる。

しかし、近年は、漁業と大島紬機織りなど数名の高齢者就業に依存するもので、その生産高は低い。図 2-6 に示す所得者層は、年金受給者(生活保護受給者含む)が 43%と年金産業と称すべき状況である。その年金受給者以外の職業従事者は、教職員、役場、農協、消防など公務が 17%、医療・福祉、卸業が 12%と第三次サービス業が中心となっている。年金受給者は低額受給年金者が多く、生活は厳しいものがあるという。

## 2 地域社会と高齢者との関係性

円は、血縁のつながりとしての父母のヒキ関係で結ばれた双系性のハロウジ(円はシンセキと呼んでいる)<sup>13</sup>と呼ばれる親族組織がある。円は、86 世帯の 3 分の 2 が血縁・姻戚関係で結ばれているといわれる。



写真 2-2 ハマオレ(浜下り)



写真 2-3 タネオロシ(八月おどり)

<sup>13</sup> ハロウジとは、地元で親族を表す言葉で、血縁の繋がりである父母のヒキ成員で結ばれた双系性の親族組織である。この地域ではハロウジと同じ概念でシンセキと称している。ヒキとは、父母の血筋につながる「姓ビキ」「縁ビキ」を言い、このヒキをもとに「ハロウジ」と称される親族組織が形成されている。

円では自治会、老人会、年中行事を通じて世代間の交流を積極的に行っている。自治会の取り組みは、集落の月1回(日曜日)の河川の清掃作業、葬儀(ノウコツノギ)の手伝い、葬祭業者とのネットワーク作り(互助会システム)、年中行事のハマオレ(浜下り) [写真 2-2(圓山和昭氏提供)]やタネオロシ(八月おどり) [写真 2-3(圓山和昭氏提供)]などがある。

しかし、そのような中、近年の人口減少は著しく、1980(昭和 55)年の人口 418 人が、2017(平成 29)年には 169 人とこの 37 年間で実に 6 割減となっている [図 2-3]。その中で、特に若年層における島外への進学や就業による流出は大きく、町内においても少子高齢化とともに過疎化が一段と進んでいる地域である。

近年、高齢者に対する社会的支援については様々な議論がなされている。佐々木尚之によれば、各世代が孤立し、都市化、個人化した社会では、世代間で知識や経験を交換することは難しく、過去のように、家族に家族成員の世話を求めることがもはや不可能かつ不適切となっている。健康長寿社会を達成するためには、全世代の社会的つながりの維持が不可欠である。実際に積極的な地域社会活動への参加や友人関係、近所つきあいは、高齢者の心身の健康に寄与すると述べている [佐々木 2013:98-99]。

敬老会(円悠会)では、健康体操教室、カルチャー教室、グランドゴルフ、新年会、卒寿会、百寿会やハマオレ(浜下り)、タネオロシ(種おろし)の年中行事への参加と八月踊り(種おろし)の指導、葬儀の手伝い(葬具作り)など多様な活動を行っている。地域社会において高齢者の果たす役割は大きく、集落のボランティア清掃作業、葬儀の際の手伝いや装飾作り、年中行事の祭りなどへの参加を通じて、世代層ならびに世代間交流が実践されている。

ただ、区長(2016 年当時)によると、近年は施設への長期入所や健康寿命を超えての体力の衰えにより、敬老会、清掃作業、冠婚葬祭などに参加する人が少なくなり、地域社会との関係希薄化が進んでいるという。

## 第2節 土葬の葬儀

龍郷町円において、近世中頃までの第一次葬の処置は、近隣の安木場に近い自然洞穴に安置される風葬が行われていた。そして近世後半から近代初期、埋葬墓地も集落の近くに設けられ、第一次葬が土葬<sup>14</sup>に移行後、第二次葬としての洗骨改葬も行われてきた。葬儀は神官や僧侶の儀式を受けずに地域の人々の手によって執行されてきた。今もって、その土葬の葬儀の体験者の多くは高齢者である。今回の調査において、葬儀は他の通過儀礼と異なり直接的な観察が難しく、体験者への聞き取り調査という間接的な観察で行った。

<sup>14</sup> 円の墓地は、明治期に現在の公民館のある集落の入口付近と裏山の斜面の2ヶ所に設けられていた。集落の入口に墓があるのは良くないという意見があり、1965(昭和 40)年に裏山の現在地に統合された [D 氏男性 90 歳代]。



本節では、円における土葬によるソウシキ<sup>15</sup>について、シマ(集落)<sup>16</sup>の長老であるD氏(男性 90 歳代)とG氏(男性 90 歳代)からの聞き取りをもとにみてる。

## 1 土葬による葬儀

### 1) ソウシキの準備

円における土葬の頃のソウシキのほとんどは、亡くなった当日の夜に行われていた。通夜はほとんどなかったといわれている。人が亡くなると近しい親族の人が親族や集落の人に亡くなったことを知らせにまわる。亡くなった人の家の時計を止め、写真や賞状の額を裏返しにする。亡くなった人は、生前寝ていた部屋に北枕か西枕に横たえる。

供物や線香などの枕飾りは、玄関前の板敷きの居間に机をおいて線香や蠟燭、枕団子、膳を据える。やがて死を知った集落の人たちがクヤミ(悔み)にやってくる。当日は、ソウシキの準備作業であるイキフリ(池堀)、棺、ヤギョ(家形・龕蓋)、花、弔い旗作り、炊事など、それぞれのショクアテ(職当て)が行われる。

#### 墓堀・ヤギョ作り・納棺の語り

D氏：男性 90 歳代「土葬の頃は墓ほりや墓づくりが大変だった。墓ほりの担当が 1.5m ほどの深さの穴を掘り、廻りの土が崩れないようにテーブル珊瑚石(ナバイシ)を積み上げて墓場を整え、遺体を埋葬したら、その上にテーブル珊瑚で蓋をして、それに板造りの家形墓(ヤギョ)を乗せる作業をしていた。棺桶やヤギョは特殊技術であったので専門の大工が作っていた。墓堀も大工仕事も朝から 1 日仕事だった(ソウシキは夜に行われていた)。私は納棺の時、祖父母の足と手を縄で縛った記憶がある」。

#### 山入、花作り、炊事手伝いの語り

D氏：男性 90 歳代「葬儀は集落の人総出で手伝っていた。子供や高齢者は花、草履、杖、弔い旗などを作り、壮年者は墓堀や葬具を作るため山に入って材料の切り出しを手伝った。集落の女性は手伝いの人達の昼食作りや葬儀後のあと祓いの食事作りが主な仕事であった」。

### 2) 納棺、門送り、野辺送り

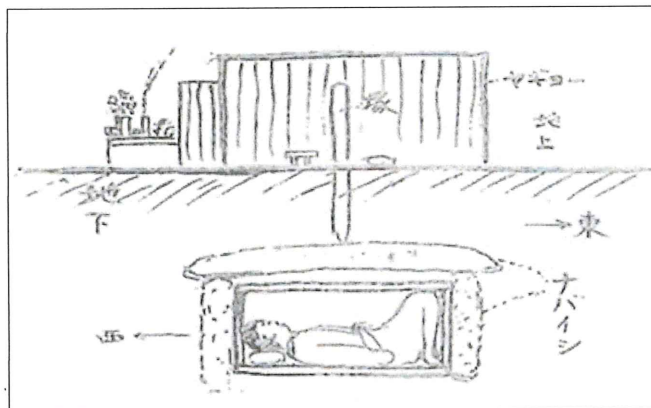
夕方近くになると遺体の湯灌を行う。湯灌のサカミズを汲むとき、柄杓を左手で逆に持って逆手に注ぐ。遺体の清めが済むと帷子を着せ、足袋をはかせ、小銭を白袋に入れて首にかけ、故人の日頃の愛用品を棺に納めて旅支度を整える。棺にものを納めるときは遺族

<sup>15</sup> 円では葬儀をソウシキと呼んでいる。

<sup>16</sup> 奄美では集落のことをシマと呼んでいる。シマは薩摩支配のはるか以前の古琉球のころから用いられ、土地の人々同士が互いに最も親しみと共属意識を感じる用語である [津波 2010:651-658]。

がそれぞれに別れの言葉をかける。納棺がすむと故人に近い身内の人が前後4人で棺を担ぎ、参列者は墓地まで葬列をする。子供や高齢者は家の前で門送りする。

葬列の先頭は、タイ(松明)、弔い旗、マエジュク(前卓)、クワンパク(棺)、ツカ(墓標)、遺影などが続く。墓地の近くでシマブシミシリ(死者にシマの見納めをさせる)を左回りに三回廻る。これは死者に帰る道をわからなくさせるためであるとされる。僧侶(ボンサン)の参与はなく、家族・親族以外の参列者は焼香が終わると焼酎を受けとって帰る。墓堀担当による埋葬がすむと家族・親族は焼香と拝みをしてから帰宅する。そのあと側に控えていた集落の女性たちによるシバ(柴)でのミキャンナカの拝みが終わると、あと祓いとよばれる自宅でソウシキの加勢をした人を家族・親族で接待する。



#### ソウシキの語り

D氏：男性90歳代「ソウシキは夕方から始まり、家族・親族を含めて集落民のほとんどが参列する。ソウシシキが行われる墓地までいけない子供や高齢者は喪家の門口で門送りをする。そして参列者は墓地までノベオクリをする。集落の人達は焼香と拝みが済むと

図2-7 『奄美の生活誌』[恵原 2009:323]より転載作成

焼酎をもらって帰る。墓ほりの係りによって遺体は埋葬され、家族・親族による焼香と拝みをして自宅に帰る。そして近くに控えていた集落の女性陣によってシバ(柴)でもってミキャンナカ(三日七日)を行う。これは同じ日に二回墓に行かないという言い伝えである」。

### 3) 埋葬

土葬では遺体を埋葬後、薄い板で作られたヤギョを置き、その上に目印としてツカ(墓標)を立てる。図2-7に示す埋葬の手順は、「まずイケ(墓穴)の前で棺を下ろし、担ぎ手の一人が青葉で穴の祓いをする。左手に柴を持ち、逆手に三度振る。次に棺の縄の上方を解き、各縄端を4人で持ち、四方から吊るすように降ろす。イケに収まったら棺の上に予め用意してあった広いナバイシ(板状テーブル珊瑚石)を載せ、その上に目印としてツカ(墓標)を立ててから周囲の土砂を穴に落とす。このとき女たちは「イモレヨー」(行きなされよー)などと大声で叫ぶ。穴を埋め終えたらツカを中心としてヤギョ(薄い板張りの家形の

墓)<sup>17</sup>を据え、トームジ(水芋の茎を刻んだもの)、米汁、茶碗に水、酒、青竹の筒に花、線香が供えられる。灯籠はヤギョ(家形)の後方に立てられる。」[恵原 2009:323]。

#### 4) 供物・香典

ソウシキにおいて、集落の人全員が会葬するわけではないが、集落の大半の家から葬式用の供物の提供があったとされる。

田畑千秋の大和村名音における、ある家の葬儀の報告によれば「野菜、素麺<sup>18</sup>、昆布、旗の材料等の贈与があった。野菜は季節のもので大根、里芋、南瓜、胡瓜、唐瓜等々である。昭和の初期まで現金はほとんどなくクヤミ(悔み)に使うものであった。1933(昭和8)年と1964(昭和39)年の供物の比較をみると、昭和8年のものは現金も少しあるが、旗、線香、茶、米、味噌、大豆、麦、薩摩芋、里芋、素麺、餅、昆布、野菜、白豆腐、揚豆腐、蘇鉄のデンプン等々で葬儀にすぐ必要になるものが主体である。」[田畑 1992:162]

「昭和38年になると物より現金の方に主体が移っている。ただそれでも素麺、ワカメ、茶、昆布、メリケン粉、豆腐、菓子等々、葬儀に必要な材料が物で集まってきている。また、中には現金なしに、昔ながらに線香や蠟燭のみを持参している人も散見される。これは自給自足の状態が続いていた集落における相互扶助である。」[田畑 1992:162-163]というようなトーレムツ(到来物)帳の記録公開がなされている。

上記は、大和村名音の供物事例であるが、円の長老に聞くところによると龍郷町円でも同じような供物の内容であったと聞く。現在、奄美大島におけるクヤミはほとんど現金による香典が一般的となっており、それまで華美化しつつあった冠婚葬祭の簡素化を計る意味で、集落ごとに異なるが香典の額を規範化しているところが多いと聞く。

筆者の出身地である大隅半島の南大隅地域でも同様の習わしがあった事を記憶している。現在でも香典の他に線香、あるいはロウソクを供えていることから、奄美大島との類似的習俗がみられる。

お布施は、葬儀における僧侶の読経や戒名の授与の対する謝礼として渡す金銭として理解されている。奄美大島では、自葬を行っていたころ死者儀礼の役割を民間信仰によるユタ神様に依拠してきた。その葬儀が葬儀社の運営する葬儀場で行われるようになり、葬儀に僧侶が参与することで、それまでの死者儀礼の役割を僧侶が担うようになった。それに対する謝礼としてお布施が渡されている。

その金額は寺院や僧侶によって異なり、戒名料は院号ごとに金額が決められていることから決まった金額はないとされている。奄美大島でのお布施は、三万円から五万円が一般的とされている。ところが、最近一万五千元から二万円で参与する僧侶も出ており、葬儀

<sup>17</sup> ヤギョは木の薄い板張りをした家形の墓。数年で朽ちるためそのあとに石塔などを立てて目印にする。奄美大島南部では龜蓋と称している。

<sup>18</sup> 奄美大島では小麦が生産されていないため、ソーメンは鹿児島より移入したと考えられる。1830(天保元)年と1859(安政六)年の砂糖との交換率が素麺100匁に対して砂糖3欣(1斤160匁)なので、島民にとって素麺は大変貴重であった[弓削 2010:284-285]。素麺を醤油で味付けして吸い物にし、通夜、ソウシキ、年忌供養、アラシツ行事に食される。



の簡素化はお布施にも変化をもたらしているといえる。

#### 5) マブリワーシ(死霊別し)による分離儀礼

円では、遺体を埋葬後、七日から四十九日までの間に一度、ユタ神様(霊能力者)によるマブリワーシ(マブリワーシ<sup>マブリワーシ</sup>死霊別し)<sup>19</sup>の分離儀礼[写真 2-4]<sup>20</sup>が行われていた。故人からの家族への遺言などがユタの口から語られる。それでは、実際にマブリワーシを行ったという奄美市笠利在住のユタ W 氏の話を紹介する。



写真 2-4 マブリワーシ(名瀬：越間誠)

ユタ W 氏女性 70 歳代：「マブリワーシは、地域にもよるが今でも行われている。私は数年前に親族が亡くなってマブリワーシをおこなった。儀礼の前に白装束で海に入り首までつかる、そして、もう一度頭を海に沈め身体を清める。それから死者の枕元にすわり神様に祈願する。マブリワーシは、亡くなって七日目から四十九日まで七日ごとに行う。故人の霊魂が自分に乗り移り、故人の生前の思いが全て言葉と身体の変現になって家族に語りかける。私は四十九日の儀礼を終えると体は衰弱し、死人のようになり自分の元の身体に戻るのに 6 ヶ月ほどかかった。」[2015 年 11 月聞き取り]。

W 氏自身はユタであると同時にノロ七代目である。母親も同じユタであったが、それは決して世襲制ではなく神様のお告げによるものだという。龍郷町と奄美市笠利地域ではただ 1 人だけのユタであるが、自分自身の苦しみを考えると家族・親族には継がせたくないという。今は奄美大島内だけでなく、徳之島など奄美全域に赴いて、個人の悩み事の相談に応じている。W 氏によると近年は、マブリワーシ(死霊別し)を行うことは少なくなったが、一部の集落では今でも伝承されているといい、自身葬儀に参列すると死者の霊魂が乗り移り、苦しい思いにかられるので出来る限り葬儀には参与しないようにしているという。

ユタによるマブリワーシ(死霊別し)の「告げ」は、ユタは死者のなりかわりとして相続や贈与に関する遺言になる。ただ、現在のごく一部の地域を除きマブリワーシそのものが行われていないと聞く。

## 2 カイソ(改葬)

<sup>19</sup> 死に霊魂(マブリ・マブイ)を近しい人のマブリ・マブイから分離させる儀礼であり、ユタによる口寄せを伴う[ユタ W 氏]。

<sup>20</sup> 出典：『奄美のシャーマニズム』[山下 1977:286]より転載。



## 1) 洗骨改葬

円を含む周辺地域では、遺体を埋葬してから数年後(奄美大島では七年以上とされている)に掘り上げ洗骨改葬が行われてきた。それは埋葬後に遺体の骨化を待ってから墓を掘り起こし、海岸近くの河口付近で遺体を海水や水で洗骨し、それを骨壺に入れて墓のそばに埋める、あるいは納骨堂石塔に納めるものである。

### 洗骨改葬の語り

**D氏：男性 90 歳代**「祖母の十三回忌(1960 年代)を機に幼児等の他の遺骨を整理するため洗骨し、納骨堂石塔に合葬した。」

**F氏：女性 80 歳代**「洗骨は家の近くの河口付近の海水で洗骨した。掘り上げた遺体には肉片がこびりついており、それは死臭がひどく大変つらい仕事であった。今の若い人にはとてもできないだろう。火葬になってから白骨化した骨をみるとすっきりする」。

**D氏夫人 80 歳代**「1990(平成 2)年に母親が亡くなったが火葬はするなという遺言により土葬にした。十三年忌(2002 年)に墓から掘り上げ洗骨改葬をした」。

## 2) 洗骨改葬による火葬

奄美社会における火葬の普及過程初期に、焼骨ないし火葬と呼ばれる遺体処理が行われている。ここでいう焼骨ないし火葬とは、奄美・沖縄の複葬のなかで、第二次葬(洗骨改葬)の際に死骨を火で焼く行為をいい、奄美社会では近代以降、土葬により埋葬した遺体を掘り上げ洗骨改葬を施した。火葬の受容期であった 1960 年代以降の洗骨改葬の際、調査地である龍郷町円で行われた遺骨の火葬事例について G 氏男性(90 歳後半)の聞き取りからみる。

### 洗骨改葬の火葬の語り

**G 氏男性 90 歳代**：「家内が 1975(昭和 50)年に亡くなり、それから二年後ぐらいに埋葬していた遺体が地下水に浸かってしまった。不憫に思い、遺体は墓を掘り起こし、頭蓋骨は洗骨をして真綿でくるんだ。その他の骨はトタン板に乗せガスバーナーで焼骨し、骨壺に足骨から納め、頭蓋骨は最後に納め、新しく建てた納骨堂(1970 年代建設)に納骨した[写真 2-5]。墓は息子が名瀬で工務店をやっていたこともあり、当時流行の納骨堂石塔を数百万円かけて建てた」。



写真 2-5 納骨堂式石塔

この地域において、火葬が普及するようになったのは、名瀬市(現奄美市名瀬)までの道路網が整備される1960年代以降であるが、1970年代はまだ土葬が一般的であったとされている。前述の洗骨改葬による火葬の事例からすると、掘り出された頭骨は洗骨され真綿でくるみ、その他の骨はトタン板の上に安置された骨をプロパンガスのバーナーで焼いている。焼いた骨は一片ずつ骨壺に入れ、その火葬骨の上に洗骨した頭骨を安置している。

前述の数少ない事例ではあるが、円では少なくとも1990年代まで土葬が行われ、洗骨改葬は女性の仕事として2000年初頭まで洗骨改葬が行われていたこと、洗骨改葬の時期が十三回忌に行われていたこと、そして、火葬の導入初期において洗骨改葬による火葬(焼骨)が行われていたことが窺える。

### 第3節 今日の葬儀

奄美大島では、近世から近代初期にそれまでの風葬から土葬に移行し、葬儀は地域の人々の手によって執行されてきた。1918(大正7)年に名瀬斎場(現奄美市斎場)が設置され、本土からの移住者を中心に火葬が始まり、葬儀社による葬儀業務が始まる。とはいえ「道路事情の問題があって、市内周辺部の集落の人々の利用は難しかったものと思われる」[加藤 2010:16]とされるように、村営火葬場を利用していたのは、名瀬の市街地の人々のみであった。その周辺地域の人々にとって、その利用は容易ではなかったのである。

それが1960年代に入り、それまで徒歩か海路のみであった交通手段が奄美大島全域において道路交通網が整備されると名瀬(現奄美市名瀬)から葬祭業者が進出するようになり、地域の葬儀業務を担うようになった。それに伴い葬儀も自宅での葬儀から奄美市内の葬儀場に移行して行われるようになった。このような状況下、ほんの一例ではあるが1990年代まで土葬が行われ、2000年初頭まで洗骨改葬も行われていたとする証言もある。しかし、それも今日ではほぼ100%火葬に移行している。

本節では、龍郷町円の葬儀でソウシキと火葬およびノウコツノギに立ち会ったことのある当事者や名瀬の葬儀社の話をもとに3家の葬儀事例についてまとめたい。

#### 1 A家の事例—故人：男性・享年83歳

##### 1) A家の家族関係

故人は、円集落でA家の6人兄弟・姉妹(a1. A2. a2. A3. A4)の長男として生まれ、山林業などを生業とし、集落の会計担当など要職を歴任してきたことから集落内での人望は篤かった。配偶者(p2)は、本龍郷出身で親族、知人の多い家系である。故人の兄弟は、二男(A2)と三男(A3)が大阪と奈良に住み、四男(A4)は円集落に住んでいる。長女(a1)は名瀬、次女(a2)は京都に住んでいる。

故人(A1)は、子供を2人(長男1人、長女1人)もうけ、息子(長男：A5)はA家を継ぎ、他集落出身の人と結婚し、4人の子供(男4人：A8. A9. A10. A11)をもうけている。長男は役

所関係に勤めていることから町内外の関係者との付き合いも多い。娘(長女：a3)は、結婚して鹿児島市内に移住し、子供(男2人：A6、A7)をもうけている。A家の家族・親族の大半は、兄弟・姉妹3人を除くと龍郷町町内か奄美市内、あるいは鹿児島市内の近隣都市に住まいを設けている[図2-8参照]。

## 2) A家の葬儀次第

故人は、ある年の6月24日未明に亡くなった。亡くなった時刻に時計の振り子を止める。早朝から親族の人や葬儀社の担当者が集まり、通夜、ソウシキの日取りを決めた。

表 2-1 A家葬儀参列者数

A家(男性・享年80歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜(自宅)	子供	1	1	2	嫁(1)						1	1	娘(1)	3
・仮通夜	兄弟姉妹	1		1		1		1						2
某年6月24日	孫	2		2						1		1		3
・本通夜	いとこ													0
某年6月25日	甥・姪	1	1	2	嫁(1)		1	1						3
・葬具手配	集落の人	20	25	45		24	40	64						109
(V葬儀社)	知人					12	24	36						36
	参列者合計	25	27	52		37	65	102		1	1	2		156
・墓さばくり班	集落の人	3	0	3				0						3
・炊事班	集落の人		13	13				0						13
・山入り班	集落の人	2		2				0						2
・花つくり	集落の人	10		10				0						10
	加勢人数	15	13	28		0	0	0		0	0	0		28
火葬	子供	1	1	2	嫁(1)					1	1	娘(1)		3
某年6月26日	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
12時自宅から出棺	孫	2		2						2		2		4
奄美葬斎場にて火葬	いとこ													0
	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	嫁(1)					6
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	5	2	7		2	3	5		3	1	4		16
告別式	子供	1	1	2	嫁(1)					1	1	2	婿(1) 娘(1)	4
(於)共同墓地	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
某年6月26日	孫	2		2						2		2		4
17:00～	いとこ													0
僧侶は葬儀社手配	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	婿(1)					6
	集落の人	28	31	59		30	22	52						111
	知人					38	32	70						70
	参列者合計	33	33	66		70	57	127		4	1	5		198
ノウコツノギ	子供	1	1	2	嫁(1)					1	1	2	婿(1) 娘(1)	4
(於)共同墓地	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
某年6月26日	孫	2		2						2		2		4
17:30～	いとこ													0
僧侶は葬儀社手配	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	婿(1)					6
	集落の人	28	31	59		30	22	52						111
	知人					38	32	70						70
	参列者合計	33	33	66		70	57	127		4	1	5		198

早朝から親族の人や葬儀社の担当者が集まり、通夜、ソウシキの日取りを決めた。仮通



夜 24 日、本通夜 25 日、告別式・ノウコツノギが 26 日の 17 時からと決まった。親族の人達がそれぞれの分担を決め、故人の関係する兄弟、子供、孫、甥・姪などに亡くなったこと、通夜、ソウシキの日程などを電話連絡する。集落の人達には、災害無線放送で通夜とノウコツノギの日程のみを知らせる。これは集落の人が告別式に参列しないためである。

当日はソウシキとノウコツノギを共同焼香場・共同墓地で行うことになり、V 葬儀社に棺、僧侶、火葬、祭壇、生花、灯籠・ツカ・草履・下駄などの葬具、車、共同焼香場のテント、会葬礼状、新聞社への死亡広告掲載などの手配を依頼した。本来であればソウシキは 25 日であるが、当日は集落行事のハマオレが予定されていたことや大阪の弟(次男)が、仕事の関係で間に合わないという理由から 1 日延ばして 26 日にしたという。

### (1) 通夜

本通夜には、兄妹(A4, a1)、子供(A5・配偶者, a3)、孫(A6, A8, A10, A11)、甥・姪(P2・配偶者)の 11 人と円集落の人達 45 名、他集落・奄美市内在住の地縁者 64 名、他集落の知人 36 名の総勢 156 名の参列があった。本通夜では親族の人達が、翌日のソウシキの墓サバクリ<sup>21</sup>班(3 人)、炊事班(13 人)、山入班(2 人)、花作り班(10 人)などのショクアテを行い集落の人達に依頼した。仮通夜と本通夜は自宅で行われ、家族・親族が 11 人、集落の人が 45 人、他集落・奄美在住の地縁者 64 人、継承者の仕事の関係者 36 人など 156 人の参列者があった[表 2-1 参照]。

### (2) ソウシキ(告別式)・ノウコツノギ(納骨の儀)の準備

他集落の人達や知人の会葬者は、焼香を終えると挨拶して帰る。故人あるいは家族・親族と日頃から親しくしている集落の人達は、焼香が済むと食事と酒が出され、故人との思い出を語り合い適当な時間になると帰る。通夜の食事は親族や集落の女性たちが手伝って作る。翌日は朝から、ショクアテで依頼された集落の人達によって構成される、墓サバクリ班、炊事班、山入班、花作り班に分かれて作業が始まる。

墓サバクリ班は、青年の担当となっており、女性達の炊事班によって供された吸い物を食べてから墓地に出向き、納骨堂式石塔の蓋を開けて内部の清掃と納骨堂の中を整理し、古骨は奥に移動して新しい火葬骨を納骨する場所を確保する。地下式納骨堂石塔墓は、上部の墓石を退けてから地下式納骨堂の蓋を開けて内部を清掃し、同じように新しい火葬骨を納骨する場所を確保する。納骨が終わったら同じ位置に墓石を戻す。

炊事班は、女性たちの担当で、墓サバクリ班の吸い物や手伝いの人達の昼食、そして告別式・ノウコツノギが終わった後のあと祓いの食事の賄い<sup>まかな</sup>をする。

山入班は、壮老年の担当で野辺送りに使用する、タイ(松明)、ツエ(杖)、マエジユク(前卓)、蠟燭立て、ミキャンカ<sup>ミキャンカ</sup>の拝みに供えるシバ(柴)、弔旗の竿などの切り出しと製

<sup>21</sup> 捌里は地頭代の指揮をうけ番所の庶務に従事する。〈捌里〉、〈捌史〉、〈捌庫裡〉などの文字をあてるが、要するに「さばくり」とは、日本古来の「サバクル」、沖縄方言の「サバチュン」(裁く)「サバキユン」(処理する)に由来し、その局にあつて番所の事務を処理するものの意味である[曾根 1983:233]。ここでいう「さばくり」は沖縄方言に由来すると考えられる。



作を行う。花つくり班は、高齢者(シルバークラブ)が担当し、公民館で花(金、銀、黄、紅白の造花)、旗作りを行う。また、草履、下駄は、かつて集落で作っていたが今日では葬儀社に依頼しているという。完成した作り物は、葬列と墓地で使用する。

#### A家ソウシキ参加者系譜

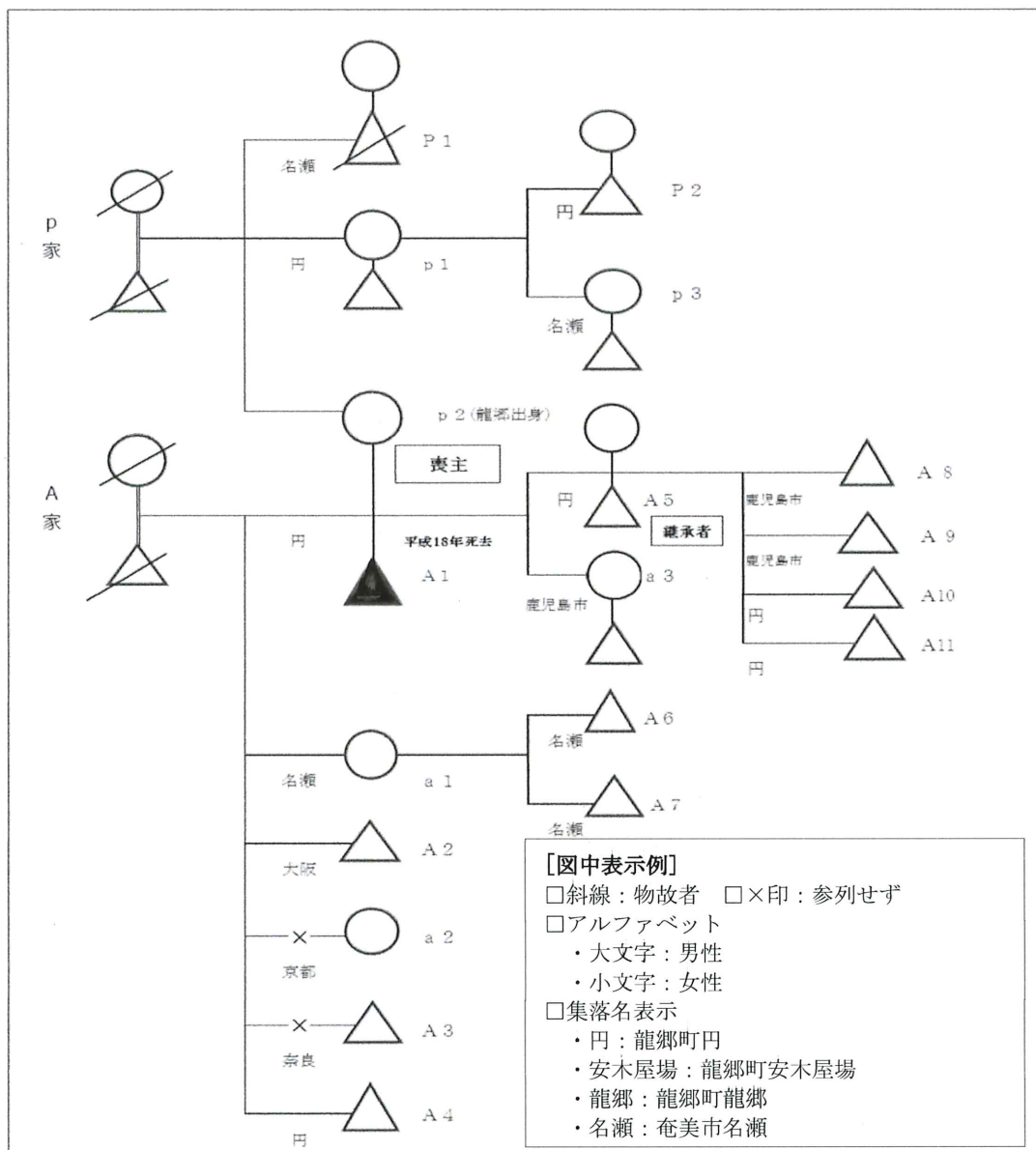


図 2-8

#### (3) 出棺と火葬

翌 26 日のソウシキは、告別式とノウコツノギを集落の共同焼香場で執り行うため、火葬から先におこなわれた。出棺は、故人に近い親族の青年(孫、甥)4 人ほどで表口から棺

を車まで運び、集落を正午に出て約1時間かけて奄美市斎場<sup>22</sup>に着く。火葬の参列者は家族・親族のみで、通夜に参列できなかった弟(A2)、孫(A8)、甥(A6)、姪(p3・配偶者)の6名が参列し、総勢16名の参列となった。

奄美市斎場では、遺体が炉で焼きあがるまで、参列者は食事やお茶、酒を飲んだりしながら待つ。1時間半ほどで焼きあがると係の人から収骨室に案内され、喪主から順に1人ずつ拾骨し骨壺に入れていく。喉仏と頭蓋骨を最後に納めて骨壺に蓋をする。そして、斎場から骨壺の入った桐箱と火葬場の捺印のされた埋葬許可書を受け取り集落の共同墓地管理者に提示する。

#### (4) ソウシキ(告別式)

ソウシキの参列者数は、家族・親族16名、集落の人達が59名、他集落、奄美市在住の地縁者の人たちが52名と知人が70名の総勢198名であった。ソウシキは17時より共同焼香場において始まる。参列者は受付で記帳と香典の提供を済ませ、清めの塩と会葬のお礼状を受け取る。式は葬儀社の進行によって執り行われ、僧侶の読経とともに家族・親族の焼香が行われる。30分ほどでソウシキが終わるとしばらく時間をおいてノウコツノギが執り行われる。

今回の葬儀で火葬のあとに告別式を行った理由に関し、喪家の当主は次のように述べている。

#### ソウシキの語り

A家当主「本来であれば、告別式のあとに火葬を行うのが一般的であるが、当家は集落や集落外にツキアイのある人が多いことから、多くの人達が参列しやすい集落の共同焼香場で行うことを決めた。また、これからますます人口が減っていく中でこれからこのようなソウシキがいつまで続けられるかわからないので多くの人に見てもらいたいということもあり、火葬後に共同焼香場でソウシキをやることにした」。

#### (5) ノウコツノギ(納骨の儀)ーソウシキとノウコツノギ(納骨の儀)

ノウコツノギは同じく共同焼香場〔写真2-6〕で行われる。式は葬儀社の進行により行われ、僧侶の読経に続き家族・親族、一般参列者の順に焼香する。焼香が終わると葬列となる。葬列の際、炊事場で(トウグラ)でタイ(松明)に火をつけ、肉親の男性3人が交替で、左手をコショデ(逆手)にして歩き外の人に渡す。

共同焼香場から墓地まで6本の蠟燭を立てる。参列者は、「松明を先頭にツカ(墓標)、灯籠、ツエ、花、弔旗」〔写真2-9〕、遺骨、遺影の順に橋(川)〔写真2-7〕を渡ってから墓地の近く〔写真2-8〕で遺族を囲んで3回まわる。これは二度とこの世に戻ってこないよう

<sup>22</sup> 奄美斎場の使用料は、奄美市民(成人)が1万3千円、奄美市以外の利用者(成人)は、3万円となっている。その他に休憩室の利用料が加算される。また火葬使用料は大人と小人では、金額も異なる〔奄美市斎場利用規定より〕。

にという言い伝えがある。

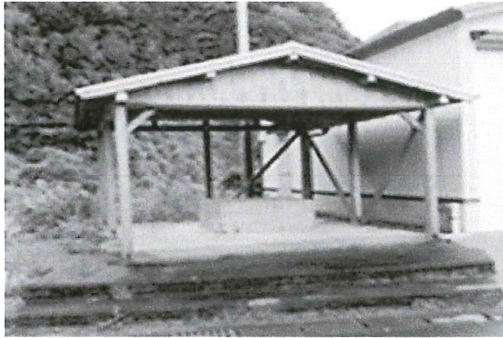


写真 2-6 共同焼香台



写真 2-7 橋(三途の川)



写真 2-8 共同埋葬墓地



写真 2-9 タイ・ツカ・灯籠・花・旗



写真 2-10 墓飾り



写真 2-11 草履・下駄

#### (6)納骨

参列者は共同墓地に着き、納骨と拌み(焼香)が済むと自宅に帰る。ここではミキャンナカ(三日七日)も済みますので、近くに控えていた集落の女性たちがシバでもって拌み(焼香)をする。拌みが済むと女性たちが写真を裏返しにして帰る。

墓サバクリは、古骨を奥に移動して新しい納骨の空間を確保する。納骨の際には、火葬



骨を安置した桐箱から骨壺を取り出して、空いた空間に納骨し、空箱は葬儀社が処分する。葬列で使ったツカ(墓標)、灯籠、ツエ、花、弔旗やあの世ではく草履、下駄はシジュークニチまで墓に供える[写真 2-9 2-10 2-11(柿均氏提供)]。

#### (7)あと祓い

ソウシキが終わる 18 時ごろ、参列者と手伝いをした人たちにあと祓いと呼ばれている食事と酒が振舞われ家族・親族が接待する。女性たちはお酒の準備と接待に追われる。

ソウシキは、通夜、ソウシキ、火葬、あと祓いを通して共食をする。通夜やあと祓いの食事において、男性の参列者は広間に男性同士で寄り合い、女性は部屋の片隅に女性同士で寄り合って男女別々に語り合うということが通例となっている。その炊事、酒の準備などは全て女性の役割としてある。

#### (8)香典と葬儀費用

A 家の葬儀費用について、V 葬儀社の互助会共済(50 万円満期)を利用したが、150 万円ほどかかったという。香典は 180 件ほどの提供があったが、集落の規範で 1,000 円と決められていることから、20 万円ほどの持ち出しとなり葬儀費用をすべて賄うまでにいかなかったという。

### 2 B家の事例—故人：女性・享年 94 歳

#### 1) B家の家族関係

B 家の先祖は、近世の薩摩藩支配下における島役人である與(与)人格の系譜である。故人(d3)は、円集落で P 家の 11 人(D1. D2. D3. D4. D5. d1. d2. d4. d5. d6) 兄弟・姉妹の三女として生まれ、同じ集落の B 家長男のもとに嫁いでいる。

兄弟・姉妹の中で生存者は 3 人(次男、三男、六女)(D2. D3. d6)のみとなっている。弟 2 人(D4. D5)は、戦後すぐ沖縄に移住し、すでに他界している。夫は平成 10 年に 83 歳で亡くなり、子供 6 人(B3. B4. b1. b2. b3. b4)をもうけている。

故人は、施設に 4 年半、その後 3 ヶ月入院していた病院で亡くなった。施設に入居するまでは長男夫婦と同居していた。

長男(B3)は、3 人(2 男 1 女、b5. B5. B6)の子供をもうけ、B 家を継いで、今回の葬儀の喪主を務めている。次男(B4)は東京に住み独身である(2016 年に龍郷町円集落に U ターンし、集落の自治に参与している)。故人の長女(b1)は 2 人(1 男 1 女、b6. B7)の子供をもうけ円集落に在住している。次女(b2)は 2 人(1 男 1 女、b7. B8)の子供をもうけ、三女(b3)は 2 人(2 男、B9. B10)をもうけ、それぞれ奄美市名瀬に在住している。四女(b4)は、1 男(B11)をもうけ京都に住んでいる[図 2-9 参照]。

#### 2) B家の葬儀次第

故人は、ある年の 1 月 29 日未明に病院で亡くなった。亡くなった知らせを受けた家では時計をとめる。当日は朝から親族と葬儀社が通夜、ソウシキの日取りと段取りについて打ち合わせをし、親族が分担して家族・親族への連絡をした。

表 2-2 B 家ソウシキ参列者数

B 家(女性・享年 9 4 歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜(自宅)	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4	婿(1)	1	1	2		10
某年1月29日	兄弟姉妹	2	1	3										3
◆1月29日未明	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
病院で死去。	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人	4	6	10										10
	知人					8	12	20						20
	参列者合計	13	13	26		19	23	42		7	1	8		76
・墓さばくり班	集落の人	3		3										3
・炊事班	集落の人		10	10										10
・山入り班	集落の人													0
・花つくり班	集落の人													0
	加勢人数	3	10	13		0	0	0		0	0	0		13
告別式	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)V葬儀社	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
僧侶は葬儀社手配	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	9	7	16		11	11	22		7	1	8		46
火葬	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)奄美市斎場	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	9	7	16		11	11	22		7	1	8		46
ノウコツノギ	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)共同墓地	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人	12	18	30										30
	知人													0
	参列者合計	21	25	46		11	11	22		7	1	8		76

故人は、ある年の1月29日未明に病院で亡くなった。亡くなった知らせを受けた家では時計をとめる。当日は朝から親族と葬儀社が通夜、ソウシキの日取りと段取りについて打ち合わせをし、親族が分担して家族・親族への連絡をした。

### (1) ソウシキの準備

集落の人たちには、区長が災害無線放送でノウコツノギのみを連絡した。葬儀社には、新聞社への死亡広告掲載、故人の病院からの搬送、死亡届・火葬利用届の依頼、棺、僧侶、祭壇、生花、葬具(灯籠、ツカ、草履、下駄、ツエ)、車、共同焼香場のテント、会葬礼状、会葬お礼品など一切依頼した。また、ソウシキに供える供花、果物籠、電気蓮、蓮

B 家ソウシキ参与者系譜



表 2-2 は、通夜の参加者数を示したものである。自宅の時計の振り子を亡くなった時刻にとめる。



通夜は自宅で行われ、病院から自宅に戻った故人は、北枕にして奥の間に寝かされる。通夜は6時ごろから始められ、一般参列者は、焼香が済むと遺族にクヤミ(悔み)の言葉をかわして自宅に帰る。親族と集落の人たちは、煮物や吸い物を取り、飲食をしながら故人の思い出を語り適当な時間になったら帰る。通夜では親族と区長によるショクアテの段取りが行われ、日頃親しくしている集落の人たちに墓サバクリ(3人)とスイジ班(10人)をお願いした。

通夜のクヤミ(悔み)は、表2-2、図2-9に示すように子供たちの連れ合いを含む10人(B3・s1, b1・配偶者, b2・配偶者, b3・配偶者, b4, B4)、兄弟・姉妹3人(D2, D3・配偶者, d6)、集落と奄美市に住む孫の5人(b6, B6, b7, B7, b8)と島外に住む孫5人(B5, B8, B9, B10, B11)、そして、甥、姪の21人(b5・配偶者, d7, D6・配偶者, D7・配偶者, d8・配偶者, D8・配偶者, d9・配偶者, D9・配偶者, d10・配偶者, d11, D10, d12・配偶者)、家族・親族が46人、集落の人達10人、子供たちの仕事の関係20人の総勢76人の会葬者があった。

通夜に集落のクヤミが少ないのは、通夜が亡くなった当日の平日(木曜日)に行われていることから集落の就業者の大半をしめる役場や会社員の参列が少なかったためという。

### (3) ノウコツノギの準備

翌日は、朝から通夜の「ショクアテ」で依頼された集落の人達がノウコツノギの準備のために墓サバクリ班と炊事班に分かれて作業を始める。まず、墓サバクリ班が炊事班の作った吸い物を食べてから墓地の納骨堂の掃除と整理を行う。墓サバクリは、集落の青年達の労力扶助によるものである。

炊事班は、墓サバクリ班の吸い物作りとノウコツノギのあとのあと祓いで煮物、吸い物などの食事を作る。家族・親族は、告別式と火葬に参列のため、これらの準備作業は集落の人達のみによる作業である。

### (4) ソウシキ

ソウシキと火葬の参列者は家族・親族のみである。家族・親族は、翌朝の早くに自宅を出発し、約1時間かけて奄美市内のV葬儀場[写真2-12]に到着する。ソウシキは10時から葬儀社の司会進行により、僧侶の読経に始まり遺族の焼香、親族焼香と続く。このソウシキは日本本土と同じような式次第となっている。

焼香が終わり、最後のお別れになると生花が参列者に渡され、死者に声掛けしてからそれぞれに棺に納める。葬祭場からの出棺の時は、近親者の青年4人で棺を車まで運ぶ。ある葬儀社によると、近年は高齢者が多くなり、棺を運べる人が少なくなり葬儀社の職員が手伝うことが多いという。

### (5) 火葬

ソウシキが終わると、葬祭場から車で約20分の奄美市斎場[写真2-13]に移動し火葬が行われる。ソウシキと火葬の参列者は表2-2の通りであるが、両儀礼ともに参列者は同じである。参列者はB家が、B3・配偶者・y1, b1・配偶者, b2・配偶者, b3・配偶者, b4, b5・

配偶者, b6, B5, B6, b7, B7, b8, B9, B10, B11 の 22 人、姻戚の X 家が D2, D3・配偶者, d6, D6・配偶者, d7・配偶者, d8・配偶者, D8・配偶者, d9・配偶者, D9・配偶者, d10・配偶者, d11, D10, d12・配偶者の 23 人となっている。これに島外に住むふたいとこ(1人)が参列し、家族・親族の参列者は 46 人となった。

奄美市斎場では、遺体を炉に入れる前に僧侶による読経があり、参列者は遺族より順に焼香する。それが済むと炉に入れられ約 1 時間半で焼きあがる。その間に参列者は休憩室で葬儀社が準備した精進落としの食事をしながら遺体の焼き上がりを待つ。

骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に拾骨し、骨壺に足骨から入れ最後に喉仏と頭蓋骨を納める。火葬場から火葬骨を納めた骨壺の入った桐箱とともに火葬場の捺印のされた埋葬許可書を受け取り集落の共同墓地管理者に提示する。

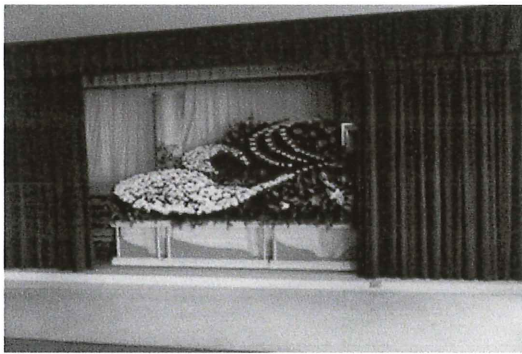


写真 2-12 V 社葬祭場

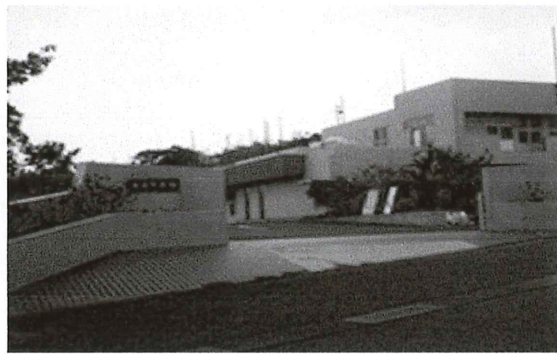


写真 2-13 奄美市斎場

#### (6) ノウコツノギ(納骨の儀)

火葬が済むと、約 1 時間かけて集落に帰り、夕方より共同焼香場でノウコツノギが始まる。

##### ノウコツノギの語り

A 氏：男性 50 歳代「これはある人に聞いた話だが、ノウコツノギの始まりは奄美市内でソウシキが行われるようになって、高齢者あるいは仕事の都合(公務員や会社員が多い)や交通の便が悪いことから葬儀に出られない人たちがいる。そこで葬儀に出たくとも出られない人のために集落で葬儀ができるようにということから始まったという話を聞いたことがある」。

D 氏：男性 90 歳代「土葬の葬儀は、家から喪家と集落の人を含めて墓地まで野辺送りをした。火葬になってから奄美市内の葬祭場でソウシキをやるようになり家族・親族と親しい集落の人だけ参列するようになった。ノウコツノギがいつごろに誰がどのような理由で始めるようになったのかわからない。私も祖父に竹細工やわら細工を学んだけれども、ノウコツノギが始まった理由を聞いたことはなかった。今になって聞い

ておればよかったと思っている」。

**G氏：男性 90 歳代**「昔は墓ほりや墓作りなどは結構難儀な作業だったよ。火葬になってからはそのような労力はないが、ソウシキが 1 日 2 日で終わるのは寂しい気がする。ただ、このあたりでは名瀬でのソウシキとは別に、ノウコツノギというソウシキをやっている。当日は集落の人総出で花づくりや弔旗づくり、食事づくりなど手伝っているよ」。

### ノウコツノギと集落の役割

**B 区長(2016 年当時)**：「ノウコツノギは、喪家と集落の区長がショクアテなどの段取りをする。通夜で翌日のノウコツノギのショクアテをする。青年は墓サバクリ、青壮年者は山入り班(松明や花や弔旗用の竿、杖など材料の切り出し)高齢者は花づくり・弔旗作り班、集落の女性は炊事班をそれぞれ願ひする。集落で用意できない草履、下駄などの葬具は葬儀社に頼んでいる」。

奄美市斎場から戻り、16 時<sup>23</sup>から共同焼香場でノウコツノギが始まる。参列者は受付で記帳と香典の提供を済ませ、清めの塩と会葬のお礼状を受け取る。式は葬儀社の進行により、僧侶の読経に引き続き家族・親族、その他参列者の順に焼香する。焼香が終わると親族と集落民による葬列となる。

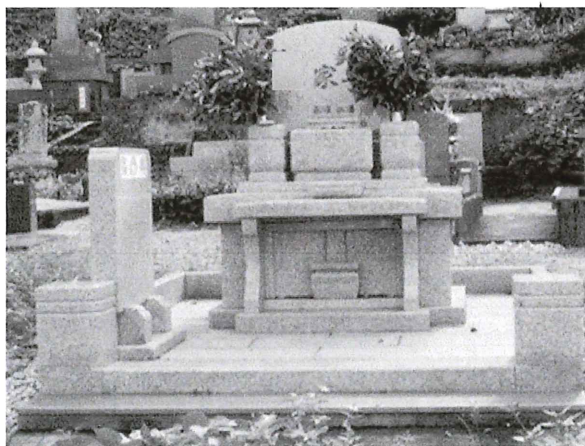


写真 2-14 ノーコツドー(納骨堂=カロート)

葬列の際、炊事場で(トウグラ)でタイ(松明)に火をつけ、肉親の男性 3 人が交替で、左手をコショデ(逆手)にして歩き外の人に渡す。共同焼香場から墓地まで 6 本の蠟燭を立てる。集落外や知人など一般参列者はここで別れをする。葬列は、松明を先頭にツカ(墓標)、灯籠、ツエ(杖)、花・弔旗、遺影の順に橋(川)を渡ってから遺族を囲んで左周りに三回まわる。

これは死者が 2 度とこの世に戻ってこないようにという言い伝えがある。参列者は共同墓地に着くとノーコツドー(納骨堂=カロート)へ納骨〔写真 2-14(2018 年筆者撮影)〕と拝み(焼香)をする。拝みはソウシキ組とミキャンカ組に分かれて拝む。

納骨は、火葬場から渡された火葬骨を安置した桐箱から骨壺を取り出して納骨堂に納骨

<sup>23</sup> 円での「ノウコツノギ」は、通常夏場は 17 時から、冬場は 16 時から行なわれている。



する。その際に桐箱は葬儀社が棄却する。ソウシキ組の拝み(焼香)が済むと家族・親族は自宅に帰る。

そして、近くに控えていた集落の女性達がシバ(柴)を供えてミキャンカ(三日七日)の拝み(焼香)をする。拝み(焼香)が済むと、女性たちは写真を裏返しにして帰る。最後に墓サバクリ班が納骨堂の仕舞いをし、拝みを済ませて喪家に帰る。

納骨は、火葬場から渡された火葬骨を安置した桐箱から骨壺を取り出して納骨堂に納骨する。その際に桐箱は葬儀社が棄却する。ソウシキ組の拝み(焼香)が済むと家族・親族は自宅に帰る。

そして、近くに控えていた集落の女性達がシバ(柴)を供えてミキャンカ(三日七日)の拝み(焼香)をする。拝み(焼香)が済むと、女性たちは写真を裏返しにして帰る。最後に墓サバクリ班が納骨堂の仕舞いをし、拝みを済ませて喪家に帰る。

喪家では、家族・親族がサバクリ(手伝い)をしてもらった人達や集落の近しい人たちを食事(ソーメンの吸い物や豚の煮物など)と酒でソウシキの労をねぎらいながら接待する。

ノウコツノギは、平日にも関わらず家族・親族はもとより集落の人達 30 名を含め総勢 76 名の参列者があった。

#### (7) 香典・供物の提供

故人への香典の提供は、参列者はもとより、新聞広告で訃報を知った集落の人や子供たちの会社の知人を含めて 200 件以上あったという。また、家族・親族からのソナエモノ(供え物)はソウシキが終わると、葬儀社は、喪家に持ち帰り祭壇にシジュウクニチまで飾られる。香典や供物は、シジュウクニチや年忌法要のたびに家族・親族から提供されており、そのたびごとのソナエモノを通じて、家族・親族関係を確認している。

#### ノウコツノギの飾り物



写真 2-15 マエジュク・灯籠

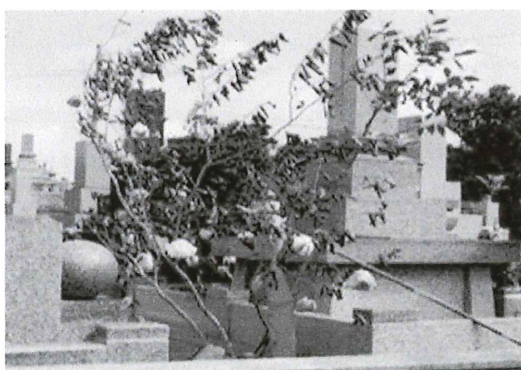


写真 2-16 花・弔い旗

(注) 写真 2-15 2-16 は、近隣集落の安木屋場におけるノウコツノギの飾り物である。

#### (8) 位牌と財産の継承

B 家では、故人(d3)が亡くなったことにより、故人の位牌を誰が面倒をみるかという問

題があった。故人の位牌は、家族・親族との話し合いにより長男(B3)が相続することに決まった。従って、長男(B3)は両親(B1. d3)と配偶者(y1)両方の位牌を継承することになった。また、B家の家督は、UターンしたB3の次男(B6)の継承が決まっている。

### 3 C家の事例—故人：男性・享年63歳

#### 1) C家の家族関係

故人は、C家の3人兄弟の三男として生まれ、高校を卒業してから関東の会社に就職した。その後、両親が亡くなったこともあり、定年退職してから平成28年にUターンし家産を継承している。移住してから2年目の11月に海釣りに行き事故死した。長兄は奄美市内に在住し、次兄は関東に在住している。また、故人は奄美にUターンする際に妻と離別している。子供は3人(男2人、娘1人)をもうけ、長男、次男、娘は関東にそれぞれ在住している。

#### 2) C家の葬儀次第

##### (1)葬儀の準備

故人は、ある年の11月19日に亡くなり、翌20日に通夜、21日にソウシキが行われた。19日の夜は、家族・親族と葬儀社間で通夜、告別式の段取りについて話し合い、通夜は20日、告別式、火葬、ノウコツノギは21日と決まり、集落の人には翌朝、災害無線放送でノウコツノギの日程を連絡した。

葬儀社には、新聞社への死亡広告掲載、故人の病院からの搬送、死亡届・火葬許可書申請手続きの依頼、棺、僧侶、祭壇、生花、葬具(灯籠、ツカ、草履、下駄、ツエ)、車、共同焼香場のテント、会葬礼状、会葬お礼品など一切を依頼した。

##### (2)通夜

表2-3に示すように、通夜は自宅で行われ、家族・親族24人参列と同級生と知人8人が参列している。集落の人には、ノウコツノギのショクアテで集落の人3人に墓サバクリを依頼した。ソウシキの取り仕切りは、奄美市内に住む長兄が務めている。関東に在住の次兄と故人の長男、次男、長女は、仕事を休んで通夜に参列している。

##### (3)ソウシキ

表2-3は、21日に執り行われたソウシキ、火葬、ノウコツノギの参加者数を示したものである。ソウシキはV葬儀場で行われ、子供2人(長男と長女)、兄弟2人、いとこ8人、甥・姪6人、同級生3人、総勢21人の参列となっている。

奄美市斎場で行われた火葬には、子供2人、兄弟2人、いとこ2人、甥・姪6人の総勢12名の参列である。奄美市斎場では、遺体を炉に入れる前に僧侶による読経があり、参列者は遺族より順に焼香する。それが済むと炉に入れられ約1時間半で焼きあがる。

その間に参列者は休憩室で葬儀社が準備した精進落としの飲食をしながら遺体の焼き上がりを待つ。骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に拾骨し、骨壺に足骨から入れ最後に頭蓋骨を納める。拾骨が済むとノウコツノギが行われる円に戻る。火葬場か

ら火葬骨を納めた骨壺の入った桐箱とともに火葬場の捺印のされた埋葬許可書を受け取り  
集落の共同墓地管理者に提示する。

表 2-3 C 家ソウシキ参列者数表

C家(男性・62歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜	子供									2	1	3		3
某年11月20日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
◆定年後Uターン	孫													0
事故死	いとこ	5	5	10	嫁(5)	1	2	3						13
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人	1	2	3	同級生	3	2	5	同級生					8
	参列者合計	6	7	13		8	7	15		3	1	4		32
・墓さばくり班	集落の人	3		3										3
・炊事班	集落の人													0
・山入り班	集落の人													0
・花つくり	集落の人													0
	加勢人数	3	0	3		0	0	0		0	0	0		3
告別式	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)V葬儀社	孫													0
僧侶は葬儀社で手配	いとこ	2	2	4	嫁(2)	2	2	4						8
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人	1	1	2	同級生	1		1						3
	参列者合計	3	3	6		7	5	12		2	1	3		21
火 葬	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)奄美市斎場	孫													0
	いとこ	1		1			1	1						2
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	1	0	1		4	4	8		2	1	3		12
ノウツノギ	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)共同墓地	孫													0
17:00～	いとこ	5	5	10	嫁(5)	1	2	3	姪(1)嫁(1)					13
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人	7	13	20										20
	知人		2	2	同級生	3	1	4	同級生					6
	参列者合計	12	20	32		8	6	14		2	1	3		49

#### (4)ノウコツノギ(納骨の儀)

ノウコツノギの参列者数は、子供2人、兄弟2人、いとこ13人、甥・姪6人、集落の人20人、同級生6人となっている。表2-3に示すとおり、ノウコツノギの参列者は、家



族・親族 23 名、集落の人達 20 名、知人 6 名の総勢 49 名であった。この葬儀において集落の人達に依頼したのは、墓サバクリ(墓さばくり)の手伝いとミキャンカ(三日七日)のオガミである。葬列に使用する葬具一切は、葬儀社に依頼した。

ノウコツノギは、集落の共同焼香場において夕方 5 時より始まる。参列者は記帳と香典の提供を済ませ、清めの塩と会葬のお礼状を受け取る。式は、葬儀社の進行に始まり、僧侶の読経に続き、家族・親族、一般の参列者の順に焼香とオガミ(拝み)をする。

焼香が終わると、集落外や知人など一般参列者はお別れとなる。そして、家族・親族および集落の人たちによる葬列となる。葬列では、共同焼香場から墓地まで 6 本の蠟燭を立てる。参列者は、松明を先頭に、ツカ(墓標)、灯籠、ツエ、花、弔旗、遺影の順に橋(川)を渡ってから遺族を囲んで三回まわる。これは再びこの世に戻ってこないようにという言い伝えがあるためである。

参列者は、墓地での納骨とオガミが済むと自宅に帰る。ここでは、ミキャンカも済ますので近くに控えていた集落の女性たちがシバ(柴)を供えてオガミをする。オガミが済むと写真を裏返しにして帰る。納骨堂への納骨の際は、火葬骨を安置した桐箱から骨壺を取り出して納骨する。空になった桐箱は葬儀社が処分する。

C 家の事例において、故人が U ターンしてから 2 年余りとシマとのツキアイが比較的浅いにも関わらず 20 名の参列者があった。ただ、この中で次男は通夜には参与しているが、ソウシキ、火葬、ノウコツノギと参与していない。このことは、仕事の都合に関係していると考えられる。

#### (5) 位牌と財産の継承

C 家では、故人(世帯主)が亡くなったことにより家族・親族間で家産や位牌と財産の継承<sup>24</sup>について話し合いがなされた。子供の長男と次男は、奄美に移住する意思は毛頭無く、故人の長兄は奄美市内、弟は関東に住んでいるが、2 人ともそれぞれに家族があることから家督を継ぐことは難しく未だ結論は出されていない。

### 4 葬墓制の変化

#### 1) 葬法の変化による墓制の変化

死者の弔いの場でもある円の墓は、葬法の変化とともに墓の形態にも変化がみられる。円集落は、もともと與(与)人格であった島役人を始祖としていることもあり、葬墓制においても、薩摩・鹿児島直接支配下による影響が大きかったものと考えられる。

本項では、円の葬墓制に関し、同じ龍郷町内の事例をも参考にしつつ、近世以降の変化を

<sup>24</sup> 奄美の祭祀財産の相続は、親の世話を誰がするかによって相続者が決まるという規定であり、長男、長子、男子規定が存在しない〔渡邊 1990:72〕。それに近代以降、日本本土からの「イエ」化の浸透による長男・長子優先選択的相続が加わることになる〔及川 2014:233〕。及川の発言する、すなわち日本本土からの影響は実際には証明されていないが、かつては長男が優先されたものの比較的最近(戦後あたりから)都合のつくものが親の面倒をみて、財産を継ぎ、位牌も相続するというのが奄美では一般的である。

みてみる。

円集落において、かつて集落からはなれた近隣の安木屋場集落寄りの崖下洞窟での風葬が行われていた。それが明治期から大正期にかけて、集落の西側裏山の斜面と今の公民館のある集落の入口付近の二ヶ所に共同墓地が設けられた。さらに 1965(昭和 40)年には集落の西側裏山の現在地に整備統合された。移転時の議論として墓は動かすべきでないとか、集落の入口に墓があるのは良くないという賛否両論があり、かなり紛糾したとされる。

墓地は、山の緩やかな斜面を利用して作られており、集落からは 300m ほどの距離にあり、一般の人には程よい散歩距離であるが、高齢者にとってはちょっと難儀な距離でもある。

円は、三方を山で囲まれ、限られた平地の集落であることから、墓地の移転にあたり集落からほど近い裏山の斜面に共同墓地を設けたのではないかと考えられる。また、長老の話によると洞窟墓所から集落領域への移転は、1884(明治 17)年に布告された「墓地及埋葬取締規則」の通達による影響が大きかったのではないかという。

## 2) 葬墓制に関する行政の関与

『沖永良部島郷土資料集』に収録された「沖永良部島諸事改正令達摘要録」によれば、鹿児島県庁は 1872(明治 5)年の 6 月に最近、自葬を執り行う者もいると聞くが、今後はそうしてならないので、葬儀は神官か僧侶に頼むべきこと。さらに、1877(明治 10)年 9 月には、明治初期の沖永良部を含む奄美においては、死者を埋葬せず、喪屋と称される小屋に葬った。それは甚だしく不宜事なので、速やかに埋葬に改めるよう諭達が出されている。

そもそも、近代以降の明治政府における墓地行政はどのようなものであったか、小松みどりの記述をもとに考察する。1874(明治 7)年に内務省地理局は「墓地処分内規則」を出し、その中で「墓地」を次のように定義している。

第 1 条 死人ヲ埋メ木石等ヲ以テ其地ニ表識スルモノ之ヲ墳墓と称ス。

第 2 条 墳墓陳列一區画ヲ為シ政府ノ許可ヲ受ケ又ハ帳場ニ記載スル者之ヲ墓地又ハ埋葬地ト称ス。

明治政府はこれ以降、墓地に関する法令を次々と発令している。1884(明治 17)年制定の「墓地及埋葬取締規則」では、公衆衛生と治安維持の観点から墓地を行政が管理する場所とし、墓地や火葬場の運営を許可制とした。さらに、墳墓の扱いについて、1898(明治 31)年に施行された明治民法第 987 条で「系譜、祭具及墳墓ノ所有權ヲ承継スルハ家督相続ノ特權ニ屬ス」と規定し、「祭祀は継承するもの」という観念を作り上げた[小松 2014:110-111]。

明治民法が指す「家督相続」とは、第 970 条によれば「直系の男子優先、嫡出子優先、年長者優先」であり、墳墓などの祭祀財産は、長男子が継承する家督相続の特権と定められている。因みに現行の「墓地、埋葬等に関する法律」では、「墓」<sup>25</sup>という単独の言葉は使用されておらず、「墳墓」と「納骨堂」に分類されている。

墳墓は「死体を埋葬し、又は焼骨を収蔵する施設」(第 2 条第 4 項)であり、納骨堂とは

<sup>25</sup> 墓とは①死者の遺骸や遺骨を葬った所。つか。おくつき。墳墓。②墓碑。墓石[広辞苑]とあり墳墓と同じ意味と捉える。

「他人の委託を受けて焼骨を収蔵するために、納骨堂として都道府県知事の許可を受けた施設」(第2条第6項)を指す。また、墳墓を設ける区域を墓地といい、都道府県の許可を受けた地域でなければならないとされている[小松 2014:111]。

しかし、これらの明治政府における矢継ぎ早の行政指示に対し、土地の人々が直ちに応じたわけではなく、それまでの藩政への反発もあり、土葬への移行は地域によって異なるものであった。

### 3)墓の変化

#### (1)洞窟墓

前述の通り、円の古老に聞くとところによると、近隣の安木屋場集落寄りの崖下に洞窟墓所があったとされ、ここでは、遺体を洞窟内に安置する死体遺棄地となっていた。洞窟墓は風葬による洞穴内に遺体を安置し入口を塞ぐ墓所であり、破風墓の原形とされている。

奄美大島の多くの集落では、洞窟(ギシ・ジシ)あるいは洞穴に葬る風葬が一般的であったとされている。龍郷町の隣町の奄美市笠利町(旧笠利町)宇宿貝塚遺跡の台地の崖下に洞窟が4基あり、トフル墓として使用されていた。このトフル墓の前面は、テラス状になっており、人が容易に入ることが出来る。大きさは1号が最も大きく開口部は3m~4mである。2号は開口幅2.5m、奥行きは3~3.5m、3号は開口幅1.7m、奥行き1.5mである。トフル墓としては小規模である。なお、「トフル」とは「天国に通じる道」という意味がある[中山 2009:99]。

その宇宿貝塚から4kmほどはなれた奄美市笠利町土浜の海岸段丘山手側にイヤンヤ洞窟遺跡がある。その洞窟内は1975年頃まで風葬墓と利用されており、中には人骨が散乱している[中山 2009:82]。円の洞窟墓もイヤンヤ洞窟と同じようなものであったと考えられる。

#### (2)土葬への移行

さて、奄美大島における墓の変化については、トフル墓においても確認することが可能である。宇宿貝塚遺跡のトフル墓の前にヤマト式石塔がある。このような石塔が立てられるようになったのは、薩摩藩の土葬政策による近世後半から近代前半と考えられる。

元来、トフルは、洞穴において風葬が行われていた墓所であり、洗骨改葬も行われていた。それが薩摩藩の土葬政策により、トフル墓の前庭でいったん土葬し、のちに洗骨改葬して骨壺に入れ、トフル墓のなかに納めるようになった。その後、土葬ののちに洗骨改葬して、ヤマト式角柱石塔墓の後に骨壺を埋めて拝むという儀礼が行われるようになった[下野 1995:104]。

以上のことからわかることは、一般島民への石塔墓の普及が明治期であることを考えると、トフル墓の前庭での土葬による洗骨改葬が明治以前に行われていることがわかる。

### 4)土葬による墓制

#### (1)近世島役人層の墓

奄美大島における薩摩藩に連なる近世島役人層の墓の形態は、はっきりしており、死者の氏名や身分、死亡年月日が刻まれた石塔の下に埋葬されている。石材は、鹿児島山川町



産の山川石が多く使われている。津波高志は大和村の葬墓制研究の中で、大和村大和浜に「寛政四壬子」（1792 年）と刻まれた最も古い墓があることを報告している[津波 2012:84]。

筆者が、調査した龍郷町円土族の墓 [写真 2-17]、龍郷町大勝石塔 [写真 2-18] は、文久、慶応年間の刻まれた墓が古く、次いで明治年間と続いている。

津波の報告による大和村の寛政四壬子 (1792 年) の墓を考慮すると、18 世紀後半頃からこれらの墓と葬法が出現していたことになる。円の島役人層を初めとした薩摩藩に連なる人々が、個人名を記した石塔墓を建てはじめ、シマの人々も後々それに倣っていったものと考えられる。

五来重によれば、日本において五輪石塔が墓碑または供養塔として平安時代末期から流行するようになり、江戸時代の中頃から現在みられるような角柱型石塔が現出するようになったと述べている [五来 2022:237]。

このことから推察すると、円を含め奄美大島各地における島役人層に関係する墓の五輪石塔や角柱石塔は、江戸時代後期に本土よりもたらされたものと考えられる。

龍郷町円土族の墓(文久三年)



写真 2-17

龍郷町大勝石塔(慶應元年)



写真 2-18

## (2) 石塔・納骨堂式石塔墓

やがて、明治期から大正期にかけて集落近辺に墓地が整備されるようになる。土葬は、遺体を埋葬し、その上にヤギョを置き、その上に目印としてツカを立てる。そのヤギョが朽ちるとナバイシを目印とした。数年後に遺体を掘上げ、洗骨後に遺骨をナバイシあるいは石塔 [写真 2-19, 2-20] の地下および石塔の後ろに骨壺を完全に埋めずに埋葬していた。

明治期以降になると、石塔そのものや洗骨した遺骨を納める納骨堂を設けた「〇〇家先祖代々の墓」とか「〇〇家の墓」を碑銘とした日本本土式石塔が現れ始める。これは墓の文化が個人的な墓碑から「イエ」的な「家墓」に変容していったものとする。やがて、戦後になると、それまでのナバイシ墓や石塔墓に代わって、墓のほとんどが日本本土式納骨堂付石塔に変わっていく [写真 2-21, 2-22]。

石塔墓



写真 2-19

石塔墓

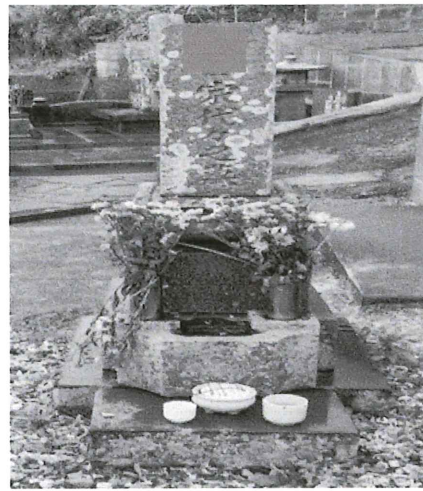


写真 2-20

納骨堂式石塔

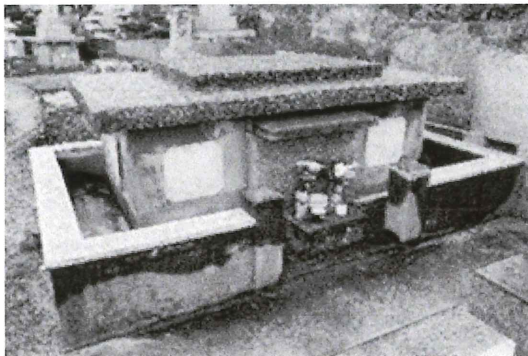


写真 2-21

納骨堂式石塔

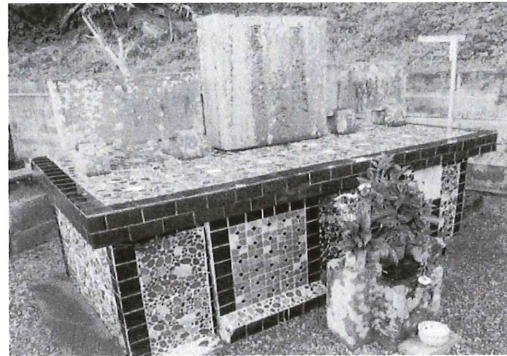


写真 2-22

### 5)火葬に移行後の墓制

1960年代以降の火葬の普及とともに日本本土式納骨堂付石塔が移入され、墓地の整備が進むと共に近年は、近隣に対する見栄もあり、年々高級化、大型化する傾向にある〔写真 2-23, 2-24〕。このような墓の大型化と高級化の傾向に関し、「墓は先祖祭と死者供養の場所であり、決して個人や家の財をほこる場所ではない。その供養は、死者の生前の罪穢を祓い清めることである」という五来重の意見もある〔五来 2021:213〕。

そのような中、円の事例でもわかるように、奄美大島の慣行として旧暦月二回の墓参り、年忌、盆、ミハチガツの先祖祭などがあり、墓参のたびの墓清掃と生花の活け替え、そして転出一族の複数の墓守は、高齢者にとって労力的・経済的な負担が大きい。その上、カロート式石塔墓の造立を新たに考えている年金暮らしの高齢者にとって、切実な問題としてのしかかっている。さらには、少子化により継承者のいない世帯が増加してお



り、墓管理における今日的な問題として提起されている。

円共同墓地



写真 2-23 円共同墓地

円納骨堂式石塔

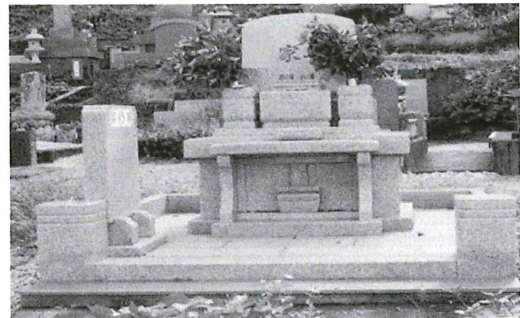


写真 2-24 円納骨堂式石塔

## 6) 祭祀財産の継承

円集落の墓地は、集落からほど近く山の斜面を利用して造られた、高齢者にとって少々難儀な場所である。円集落は龍郷町の中でも一段と高齢化が進んでいる地域である。高齢者にとって毎月旧暦 1 日と 15 日の墓参と生花の活け替えは経済的・労力的に大きな負担となっている。

日本の民法では、墓地の祭祀財産の所有権は、故人の属した家族が所有することになっている。このような継承問題と集落の墓地管理について、集落の人達がどのように考えているのか、2016 年 2 月に行った、4 組の家族への聞き取りは次のようなものであった。

### 祭祀に関する語り

**H 氏：男性(90 歳代)**「名瀬に息子が住んでいて、息子の嫁と一緒に住まないかと声をかけてくれるが自分が元気なうちはここの墓を守っていきたい。私がいなくなった後は息子が墓の面倒を見ると言っている」。

**D 氏夫妻(夫 90 歳、妻 80 歳代)**「長男は名瀬、次男は宮崎、三男は東京、四男は海外協力隊員で今は同居している。長女は千葉に住んでいる。今、墓は自分たちで見ているが、それとは別に叔父叔母の墓を 6 基管理している。墓地は今のままで良いと思うが将来的にどうなるか」。

**I 氏：女性(80 歳代)**「現在長男夫婦と同居している。長女は大阪、次男は宮崎、三男は東京に住んでいる。墓は、将来子供たちが見ると言っている。長男と次男は、定年になったら帰ってくると言っている。墓地はしばらく今のままで良いと思うが、将来的には共同納骨堂なども考えても良いと思う」。



H氏：夫妻(夫婦ともに 80 歳代)「子供は息子が 5 人と娘 1 人いて長男は同じ集落に住んでいる。次男は鹿児島市内で教師をしているが管理職になるのは嫌だと言っている。退職したらシマに帰ってくるのだろう。他の 3 人は島内に住んでいる。跡継ぎは長男が近くに住んでいるので心配はない。ただ、自分の家はともかく、集落のことを考えるといずれ何らかの検討するときがくると思う」。

円集落では、1950 年代 150 基の墓石が、現在 129 基に減少している。このことは改葬で墓石を移したか、無縁仏、非継承墓あるいは他出地への改葬が増えていることになる。この集落では、2013 年から 2015 年の 3 年間で墓じまい(改葬)[写真 2-25、2-26]<sup>26</sup>が 3 件あったという。これは高度成長期に島外に移住した人たちが、自分たちの行く末を考える年代となっており、自分たちの住んでいる場所に新しく墓や永代供養納骨堂などを購入したことによるものと考えられる。

墓を改葬した場合、元の所有者が更地にする規定がある。円集落で新たに墓地を購入する場合、地代は 20,000 円と比較的安価であるが、ここしばらく新規購入者はいないという[2016 年当時の B 区長]。

改葬後の墓地 A

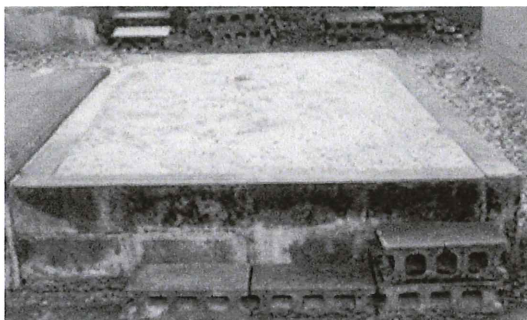


写真 2-25 2016 年改葬後墓地 A

改葬後の墓地 B(白線の枠内)

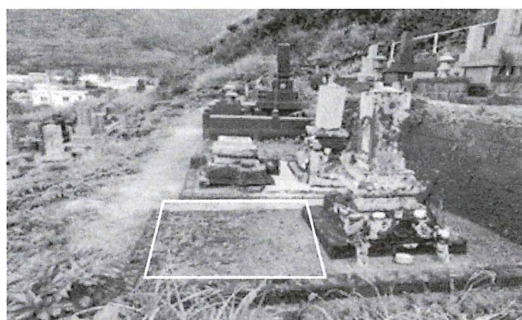


写真 2-26 2016 年改葬後墓地 B

墓地管理は、墓地の購入代でまかなわれており、それも新規購入が無いと厳しい状況であるという。現在、当集落において墓のない家が数件あるとされているが、それも経済的な問題によるものと聞く。

円の墓参りは、月毎の墓の掃除と生花の活け替えがあり、高齢者にとって労力的・経済的に大変な作業である。その中で一族の複数の墓守をしている人も何人かいて、その都度生花の活け替え[写真 2-27、2-28]を行っており、経済的負担が大きいという。今回の 4 件の聞き取りで、祭祀財産継承で早晩の問題を抱えている家はなかったが、人口減少と高齢化による墓管理の不安は拭えないもののように感じられた。

<sup>26</sup> 写真 2-25 と 2-26 はあくまでも円集落墓地における改葬事例である。

鹿児島は、生花の消費率が高い県といわれているが、これは頻繁に墓参りをして生花を手向けるためであるとされる。ただ、最近の奄美市や近隣集落へ移住している人や会社勤めの世帯は、頻繁に墓参が出来ないことや経済的なこともあり造花を手向ける人も増えていくと聞く。

龍郷町安木屋場の墓の生花

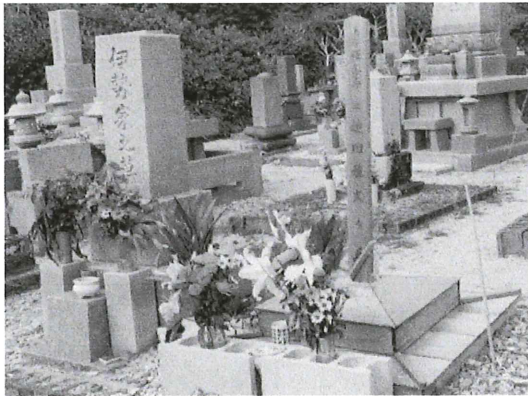


写真 2-27

龍郷町戸口の生花焼却場



写真 2-28

(注) 写真 2-27、2-28 は筆者撮影による龍郷町内墓地の供花のイメージです。

区長によるとここ数年、墓の無縁化、非継承墓、あるいは他の所へ墓を移すことが増えていると聞く。このように人口減少と高齢化の進む集落において墓管理は切実な問題として顕在化している。しかし、このような状況下において、墓地は葬儀のノウコツノギ(納骨の儀)や月毎の墓参はシマの慣行として習俗化され共同的祭祀の場となっている。

## 5 儀礼様式の分化

図 2-10 は、円における 2015 年から 2020 年までの死亡者数、葬儀件数<sup>27</sup>、ソウシキ(家族葬)+ノウコツノギ(集落葬)とソウシキ(家族葬)のみ件数の推移を示したものである。また、表 2-4 は、ソウシキ(家族葬)のみを行った理由を示したものである。

近年、円において、奄美市内の葬儀場でソウシキ(家族葬)のみを行う葬儀が見られるようになった。2015 年～2020 年の死亡者数 30 件、葬儀件数 39 件<sup>28</sup>の内、ソウシキ(家族葬)+ノウコツノギ(集落葬)が 21 件、ソウシキ(家族葬)のみが 18 件<sup>29</sup>となっている。

<sup>27</sup> 葬儀場のソウシキを「家族葬」およびノウコツノギを「集落葬」として便宜的に区別した。

<sup>28</sup> 2015 年～2020 年の死亡者数 30 件と葬儀件数 39 件の差異は、円出身者で施設入居者が施設に住所を移動している人や奄美市あるいは近郊集落に移住した人たちが円に墓を持っていることから「ソウシキ」を奄美市内で行い、「納骨」のみ円で行ったことによる。

<sup>29</sup> 2020 年度の数字については、コロナ禍のため電話での調査による。

その理由はというと、例えば、病院や施設に長期入所していたことにより、集落との「ツキアイ」の希薄化や集落内に継承者や身内がない、集落に墓をもっていない、あるいは経済的な問題などの理由により「ソウシキ」は簡素なものにしたいという家族の希望があったものと考えられる[図 2-10. 表 2-4 は、龍郷町人口統計資料と区長からの資料をもとに作成]。

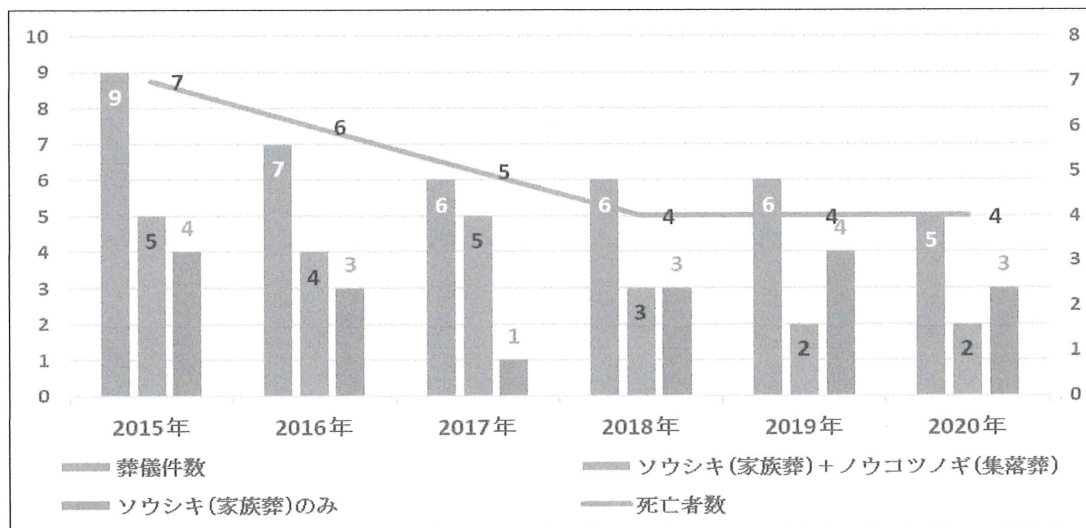


図 2-10 円集落の死亡者数と葬儀件数推移

表 2-4 ソウシキ(家族葬)のみ実施した要因(N=18 件/39 件)

項 目	ソウシキ(家族葬)のみ実施の理由	件数(件)
継承者問題	・ 集落に継承者や身内がない	8
病院・施設に長期入院(入所)	・ 集落との関係が希薄化し、ソウシキの簡素化を希望	6
経済的な問題	・ 年金暮らしによる経済的な問題	3
	・ 集落に墓がない	1
※2015 年～2020 年のソウシキ(家族葬)のみ累計件数		18

円のある人(男性 90 歳代)に、2019 年ソウシキ(家族葬)のみの葬儀を行った事例を聞く機会を得た。その人によれば、「施設に長らく入所していた姉が 95 歳で亡くなった。姉には、息子 2 人と娘 1 人の 3 人の子供がいたが、子供は島外に住み家族間の交流があまりなかったようだ。亡くなった当日に葬儀場で仮通夜、翌日に通夜、そして翌々日にソウシキを行った。通夜とソウシキは、私(高齢のため当日は体調が思わしくなかった)ので参列が



かなわず妻から様子を聞いた)の妻と息子と従兄弟、そして娘と孫の5人のみであった。長男は火葬にようやく間にあったようだ。姉は、施設に入所してからシマとのツキアイも少なかったこともあり、ノウコツノギはやらず、火葬後にシマの墓地に家族で納骨した。葬儀費用は30万円ほどであったが、互助会システムに加入していたおかげで全額を賄うことができた。」とのことである。

前述の事例に関し、表2-4に示す、2015年から2020年のソウシキ(家族葬)のみの葬儀を行った18件の理由をみると、継承者がいないこと(8件)や施設・病院に長期入所(入院)していたことから、シマとのツキアイが希薄であること(6件)の併せて14件と大半を占めている。そのなかの円に墓を所有している人で、入居施設に住所を移動している人や奄美市内または近郊集落に移住している人の大方は、奄美市内の葬儀場でソウシキ・火葬のみを行い、シマでノウコツノギ(集落葬)をやらず、直接墓に納骨を行うという儀礼様式の分化が生じていると聞く。

このような儀礼様式の分化が生じているなかにおいて、葬儀の半数以上が今もって、ソウシキとノウコツノギの二つの儀礼が行われている。

#### まとめ

本章では、過疎と高齢化の進む龍郷町円の葬儀事例を取り上げ、土葬の頃の葬儀と今日的葬儀の変化を観察した。土葬の頃の葬儀は地域の生活共同体規範に従い、地域の人々の手によって行われてきた。

やがて火葬が普及する要因の一つである、1960年代以降に道路交通網が整備されると名瀬(現奄美市名瀬)から葬祭業者が進出するようになった。それに伴い葬儀も自宅での葬儀から奄美市内での火葬場や葬祭場に移行して行われるようになった。

土葬の葬儀に関する聞き取りは、今もって、その体験者の多くは高齢者である。今回の調査において、葬儀は他の通過儀礼と異なり直接的な観察が難しく、体験者への聞き取り調査という間接的な観察で行った。

火葬の葬儀については、龍郷町円の葬儀でソウシキ(家族葬)と火葬およびノウコツノギ(集落葬)に立ち会ったことのある当事者や名瀬の葬儀社の話をもとに、3家の葬儀事例に関する聞き取りを行った。

円の葬儀は、奄美市内の葬儀場・火葬場でのソウシキと火葬後に集落の共同墓地に移動し、シマの人たちが参与するノウコツノギの二つの儀礼が行われる。ノウコツノギでは、共同焼香場で焼香と拝みを行い、それが済むと共同体による葬列が行われる。墓地の近くで左周りに三回まわるシマミシリを行う。そのあと墓前に遺骨を安置し、参列者は焼香と拝みをする。一般参列者はここで帰る。喪家と親族は納骨堂への納骨が済むと家に帰る。

墓の近くに控えていたシマの女性たちによってミキャナンカ(三日七日)が行われる(家族・親族は同じ日に墓に二度行かないという言い伝えがあるためである)。ミキャナンカが済むと自宅で直会が開かれ、喪家や家族が葬儀を手伝った人や参列者を飲食でもてなす

祭宴が開かれる。

区長によるとここ数年、墓の無縁化、非継承墓、あるいは他の所へ墓を移す改葬が増えているという現実がある。このように人口減少と高齢化の進む集落において墓管理は切実な問題として顕在化している。しかし、このような状況下、墓地は葬儀におけるノウコツノギ(納骨の儀)や月毎の墓参などシマの慣行として習俗化され共同祭祀の場となっている。

2015年から2020年にソウシキ(家族葬)のみの葬儀を行った事由をみると、継承者がいないことや施設・病院に長期入所(入院)していたことからシマとのツキアイが希薄であることが大半を占めている。そのなかで円に墓を所有し、入居施設に住所を移動している人や奄美市内または近郊集落に移住している人の大方は、奄美市内の葬儀場でソウシキ(家族葬)・火葬のみを行い、シマでノウコツノギ(集落葬)をやらず、直接墓に納骨を行うことも確認した。

### 第3章 宇検村平田・湯湾における葬儀

#### はじめに

奄美大島南部に位置する宇検村<sup>32</sup>では、1970年ごろまで洗骨改葬を伴う土葬が行われてきた。1966(昭和41)年、瀬戸内町営火葬場の開設やそれまで海路や徒歩のみであった交通の道路網の整備<sup>33</sup>により、火葬が普及し、現在ではそれが一般化している。

第1章で触れたように、火葬の導入は、葬送儀礼の外部化を導き、奄美大島においては道路などの社会基盤整備と火葬の普及が関連している[加藤 2010:16, 69]という加藤の指摘もある。本章では、過疎と高齢化の進む宇検村平田および湯湾の葬儀事例を取り上げ、土葬の頃の葬儀と今日的葬儀の変化をみてみる。

#### 第1節 宇検村平田・湯湾の概要

##### 1 平田・湯湾の概要

本節では、大島南部でも最も過疎化の激しい宇検村平田(へだ)と湯湾を中心に概観する。宇検村は、宇検、久志、生勝、芦検、田検、湯湾、石良、須古、部連、名柄、佐念、平田、阿室、屋鈍の14集落が焼内湾に沿って点在し、湯湾に役場がある[図3-1]。

宇検村のかつて村の中心は西端の宇検にあり、明治以降、村役場の所在地は名柄、田検を経て、1917(大正6)年から湯湾におかれている。明治末期から大正期にかけて屋鈍、宇検、平田、阿室、久志などを中心に盛んであった漁業が衰退し、農業に転換するとともに相対的に広い耕地をもつ集落に移行してきた[若林 1981:271]。

宇検村は、大正期より戦前にかけて関西圏や関東圏、あるいは南米への出稼ぎが多い地域であった。1960年代以降に村の主要産物であった甘蔗の衰退や米の減反政策による、一層の出稼ぎの増大がみられた。人口は1915(大正4)年14,068人(2,476世帯)を数えていたが、2015年には1,722人(811世帯)と人口、世帯数ともに大幅な減少となっている。

本論文の調査地である平田の人口は、1995(平成7)年に152人(世帯数61)が2020(令和2)年には、90人(世帯数63)と40.7%減となっており、高齢者率は51.1%と限界集落<sup>34</sup>と

<sup>32</sup> 奄美大島は、15世紀半ばから17世紀初頭まで琉球王府の統治下にあり、地方行政単位である7間切(笠利間切、古見間切、名瀬間切、住用間切、屋喜内間切、東間切、西間切)に区分されていた。1609年の薩摩侵攻による薩摩藩直接統治時代にも間切制度は引き継がれ、元禄年間に笠利間切(赤木名方・笠利方)、古見間切(古見方・瀬名方)、名瀬間切(龍郷方・名瀬方)、住用間切、(住用方・須垂方)、屋喜内間切(大和浜方・宇検方)、東間切(東方・渡連方)、西間切(西方・実久方)の7間切14方で構成されていた。宇検方は、屋鈍村、阿室村、平田村、佐念村、名柄村、蔵戸村、須古村、湯湾村、田検村、芦検村、久志村、宇検村、部連村、生勝村の14村からなり、役場は宇検村内にあった。

<sup>33</sup> 1962(昭和37)に名瀬～湯湾間のバス開通、1969(昭和44)に村内一周道路が開通する。

<sup>34</sup> 1990年代に社会学者の大野晃が提唱した学説で、65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落。老人夫婦世帯、独居老人世帯が主である[大野 2008:21]。



よばれる状況となっている。一方、湯湾の人口は、1995(平成7)年 602 人(世帯数 259)が 2020(令和2)に 468 人(世帯数 242)と 22.2%減であり、高齢者率は 37.6%と平田に比較すると人口減少および高齢者率ともにその増減率は比較的緩やかである [図 3-3 参照]。

宇検村 14 集落位置図



図 3-1 [国土地理院より作成]

宇検村平田集落衛星写真



写真 3-1 平田集落、[国土地理院衛星写真より作成]

# 平田集落地図



図 3-2 〔国土地理院より作成〕

## 湯湾集落衛星写真



写真 3-2 湯湾集落、〔国土地理院衛星写真より作成〕



湯湾集落地図



図 3-3 〔国土地理院より作成〕

調査地である平田〔写真 3-1 図 3-2〕は、後方を山に、前方は東シナ海に面した焼内湾の入口にあって、風や波が強く当たる場所という意味をもつ「サキバル」と呼ばれる、半農半漁で生計を立ててきた地域である。平田のかつての生業は、サトウキビ栽培などの農業、水産業が中心であった。

大正時代から戦後にかけての人口移動による社会構造の変化もあり、現在は水産業と限られた耕地でサトウキビやタンカン、ニンニクなどを生産する農業が主な産業となっている。

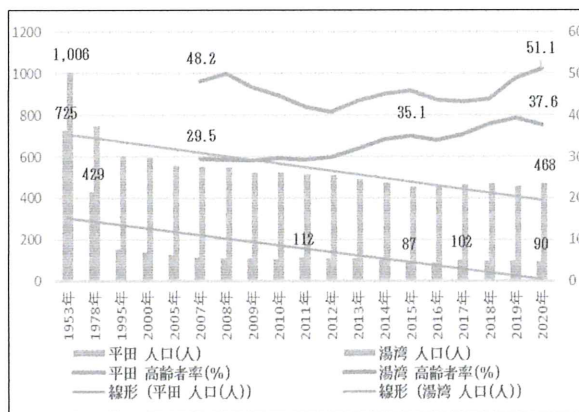


図 3-4 平田・湯湾人口・高齢者率推移

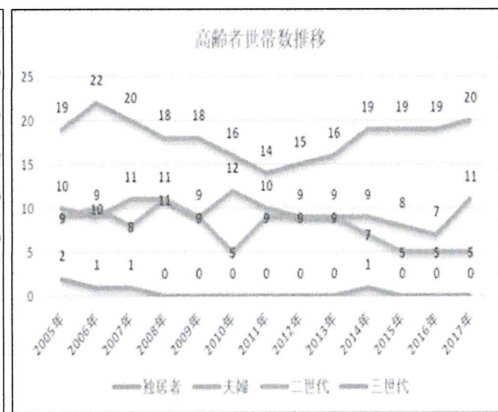


図 3-5 平田高齢者世帯(65 歳以上)推移



平田の人口構成は、一世帯当たりの家族構成が、1955 年 4.4 人であるのに対し、2015 年は 1.5 人と高齢者夫婦および独居者のみの小規模家族構成となっている。また、図 3-5 に示すように、全世帯数の 57%が高齢者世帯(65 歳以上)であり、その中で独居者世帯は 31%をしめ、夫婦のみの世帯を合わせると 48%と 5 割近い数字となっている。

表 3-1 宇検村 出稼ぎ者実態調査(1971 年～1977 年)

(単位:人)

集 落	1971 年	1972 年	1973 年	1974 年	1975 年	1976 年	1977 年
宇 検	6	6	6	3	0	1	0
久 志	1	2	1	0	0	0	0
生 勝	2	2	2	1	0	0	0
芦 検	15	14	20	7	2	2	1
田 検	4	4	5	1	0	0	0
湯 湾	2	4	2	0	0	0	0
石 良	1	1	0	0	0	0	0
須 古	2	1	0	0	0	0	0
部 連	2	1	1	0	0	0	0
名 柄	6	5	7	3	0	3	2
佐 念	2	2	2	1	0	1	0
平 田	17	13	14	8	6	8	5
阿 室	9	9	7	3	5	5	4
屋 鈍	3	3	2	2	0	1	1
大工・左官	30	24	20	9	4	9	2
土木	7	13	15	7	2	0	1
自動車関係	11	10	11	6	5	9	5
紡織	5	4	6	3	0	0	1
その他	19	16	17	4	2	3	4
合 計	72	67	69	29	13	21	13

出典:「奄美農村の構造と変動」[若林 1981:287]より作成

平田の特徴は、高齢独居世帯及び高齢者夫婦世帯が多く、その多くが年金生活者である。また、居住者の約 3 分の 2 は島外への転出経験があり、主に青年時代に関西や満州へ移住し、若い時に U ターンしたか、あるいは都会に長く居住したのち定年退職後に U ター

ンしている人が多いことである。表 3-1 に示す宇検村の出稼ぎ者数は、「1971(昭和 46)年が最も多く 72 人をピークに漸次減少している。その中で平田がもっとも多く 1971 年から 1977 年の 7 年間で延べ 71 人の出稼ぎ者数となっている」[若林 1981:286-288]。

阿室校区(平田、阿室、屋鈍)における出稼ぎの主な職種は、大工や左官・土木・自動車関係など関西や中部方面が多い。1980 年代以降の出稼ぎは徐々に減少しているが、集落にとって出稼ぎによる人口流出の影響は極めて大きく、土葬における葬儀<sup>35</sup>の担い手不足や農業、林業、水産業をはじめとした生産業のより一層の衰退を招くことになった。阿室校区(平田・阿室・屋鈍)においては、このような衰退状況からの脱却を計るため、親子山村留学制度など U・I ターンによる移住・定住政策に活路を求めている。

一方、湯湾は阿室校区 3 集落に比較しても出稼ぎが少ない。これは役場の所在地であり、役場、信用組合、一般企業への就業機会に恵まれていることや他の集落に比較しても耕地面積が広く、花卉栽培、黒糖焼酎の原料としてのサトウキビ栽培など換金作物農業で他集落に比べてあえて出稼ぎに出なくとも生活できていることが挙げられる。

## 第 2 節 土葬の葬儀

宇検村では、近年まで土葬を伴う複葬が行われており、葬儀は神官や僧侶の儀式を受けずに地域の人々の手によって執行されてきた。葬儀は他の通過儀礼と異なり、直接的参与観察が難しいことから、本節では、平田と湯湾における土葬のコクベツシキ(告別式)<sup>36</sup>について、土葬の葬儀を体験したシマ(集落)<sup>37</sup>の M 氏男性(80 歳代)および O 氏女性(70 歳代)と N 氏男性(70 歳代)の 3 氏からの聞き取りをもとに検討する。

### 1 葬儀の準備

死者が出るとシンセキの連絡係の人が親族や集落の人に通知をする。通夜は行われず、当日あるいは亡くなったのが午後以降であれば、翌日の夜の告別式が一般的であった。

亡くなった時刻に時計を止め、壁にかけてある写真や賞状なども裏返す。死者は、お湯を沸かし、体を清め、故人が生前に着ていた好みの着物を着せる。死人の足を曲げ<sup>38</sup>、首からかけたひもで足を固定し、手は胸の上で組ませる。その家のウチ(奥間)に北枕で安置し、上から着物を裏表逆さにして着せる。枕元には 1 合飯を炊いて生前使っていた箸を 2 本垂直に立てる。シマの人達がソウシキの準備やクヤ(悔み)に訪れる。

喪家ではシンセキが集まり、葬儀の際の仕事の割り振りであるショクアテ(職当て)をす

<sup>35</sup> 島外へのお出稼ぎにより、棺桶作りやヤギョ作りの大工職人が少なくなり、火葬が普及した要因の一つであるとされている。

<sup>36</sup> 宇検村では葬儀をコクベツシキ(告別式)と呼んでいる。

<sup>37</sup> 奄美では集落のことをシマと呼んでいる。シマは薩摩支配のはるか以前の古琉球のころから用いられ、土地の人々同士が互いに最も親しみと共属意識を感じる用語である。

<sup>38</sup> 死者の膝を曲げるのは、棺の大きさがあり、完全な寝棺にできず、足を曲げなければ入らないからで、硬直が起きる前に曲げておく。



写真 3-3 ヤギョ作り

る。大まかに大工の部、山の部、炊事の部に割り振りされる。ショクアテで決められる作業の分担は、イキフリ(池堀り)、クワンバク(棺)、ヤギョ(家形)、草履、吊い旗、マエジユク(前卓)、タイ(松明)、灯籠などの作成、ヘゴキリ、炊事などである。連絡係の人がそれぞれの家に願いをして回る。

割り振られた作業は、告別式当日の朝から行われる。一番大変な作業

はイキフリ(池堀り)で、墓の敷地内に約 1.5m から 2.0m の深い穴を四人で掘る。クワンバク(棺)は大工に依頼し、杉板を用いて作る。ヘゴキリは山仕事をしている人、二人に頼む。ヘゴは、イキにクワンバクをいれ、その周りを腐らないヘゴで囲んでから土を被せるためである。ヘゴは 1m ほど長さに切り出し、厚さ 5 cm ほどの板に製材して帰る。

ヤギョ(家形墓)(写真 3-3 芳賀日出男『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村むかしいま』[芳賀 1983]より転載)は、鉋で仕上げなければならないので専門の大工に依頼する。

草履は、あの世で旅するのに必要とされ、稲藁で作られる。マエジユク(前卓)は小さな机上のもので蠟燭や線香、水などをのせるものである。タイは松明のことで、枯れた竹を数本縛ったものである。灯籠は四角い箱のような形で、支柱の先を尖らせ土中にさせるようにしたものである。

### イキフリとヤギョ作り

N氏：男性 70 歳代「葬儀は墓ほりやヤギョ、棺づくりから始める。墓ほりの担当が約 1.5m 程度の穴を掘り、廻りの土が崩れないように板状にカットしたヘゴ<sup>39</sup>で囲い<sup>40</sup>をして墓場を整え、遺体を埋葬したらその上にヘゴで蓋をする。それに板作りのヤギョ(家形)<sup>41</sup>をのせる作業をした。棺やヤギョは特殊技術であったので専門の大工が作っていた。棺は数年経つと腐るが、ヘゴは腐らないため、カイソのときに綺麗な骨を拝むことが出来る」。

炊事は女性の仕事で、ショクアテで頼まれなかった人も手伝いにくる。祝い事は招いた

<sup>39</sup> ヒカゲヘゴと呼ばれる常緑木生シダで奄美大島や沖縄本島、八重山諸島にみられる。

<sup>40</sup> 龍郷町円など奄美大島北部では、イケの囲いを板状のテーブル珊瑚を使用しているが、宇検村など奄美大島南部では板状のヘゴが多く使用されているという違いが見られる。

<sup>41</sup> 四十九日で取り除き、ナバイシ(テーブル珊瑚)を積み上げ墓にする。



人しか来ないが、悔みには何人くるかわからないので大量に作らねばならず人手を必要とするからである。午前 10 時ごろにオチャ(お茶)と昼にそれぞれの作業場に食事を届ける。

## 2 コクベツシキ(告別式)

### (1) 納棺

納棺の前にお別れ善<sup>42</sup>として、一合飯、ソーメン、干物、てんぷら、煮物のオゼン(お膳)と焼酎が出される。料理は、ショージンリョーリ(精進料理)と呼ばれ、生物は出さない。夕方近くに遺体の湯灌を行い、帷子をきせ、足袋をはかせ、小銭を白袋にいれて首にかけ、故人の日頃の愛用品や片方の鼻緒を切った履物(草履や下駄)などを棺に納めて旅支度を整える。棺にものを納めるときは身内がそれぞれに故人への別れの言葉をかける。

### (2) 出棺と葬列

納棺がすむと棺はオモテグチ縁側の戸口からだす。故人に近い身内の人が前後 4 人で棺を担ぎ、参列者は墓地まで進行する。子供や高齢者は家の前で門送りをする。

葬列の際、炊事場(トウグラ)でタイ(松明)に火をつけ、肉親の男性 3 人が交替で、左手をコショデ(逆手)にして外の人に渡す。



写真 3-4 葬列

### 葬列のタイ(松明)

<sup>42</sup> 湯湾では、一合飯、ソーメン、煮物(ツワブキ、切干、昆布、白豆腐)が出されていた。

**M氏：男性 80 歳代**「炊事場(トウグラ)で一つのタイ(松明)に火をつけ、肉親の男性 3 人が交替でコショデ(逆手)にもって、そのまま炊事場(トウグラ)から外の人にわたす。残りのタイにも火をつけ同じようにわたす。コショとは逆さの意味があり葬儀はすべて逆さにすることからきている」。

棺は死者に一番近い身内の青年 2 人で担ぐ。葬列の先頭にはイチバンタイ(一番松明)と死者の名前を書いたイチバンハタ(一番旗)が立ち、順に二番、三番、四番とタイと旗が交互に並ぶ。その後にマエジユク(前卓)<sup>43</sup>、棺、ヤギョ、ツカ、線香、花、水、酒、灯籠、遺影と続き、その後から遺族が進行する(写真 3-4 芳賀日出男『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村むかしいま』[芳賀 1983]より転載)。それとは別に葬列の通る道の要所六ヶ所にロクロと称する明かりを立てる。



写真 3-5 告別式、焼香台の上にヤギョが置かれている。

コクベツシキの会場は、シマの共同墓地の入口である。葬列は墓地の入口で止まり、左回りに三回廻る。これは死者が家への帰り道をわからなくするためである。近くの焼香台

<sup>43</sup> 墓の前においてトームジ(水芋の茎を刻んだもの)、水、酒、線香などをのせる卓。



にガン(棺)を置き、一般会葬者のコクベツシキを行う(写真 3-5 芳賀日出男『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村むかしいま』[芳賀 1983]より転載)。告別が済んだ人は墓の外に出る。入口に酒瓶をもったものが待っていて一人一人に酒を両手に授ける。受けたものは頭から体を撫でて身祓いをする。帰りには、海岸において海水を3回すくい上げ、顔や手足を洗ってシュウバレ(潮祓い)をした。他の家では、門に竹竿を渡して死者の霊の侵入を防いだ。

### (3)埋葬

埋葬は家族・親族で行う。イケ(池)の前で棺をおろす。担ぎ手の一人が青柴で穴の祓いをする。次に棺の縄の上方を解き、四方から吊るすようにゆっくりおろす。棺が収まったらクワンバクの周囲をヘゴで隙間なく囲む。クワンバクは数年経つと腐ってなくなるが、ヘゴは腐らないため、数年後にカイソ(改葬)するとき、綺麗な遺骨を拝むことができる。とされる。

イケの中に周囲の土砂を穴に落とす。このとき女性たちは「オモキセイキナサレヨー」(思いを切って行きなされよー)と泣き声で叫ぶ。

### (4)シンセキの拝み

穴を埋めたら地面より少し盛り上げて、足で踏み固めてからその上にツカを立てヤギョを据え、中に足袋と草履をおき、前にマエジユクを据える。マエジユクにはトームジ(水芋の茎を刻んだもの)、茶碗に水、酒、青竹の筒に花、線香が供えられる。灯籠はヤギョの後方に立てられる。埋葬してヤギョを立てが終わると家族・親族のものが拝みをする。

### (5)ミキャンナカ(三日七日)・シジュウクニチ

一般的には、埋葬の翌日に三日吊いの法事をするが、近年、シマによっては埋葬の後にミキャンナカとシジュウクニチをするところもある。それは、本土のような遠方からくる家族・親族が仕事などの都合により、葬儀の日と一緒に行われることも多くなっている。

### (6)マブリワーシ(死霊別し)

マブリとは霊魂のことをいい、人の死の初ナンカの夜は、ユタを頼んでマブリワーシという口寄せが、かつては行われていたという。

山下欣一によれば、「奄美のユタの呪術行為には、ト占、霊魂の管理、祈願の三項目に分けられる。霊魂の管理でいえばユタは、生霊と死霊を管理することが重要な役割になっている。死霊は、七日忌までは家と後生を往復すると信じ、三日忌からこれを後生に鎮めるために、ユタは儀礼を行う。この時に死霊はユタの口を借りて話すのである。この場合注目すべきは親類縁者が集合している中で、これを行い死者と会話する。」[山下 1977: 258-259]ことだと述べている。

シマでは、人が死んだら必ずマブリワーシをするというものでなく、急死などで遺言する時間がなかったとか、臨終に居合わせなかった子供がいたとか、遺族の夢見が悪いとか病氣ばかりするとかいうときにユタを頼んでマブリワーシが行われた。



### 3 カイソ(改葬)

平田を含む周辺地域では、遺体を埋葬してから7年以上<sup>42</sup>たつとドンガ<sup>43</sup>の日にアトアゲといってカイソ(改葬)を行た[写真3-6]。カイソは女性の仕事とされ、頭蓋骨<sup>44</sup>を洗骨する際は、身内の女性が傘をさして遺体に太陽が当たらないようにした。遺骨は頭蓋骨を一番上にして骨甕に納められた(芳賀日出男『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村むかしいま』[芳賀 1983]より転載)。

#### 改葬の語り

**0氏：女性 70 歳代**「私が子供のころは海水で洗骨改葬を行っていたのを覚えている。カイソは洗骨をし、特に頭蓋骨をていねいに扱い、身内の女性(娘)が頭蓋骨に陽があたらないように傘をさしていた。洗骨が終わると頭蓋骨を一番上に骨甕に納めて地中に埋めていた。上にはナバイシを置いて墓が作られていた。洗骨改葬は、瀬戸内町に火葬場が出来たころからやらなくなったと思う」。



**M氏：男性 80 歳代**「平田では、七回忌に洗骨改葬を行っていた。洗骨を入れた骨壺を墓に納骨する際、ノウコツシキが行われていた。共同墓地の広場に集落の人たちが焼香台、テント張りなどを手伝っていた。机の上には遺骨、焼香台、線香、ロウソク、マッチ、水、花、酒が置かれ、通常の葬儀と同じように行われていた」。

洗骨の納められた骨壺は、地中に埋められ、上にナバイシ(珊瑚テーブル)[写真3-7(2018年筆者撮影)]を幾重にも置いて墓が作られた。

写真3-6 カイソ(改葬)

戦後、石塔や納骨堂式石塔が作られるようになると、洗骨を納めた骨壺を石塔の横に埋めるか[写真3-8 高木勇氏提供]、もしくは納骨堂式石塔<sup>45</sup>に納骨するようになった。カイソは子や孫の最後の孝行とされ、埋葬後三年以上<sup>46</sup>から三十三回忌までに行わねばな

<sup>42</sup> 宇検村地域は赤土が多いため遺体の腐敗が遅く、他の地域は通常3年～5年での改葬が多いが宇検村地域は7年以上経ないと改葬が出来なかったと聞く。

<sup>43</sup> 奄美では旧暦八月に南東の正月と呼ばれるミハチガツ(三八月)にアラシツ、シバサシ、カネサル、ドンガと高祖祭と五穀豊穡の祭りがあがる。この高祖祭のカネサル、ドンガの日に改葬が行われていた。

<sup>44</sup> 人間の霊が骨、特に頭蓋骨に留まるという信仰があり、骨を対象にして祀る、一種の骨信仰である[松山 2004:77]。

<sup>45</sup> 納骨堂式石塔には地下式と地上式がある。近年は地上式納骨堂が増えている。

<sup>46</sup> 宇検村ではおおむね七年(七回忌)以上となっている。

らないとされているが、近年の少子化や死亡年齢の高齢化によりカイズが出来ないケースが多いといわれている。もっとも、1966年に瀬戸内町営火葬場が設置されて以降、火葬の普及により、カイズそのものが次第に行われなくなったとされる。



写真 3-7 佐念ナバイシ墓(テーブル珊瑚)

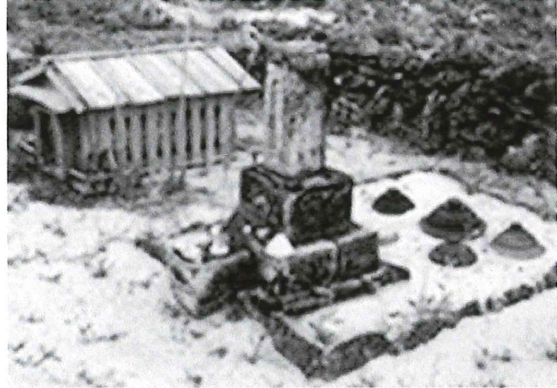


写真 3-8 ヤギョ・石塔・骨壺

### 第3節 今日の葬儀

宇検村の各集落では、近年まで土葬を伴う複葬が行われてきた。しかし、1950年代後半以降、それまで海路か徒歩であった道路網の整備によって名瀬から湯湾のバス開通(昭和37年)や村内一周道路開通(昭和44年)および瀬戸内町営火葬場の開設(昭和41年)などにより、1980年代以降、火葬が一般的に行われるようになった。

このような道路網の整備は、それまで、「道路事情などがあって、市内周辺部の集落の人々の利用は難しかった」[加藤 2010:16]、葬儀が葬儀社<sup>47</sup>の提供する瀬戸内町や名瀬の葬祭場で行われるようになった。

また、それまでの土葬の葬儀で行われていなかった通夜を自宅で行うか、瀬戸内町あるいは名瀬の葬祭業者が提供する葬祭場で行うかを選択するようになった。

本節では、平田と湯湾において、火葬とノウコツノギに立ち会ったことのある当事者の話を中心に、火葬における葬儀事例について記述したい。

#### 1 D家の事例(平田)―故人：女性・享年94歳

##### 1) D家の家族関係と葬儀次第

故人は、夫を亡くしてから長年1人暮らしであったが高齢のため、奄美市内の高齢者施設に入所していた。家族は長男夫婦と孫娘夫婦が関東に住んでいる。喪主は、関東に居住している長男が務めた。長男夫婦は共に平田出身である。2017年、定年退職を機に夫婦で平田にUターン移住し、平田、湯湾、阿室で島唄教室を開催している。

<sup>47</sup> 葬儀社は瀬戸内町内に2社(H社・I社)、奄美市内に3社(V社・Y社・J社)がある。

表 3-2 D 家葬儀参列者数

D家(女性・享年94歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜 某年2月4日	子供		0	0							1	1		1
	兄弟姉妹													0
	孫	0		0						0	1	1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		0	2	2		39
式場設営・片付け	集落の人	3	2	5										5
	加勢人数	3	2	5		0	0	0		0	0	0		5
告別式 某年2月5日 (於)奄美市斎場	子供										1	1		1
	兄弟姉妹													0
	孫										1	1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		0	2	2		39
火 葬 某年2月5日 (於)奄美市斎場	子供	0	0	0							1	1	嫁1	1
	兄弟姉妹													0
	孫	0	0	0						1		1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		1	1	2		39
ノウコツノギ 某年2月5日 (於)平田共同墓地 16:00～	子供	0	0	0							1	1	2 嫁1	2
	兄弟姉妹													0
	孫	0	0	0							1	1	2	2
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	45		45										45
	知人	20		20		15		15						35
	参列者合計	65	0	65		15	0	15		2	2	4		84

故人は、共同納骨堂の出来る前のある年2月4日未明に施設において老衰のため亡くなった。臨終は長男が仕事のためすぐに帰ることが出来ず、長男の嫁が立ち会っている。家では亡くなった時刻に時計を止め、写真や表彰状などの額も裏返しにする。2月4日の朝から家族とY葬儀社の担当者が通夜、告別式、納骨の儀<sup>50</sup>の日取りを相談の上、2月4日通夜、2月5日告別式、火葬、納骨の儀と決まった。葬儀社に施設から奄美市斎場への搬

<sup>50</sup> 告別式を斎場で行うことから、集落での告別式は「ノウコツノギ(納骨の儀)」と呼ぶ。



送、死亡届、火葬許可申請書申請手続きや棺、僧侶、祭壇、生花、会葬お礼状など一切を依頼した。

### (1) ノウコツノギの準備

平田では、朝からシマの人達が夕方からの炊事、墓掃除、テント張りなどノウコツノギの準備にとりかかる。共同墓地の広場に式場の設営をするため、テント張りや受付、焼香台などの設置を行う。

### (2) 通夜

葬祭場において、死者は、係りの人の手で、体を清め、生前に着ていた着物のなかで故人が好んでいたものを着せる。手は胸の上で組ませる。北枕で安置する。枕元には一合飯の上に生前使っていた箸を2本立てる。シマの人達がクヤに訪れる。通夜は奄美市斎場<sup>51</sup>において行われ、家族・親族2名、集落・知人37名が参列した。孫娘の夫は島外居住地より参列した。

### (3) 告別式・火葬

翌2月5日におこなわれた告別式は、通夜と同じ奄美市斎場で長男の嫁1人、孫娘の夫1人、集落・知人37名が参列した。納棺は、帷子をきせ、草履をはかせる。着物を裏表逆さに被せ、故人の日頃の愛用品を棺に納めて旅支度を整える。棺にものを納めるときは身内がそれぞれ故人へ思い思いに別れの言葉をかける。告別式は葬儀社の進行により、11時ごろから僧侶の読経にはじまり、初めに遺族の焼香、そして一般会葬者の焼香と続く。告別式の式次第は日本本土と同じように行われる。

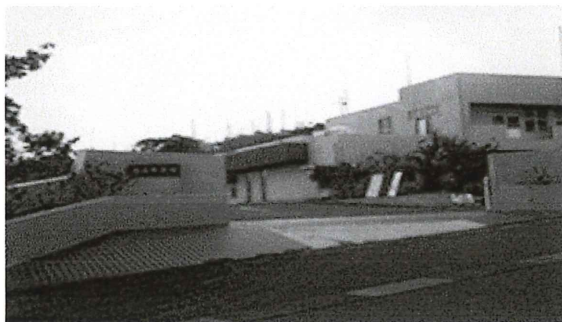


写真 3-9 奄美市斎場

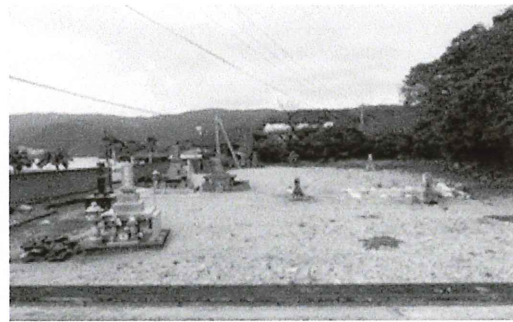


写真 3-10 旧平田共同墓地(改葬後)

同日の午後に奄美市斎場〔写真3-9〕で行われた火葬は、告別式と同じく21名の参列があった。遺体を炉に入れる前に僧侶による読経があり、参列者は遺族より順に焼香する。それが済むと炉に入れられ約2時間で焼きあがる。遺骨が焼きあがる間に、参列者は休憩室で葬儀社が準備した弁当を食べながら遺体の焼き上がりを待つ。骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に拾骨し、足骨から骨壺に入れ最後に頭蓋骨を納める。

<sup>51</sup> 奄美市斎場の利用料金は、奄美市市民1万3千円、市外利用者3万円(料金は火葬料金のみで会場利用などは別途料金となる)。

拾骨が済むと約 1 時間かけて平田共同墓地 [写真 3-10(筆者撮影)]に向かう。火葬場から骨壺に納められた火葬骨とともに、火葬場の捺印された埋葬許可書を受け取り集落の共同墓地管理者に提示する。

#### (4) ノウコツノギ(納骨の儀)

ノウコツノギ<sup>52</sup>は集落の平田共同墓地広場で行われた。参列者は、長男夫婦と孫娘夫婦、集落の人 45 人、知人 35 名の総勢 84 名であった。共同墓地の広場に祭壇が設置され、両横に受付を行うためのテントが張られる。ノウコツノギの開始時間は午後 6 時頃になる。

参列者は受付で香典を渡し、記帳を行い、香典返しと清めの塩を受け取る。香典は 3,000 円が一般的であるが、故人やその家族とのつながりによって金額はまちまちである。香典数は 143 件(80 万円)ほどであった。

参列者は、香典等の受付を済ますと、奄美市内の葬儀社の進行により始まる。僧侶の読経による焼香が始まる。遺族、親族、一般参列者の順に焼香とオガミ(拝み)をする。この地域においては、遠方のためボンサン(僧侶)を呼ばず、録音したカセットテープをながすこともあるという。一般参列者は焼香が終わると、順に入口で焼酎をもっている係りの人のところで清めてから帰る。香典返しに入っている塩は自宅の玄関前で体に振りかけ清める。

#### (5) 納骨・ミキヤナンカ・シジュウクニチ

一般参列者が帰ると遺族、親族、近しい集落の人だけが残し、納骨堂へ火葬骨を納骨する。ミキヤナンカ・シジュウクニチも行われ焼香して帰る。火葬骨の入っていた空の桐箱は、葬儀社が適当に処分する。式場に設営した受付机や焼香台、テントなどはシマの人たちが片付けして帰る。参列者は公民館(あるいは喪家)にもどり、1 合飯、ソーメン、干物、てんぷら、煮物と焼酎が出され、飲食を共にし、故人の思い出やこれからのことを語りあう。

#### (6) 共同納骨堂への改葬

平田共同納骨堂の建立(2016 年 10 月落成式) [写真 3-11]により、同年 10 月に納骨堂壇への改葬を行っている。

## 2 E家の事例(平田)―故人：女性・享年 86 歳

### 1) E家の家族関係と葬儀準備

この E 家の葬儀事例は、移住先の横浜で葬儀を行い、出身地の平田でノウコツノギを行った事例である。故人は、宇検村平田出身で亡くなるまで神奈川県横浜市に住み、長男夫婦と同居していた。長男は母親が亡くなった 1 年後に平田へ U ターン移住している。

故人は、ある年の 9 月 28 日に居住地の入院先の病院でなくなった。家では亡くなった時刻に時計の振り子を止める。葬儀は、横浜某葬儀場で行った。

葬儀社には、病院から葬祭場への搬送、死亡届、火葬許可申請書申請手続きの依頼、棺、僧侶、祭壇、生花、会葬お礼状などを含め通夜、告別式、火葬の段取りすべてを依頼した。

<sup>52</sup> この地域ではノウコツノギと告別式は同じ意味あいをもっている。

## 2)通夜・告別式

表 3-3 E 家葬儀参列者数

E 家(女性・享年86歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	平田集落の人達				他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜	子供	0	0	0						1	1	2	嫁1	2
某年9月28日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0		0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	0		0										0
	知人	0		0		0		0		15	1	16		16
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
式場設営・片付け	集落の人													
	加勢人数	0	0	0		0	0	0		0	0	0		0
告別式	子供	0	0	0						1	1	2		2
某年9月29日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0		0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人													0
	知人									15	1	16		16
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
火 葬	子供	0	0	0						1	1	2	嫁1	2
某年9月29日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0	0	0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	0		0										0
	知人	0		0		0		0		15	1	16		21
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
ノウコツノギ	子供	1	1	2										2
某年4月25日	兄弟姉妹	1		1										1
平田共同納骨堂	孫	0	0	0						0	0	0		0
	いとこ													0
	甥・姪		2	2										2
	集落の人	5	1	6										6
	知人	2		2		0		0						2
	参列者合計	9	4	13		0	0	0		0	0	0		13

表 3-3 に示す参列者は、通夜、告別式、火葬、直会共に長男夫婦、孫 3 人、関東太平洋<sup>53</sup> 16 人の総勢 21 名であった。葬祭場において、死者は、担当者の手によって、体を清め、生前に着ていた着物のなかで上等なものを着せる。手は胸の上で組ませる。北枕で安置し、上から着物を裏表逆さにして被せる。枕元にはご飯の上に生前使っていた箸を一本立てる。通夜は、横浜の葬儀場で行われ、参列者は家族・親族 5 名、関東太平(平田)会の知人 16 名の参列があった。香典は 30 件ほどであった。

告別式は翌 29 日、通夜に引き続き家族・親族 5 名、知人 16 名の参列があった。葬儀社

<sup>53</sup> 関東太平(平田)会は関東圏に住む平田出身者による郷友会で会員数約 100 名の組織である。



の式次第で僧侶の読経により、家族・親族の焼香に続いて一般会葬者の焼香と続く。焼香が終わると、棺に参列者がそれぞれに生花を手向ける。その後、親族代表の挨拶となる。親族代表の挨拶が終わると、遺体は火葬場へ出棺移動する。

火葬場に着くと、遺体を炉に入れる前に僧侶による読経があり、参列者は遺族より順に焼香する。それが済むと炉に火が入れられ約2時間で焼きあがる。その間に参列者は休憩室で葬儀社が準備した弁当の飲食と故人の思い出話をしながら遺体の焼き上がりを待つ。骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に拾骨し、骨壺に入れ最後に喉仏と頭蓋骨を納める。拾骨が済むと自宅に戻る。火葬場から火葬骨とともに火葬場の捺印のされた埋葬許可書を受け取る。埋葬許可書は納骨する納骨堂管理者に提示する。

### 3) ノウコツノギ(納骨の儀)

故人が亡くなった2年後の4月25日に2016年に建立された平田共同納骨堂[写真3-11]でノウコツノギを行った。共同納骨堂前広場でのノウコツノギの参列者は、長男夫婦と弟1名、甥2名、集落の人6人、知人2名の総勢13名であった。



写真 3-11 平田共同納骨堂「精霊殿」(2016 年)

当日の朝から共同納骨堂前に集落の人達によって、受付用のテント張り、焼香台、祭壇をのせる机の準備などが行われた。葬儀社の用意した小さな祭壇が設置され、遺骨、焼香台、線香、ロウソク、マッチ、水、花、酒などが置かれる。午後5時頃から葬儀社の進行により、ノウコツノギが開始される。参列者は受付を済ますと、葬儀社の進行により始まる。

葬儀社の用意した読経(カセットテープ)により、遺族、親族、一般参列者の順に焼香とオガミ(拝み)をする。焼香が終わると遺族代表の挨拶となる。通常であれば一般参列者は焼香が終わると帰るが、参列者が少ないこともあり、喪家と共に納骨堂壇へ納骨した。納骨堂壇への納骨の際は、前述のD家と同じように火葬骨を入れた桐箱から骨壺を取り出して納骨した。空になった桐箱は葬儀社が処分する。

家族・親族、ノウコツノギの準備を加勢した人は自宅にもどり、一合飯、ソーメン、干物、てんぷら、煮物と焼酎が出され、飲食を共にし、故人の思い出や今後のことなどを語りあう。

## 3 F家の事例(湯湾)―故人：女性・享年110歳

### (1) F家の家族関係と葬儀準備

故人は、共同納骨堂の出来る前の、ある年 7 月 23 日の夜に入院先の名瀬(現奄美市名瀬)の病院で亡くなった。病院で死亡診断書を受け取り、宇検村役場に死亡届をだす。役場から火葬許可書を取り、瀬戸内町役場に火葬の手続きをする(現在は葬儀社が手続きする)。

家では、亡くなった時刻に時計の振り子を止める。壁にかけてある写真や賞状などの額も裏返しにする。通夜は行わず、遺体は翌日に自宅に帰り、仏壇の前に北枕に寝かせ湯灌等を行う。死者は、お湯を沸かし、体を清め、生前に着ていた着物のなかで故人の好みのものを着せる。手は胸の上で組ませる。上から着物を裏表逆さにして被せる。枕元には 1 合飯の上に生前使っていた箸を 2 本垂直に立てる。シマの人達がクヤミ(悔み)に訪れる。

## (2)火葬

集落では、夕方からの告別式、納骨の儀の準備が始まる。シマの青年団による受付用のテント張りや式場の受付設営が行われる。会場には花輪、弔電などの供物が届くことから数名の係りが待機する。

朝 10 時 30 分に自宅を出て 11 時半頃に瀬戸内火葬場に着く。11 時 30 分より葬儀社の進行により、瀬戸内町本願寺僧侶<sup>54</sup>の読経が始まり遺族から順番に焼香する。それが済むと 12 時に炉に火が入れられ約 2 時間で焼きあがる。

表 3-4 F 家葬儀参列者数

式次第	家族・親族	島外の家族・親族	湯湾集落の人	他集落の人	参列者数
火 葬	12 名	2 名	19 名	14 名	47 名
告別式	12 名	2 名	420 名	100 名	534 名
納骨の儀	12 名	2 名	420 名	100 名	534 名

その間に参列者は、休憩室で葬儀社が準備した弁当の飲食と故人の思い出話をしながら遺体の焼き上がりを待つ。骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に骨上げし、骨壺に入れ、最後に頭蓋骨を納める。拾骨が済むと火葬場から火葬骨とともに火葬場の捺印された埋葬許可書を受け取り集落の共同墓地管理者に提示する。火葬を終えたあと遺骨は一旦自宅に帰る。湯湾では、他の集落と異なり遺骨は火葬場から一旦自宅に帰る慣習がある。そして自宅からコクベツシキとノウコツノギが行われる集落の公民館へ葬列する。

## (3)告別式・ノウコツノギ(納骨の儀)・ミキヤナンカ

喪家では、集落の近親者、親族、知人、職場の同僚などが、炊事や松明、紙と布それぞれの旗づくり、墓地の掃除、テント張りなどノウコツノギの準備の手伝いをする。遺骨が自宅を出る際は、オモテの玄関または縁側の戸口から出る。

炊事場で一つのタイ(松明)に火をつけ、肉親の男性 3 人が交替でコショデ(逆手)にもつ

<sup>54</sup> 僧侶への火葬のみのお布施は約 2 万円、自宅での読経や告別式約 5 万円～8 万円、また火葬の職員にもお礼をする。



て、そのまま外の人にわたす。遺影、遺骨を先頭にマエジュク(前卓)、トームジ、白米、線香、ロウソク、マッチ、酒、水、花、遺影、遺骨を持ち、告別式が行われる湯湾生活館広場まで葬列する〔写真 3-12〕。葬列に使用する松明、紙旗、布旗、花輪などは先に湯湾生活館に届けておく。

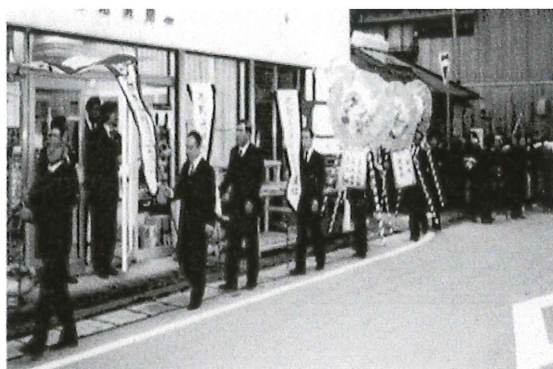


写真 3-12 自宅から公民館までの葬列



写真 3-13 告別式焼香



写真 3-14 公民館から墓地までの葬列

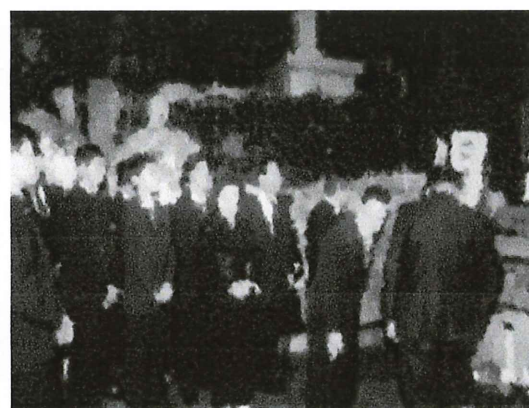


写真 3-15 墓地での納骨と焼香

告別式〔写真 3-13〕は、湯湾生活館広場において、午後 5 時より行われた。一般参列者は、受付で記帳や香典の提供を済ませ、清めの塩の入った香典返しを受け取る。告別式の供物は、生花 10 本、花輪 24 本、香典は 700 件ほどであった。式次第は葬儀社の進行で始まる。僧侶の読経により遺族、親族、一般参列者の順に焼香する。次に遺族並びに親族代表挨拶、弔電披露が行われる。それが終わると一般参列者は帰る。残った、遺族、親族、ごく親しい知人、職場の同僚などで墓地まで葬列する。

葬列〔写真 3-14〕は、若者がもつ花輪を先頭に、松明 3 本、紙旗 3 本、布旗(赤 2 本、白 2 本)、マエジュク(前卓)、ムジ、白米、線香、ロウソク、マッチ、酒、水、花、遺影、遺骨を持ち、墓地まで葬列する。墓地の近くで左廻りに 3 回まわる。墓地の入口の焼香台に遺骨をのせ、遺族から順に焼香と拝みをする。焼香が終わると知人、職場の同僚などの会葬者は



帰る。残った遺族と近親者が墓地のノーコツドー(納骨堂)へ納骨<sup>55</sup>と焼香を行う [写真 3-15]。

納骨堂への納骨の際は、火葬骨の入った桐箱から骨壺を取り出して納骨する。空になった桐箱と布は葬儀社が処分する [写真 3-12 3-13 3-14 3-15 は元田信有氏提供]。納骨が終わると遺族、親族でミキャンカも済みます。ミキャンカが終わると家族・親族は公民館で飲食を共にして故人の思い出話や残された家族のこれからのことを語りあう。

### 葬列の語り

N 氏：男性 70 歳代「湯湾の土葬の頃の葬列は、自宅から告別式を行う墓地の焼香台まで行っていた。その頃の宇検村ではほとんどの集落で葬列を行っていたと思う。湯湾では火葬になってから、告別式を行う墓地の共同焼香台まで葬列していた。告別式を公民館や生活館でやるようになってから、火葬場から一旦自宅に戻り、自宅から公民館あるいは生活館まで葬列した。告別式が終わると式場から墓地まで葬列していた。2015 年に共同納骨堂が出来てから葬列は行われていない」。

### (4) 共同納骨堂(湯湾やすらぎの里)へのカイン(改葬)

故人の遺骨は、墓地のノーコツドー(納骨堂)から 2015 年完成の共同納骨堂「湯湾やすらぎの里」[写真 3-16]へカイン(改葬)されている。また、湯湾では共同納骨堂の建立により、親族で利用する墓から家族単位の納骨堂壇が確保されている。

## 4 G 家の事例(湯湾)―故人：女性・享年 100 歳

### (1) G 家の家族関係と葬儀の準備

故人は、コロナ禍の 8 月 23 日夜に奄美市内の入院先の病院で亡くなった。喪主は長男である。長男は一度島外に出てから U ターン移住し、役場に勤めていたことから村内外に多くの知り合いを持つ。亡くなると故人に近い身内の人が、家族・親族および集落、故人の関係者への告知を行う。葬儀に関する死亡診断書、死亡届、火葬許可書、埋葬許可書、病院からの搬送、通夜、コクベツシキ、ノウコツノギの段取り等はすべて葬儀社に依頼した。

喪家では、亡くなった時刻に時計を止め、壁にかけてある写真や賞状の額を裏返しにする。遺体は病院から葬祭場に搬送され、葬祭場の居室に北枕に寝かせ湯灌等を行う。死者は、係りの人の手で、体を清め、生前に着ていた着物のなかで故人が好んでいたものを着せる。手は胸の上で組ませる。上から着物を裏表逆さにして被せる。枕元には 1 合飯の上に生前使っていた箸を 2 本立てる。シマの人や知人がクヤに訪れる。

### (2) 通夜

表 3-5 は、G 家における葬儀の参列者を示す。通夜は翌 24 日に奄美市内の葬儀場ホール

<sup>55</sup> 写真 3-14 3-15 は、平成 7(1995)年当時のノウコツノギ(納骨の儀)の葬列と納骨の様子である(湯湾 N 氏提供)。

で行われた。参列者は家族・親族 16 名、湯湾集落 90 名、他集落 60 名の参列者があった。昼過ぎに納棺を行い、夕方より通夜を行った。納棺の際、棺に納めるものでは、故人が生前愛用したものや片方の鼻緒を切った履物(草履や下駄)なども入れる。

表 3-5 G 家葬儀参列者数

式次第	家族・親族	島外の家族・親族	湯湾集落の人	他集落の人	参列者数
通夜	8 名	8 名	90 名	60 名	166 名
告別式	12 名	8 名	0 名	0 名	20 名
火葬	12 名	8 名	0 名	0 名	20 名
納骨の儀	12 名	8 名	150 名	90 名	260 名

### (3) コクベツシキ(告別式)

8 月 25 日は 10 時ごろより家族・親族でお別れ膳での共食が行われた。午後 1 時より葬祭場ホール [写真 3-16] で葬儀社の進行により、葬儀社の手配した僧侶の読経により遺族の焼香と拝みが行われた。告別式の参列者は、コロナ感染予防のため家族・親族のみの 20 名に制限された。焼香が終わると参列者がそれぞれ棺に生花を供え、火葬場に向けて出棺となる。

### (4) 茶毘の儀

奄美市斎場 [写真 3-17] に着くと午後 14 時半ごろより、僧侶の読経で喪主より順番に焼香する。それが済むと炉に火が入れられ約 2 時間で焼きあがる。その間に参列者は休憩室で葬儀社が準備した弁当での飲食と故人の思い出話をしながら遺体の焼き上がりを待つ。骨が焼きあがると、収骨室で故人に近い人から順に骨上げし、骨壺に入れ最後に喉仏と頭蓋骨を納める。

拾骨が済むとノウコツノギが行われる共同納骨堂「湯湾やすらぎの里」[写真 3-18] に向かう。火葬場から火葬骨とともに火葬場の捺印のされた埋葬許可書を受け取り集落の共同納骨堂管理者に提示する。火葬が済むと火葬場を午後 4 時半に出発し、一旦自宅に帰る。6 時頃よりノウコツノギが始まる。

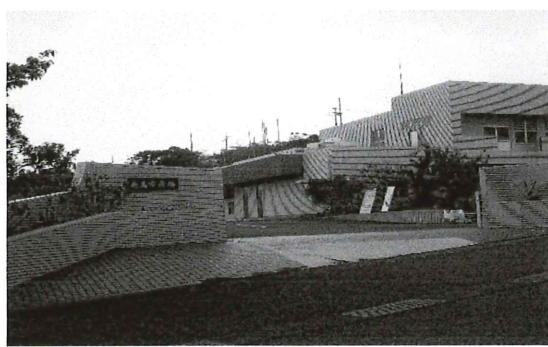


写真 3-16 Y 葬儀社葬斎ホール (HP より転載) 写真 3-17 奄美市斎場

#### (5) ノウコツノギ(納骨の儀)・ミキャンナカ

喪家では、集落の人や青年団の人によるテント張りなどノウコツノギの準備の手伝いをする。共同納骨堂前広場では、青年団の手によって、受付用のテント張り、焼香台、祭壇をのせる机の設置が行われる。祭壇は葬儀社により机の上に設置される。

遺骨は火葬場から一旦自宅に帰宅する。遺骨が自宅を出る際は、オモテの玄関または縁側の戸口から出る。ノウコツノギは、午後6時ごろより共同納骨堂「湯湾やすらぎの里」[写真3-18]ではじまり、家族・親族20名、湯湾集落150名、他集落90名の総勢260名の参列があった。祭壇には、遺骨、焼香台、線香、ロウソク、マッチ、水、花、酒などが置かれる。

参列者は、受付で香典を渡し、清めの塩の入った香典返しを受け取る。香典料は3,000円ほどが一般的である。それは故人やその家族とのつながりによって金額に違いがみられる。今回の供物は生花14件、香典427件(210万円)の提供があった。

#### 香典の語り

N氏：男性70歳代「湯湾では香典に関する金額の規範は特にないが、一般的には三千元程度が多いのではないか。親族や職場関係および集落でのつながり度合いによってその金額はまちまちである」。

式次第は、葬儀社の進行で始まる。僧侶の読経による遺族、親族から順に焼香が行われる。参列者の焼香が済むと弔電披露、親族代表謝辞が行われる。それが終わると一般参列者は帰る。残った遺族、近親者、近しいシマの人が共同納骨堂壇へ納骨する。納骨が終わるとミキャンナカが行われる。その後自宅に戻り、飲食をともにし、故人の思い出を語りながらこれからのことを話し合う。

#### 葬列に関する話

N氏：男性70歳代「葬列は20数年前まで、共同墓地の入口に焼香場があり、そこで告別式を行っていたので自宅から一回の葬列であった。また集落内の公民館(生活館)で告別式を行う場合は、遺族、親族など近親者により自宅から告別式会場までと告別式会場から墓地までは、集落の多くの人が葬列した。公民館で告別式を行う場合は、葬列が二回行われていた。2015年に共同納骨堂が出来てから葬列は行われていない」。

#### ミキャンナカ・シジュウクニチ

N氏：男性70歳代「湯湾では共同納骨堂が出来るまで自宅から共同納骨堂まで葬列が行われていた。ミキャンナカ(三日七日)は、亡くなってから三日目に行うとされているが、近年は喪主が遠方に居住している場合が多く、仕事の都合などにより、ノウコツノギのあとにミキャンナカを行い、その後二三日目にシジュウクニチ(四十九日)を行っている。シジュウクニチのあとはシンセキで飲食を共にしながら、故人亡き後のこれか



らを語り合う場となる。翌日は家族で手分けして香典をもらった集落の人たちへお礼回りをする。シジュウクニチは、かつては、親族の他に集落の人、知人、職場の同僚など親しい人たちが多いところで100人、少ないところでも40～50人ほど参加して祭宴が行われていた。近年は親族のみで行っていることが多い」。

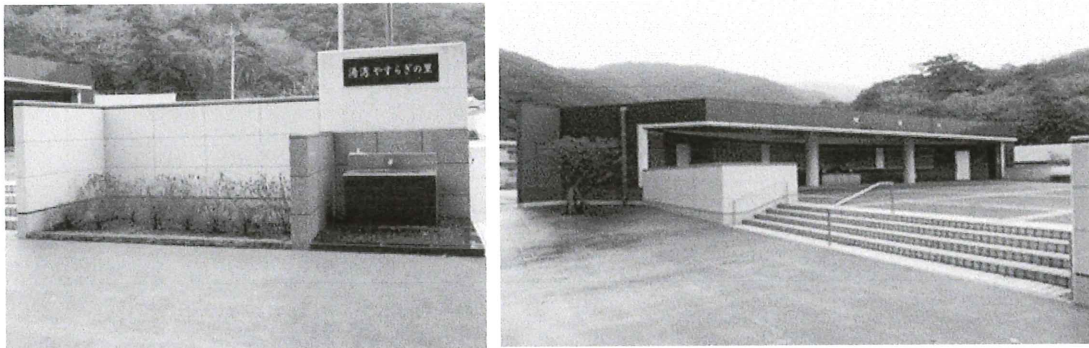


写真 3-18 共同納骨堂「湯湾やすらぎの里」2016 年筆者撮影。

このような葬儀の変化に関し、N氏に聞くところによれば、「土葬と火葬の併存した1970年代の葬儀は、親族(ヒキ)<sup>56</sup>はもちろんのこと集落民挙げての儀礼であった。湯湾は人口が多いため全集落民は参列しないが、隣の田検集落では集落民全員が仕事を休み参列していた。儀式は通夜・告別式・お礼参り・ミキャナンカ・シジュウクニチと何日もかけて執り行っていたが、今日では二三日で済ませる。かつて、人の死を嘆き悲しみ多くの手間暇と時間をかけて弔いの儀式を行っていた。ウヤフジ(先祖)を敬い祀り、集落の中にはウヤフジの霊をはじめ、多くの万物の霊が宿ると信じ、生活をしてきた先人たちの考えが次第に薄れ、それは儀式の簡素化、簡略化にも繋がってきている」と聞く。

湯湾では共同共同納骨堂が出来るまで、葬列が行われていたが、今日では納骨儀礼のみとなっている。またミキャナンカもノウコツノギのあとに行われ、シジュウクニチも葬儀の三日目に行われるという儀礼の引き寄せが一般化している。

## 5 墓の共同化による儀礼の移行

### 1) 平田共同納骨堂お「精霊殿」・湯湾共同納骨堂「やすらぎの里」の事例1

宇検村では、高齢化による墓管理の問題から集落で管理する納骨堂の共同化が進められている。湯湾と平田では、それまでの家墓の経年化や人口減少を伴う高齢化による墓管理の問題を解決するため、湯湾共同納骨堂(2015年/190壇)と平田共同納骨堂(2016年/76壇)がそれぞれ数千万円を投じて建設されている。本項では平田の建設事例を中心にみている。

<sup>56</sup> ヒキとは、父母の血筋につながる「姓ビキ」「縁ビキ」を言い、このヒキをもとに「ハロウジ」と称される親族組織が形成されている。宇検村ではこの親族組織をハロウジの転訛と考えられる「ハロチ・ハルチ」と呼んでいる。

### (1) 墓地をめぐる問題

平田集落で管理する共同埋葬墓地は、県道沿いに約 80 基の家墓が建立されている。この共同墓地に移転する前は、砂丘上に形成された集落の中ほどに近隣集落を含めた死者を埋葬した砂場の共同墓所があったとされ、今でもそこを掘ると古骨が出てくるといわれている。その共同埋葬墓所から阿室集落寄りの県道沿いに移転した共同墓地の管理をめぐって、次のような問題があり共同納骨堂建設の発端となっていた。下記に示す墓管理の問題については、K 区長(2016 年当時)へ聞き取りしたものである。

第一は、奄美では旧暦 1 日に墓参りの習俗があり、高齢者にとって都度の生花の活け替えや清掃、さらに村外に移住した複数の親族の墓守は労力的、経済的に大きな負担となっている。第二に、家墓はカーロートを伴う石塔墓の建立にあたり、近隣に対する見栄意識から近年高級化(1 基 70 万円以上)する傾向にあることから、年金生活者にとって経済的な負担が課題としてある。

第三は、近年の傾向として、無縁墓や村外移住者による改葬が増えているという問題がある。日本における「遺骨の所有権」は、民法第 897 条(祭祀条項)のもと、遺骨は祭祀財産と位置付けられ、その所有権は祭祀継承者にあると解釈されている。平田集落においても、ここでのいう無縁墓や祭祀財産の継承者のいない世帯が 12 世帯あり現実的な問題として顕在化している。

第四は、他出移住者より集落に残した墓の「祖先の拝み」と「維持管理」の相談が寄せられている。以上の墓地をめぐる四つの課題を踏まえ、1989 年に当時の区長から田検集落のような先例<sup>57</sup>にならった共同納骨堂建設の提案があり集落内で検討された。

### (2) 共同納骨堂建設をめぐる問題

これらの課題の中で、特に住民の高齢化による墓参の労力的・経済的な負担と維持管理の問題、そして他出地移住者から墓管理の問題から共同納骨堂造立の強い要望があったことから、1989 年集落の常会において当時の区長から提案がなされた。

しかし、建設用地確保や建設資金問題、そして一部集落民による「先祖代々の墓をつぶすわけにいかない」という反対意見があったことから納骨堂造立に集落民の合意を得ることができなかった。まして当初の計画における建設資金(5 千万円)の目途が立たないこともあって計画は暗礁に乗り上げた形となった。結局、このような問題解決に多くの時間を費やすことになり、当初の発案から 2016 年の完成まで 27 年を要したことになる。

K 区長(2016 年当時)によると、この共同納骨堂造立発案にあたり、集落内すべての人たちが賛成だったわけではなく、集落民の 1 割程度が建設に批判的であった。理由は「〇〇家之墓として代々守ってきたものを自分の代で共同納骨堂に改葬することはもってのほか」との意見が多かったという。ここで推進派と反対派の意見について検討してみる。

<sup>57</sup> 2016 年までの宇検村各集落の「精霊殿」完成は次の通りである。田検 1967(昭和 42)年、芦検 1996(平成 8)年、部連 1997(平成 9)年、屋鈍 2000(平成 12)年、名柄 2009(平成 21)年、阿室 2012(平成 24)年、湯湾 2015(平成 27)年、久志 2016(平成 28)年。

### 推進派の意見

**K氏：男性 70 歳代**「この集落はお年寄りが多く、毎日の墓の掃除や毎月毎の墓参りはきついという人が多く、中には 1 人で他出移住者の親族数件の墓守をしている人もいる。月毎の墓参りの生花の活け替えや新しく墓を建てる費用など経済的に困っているが少なからずいることもあり、同じ場所で祖先供養ができる田検集落のような施設が欲しいとの声が多い。また、中には長年住み慣れた土地に骨を埋めたいという人もいる。他出移住者からは、親戚に墓守を依頼している人が多いこともあり集落で管理する共同納骨堂造立を希望する声が寄せられている」。

### 反対者・慎重派の意見について

**M 区長：男性 60 歳代**「反対者の多くは高齢独居者である。その跡継ぎである子供たちは村島外に在住しており、地元の墓を継承する意思はあまりない。親が亡くなったら自分たちの住んでいる近くの墓所に改葬されるだろう。また、島内に住んでいる子供たちは村内か島内のいずれかに墓地を求めることになると思われる」。

表 3-6 共同納骨堂建設をめぐる問題

項 目	現況と課題
平田集落の葬送祭祀	◇通夜(自宅)、僧侶は参与しない。 ◇ソウシキ(奄美市内、瀬戸内葬祭場)、僧侶参与 ◇火葬(奄美市斎場あるいは瀬戸内町営斎場) ◇ノウコツシキ(集落内共同埋葬墓地) ⇒ノウコツシキにおける僧侶の参与は各喪家次第による ◇四十九日と年忌(自宅)
墓地管理の問題	◇旧暦 1 日・15 日墓参は高齢者にとり労力的・経済的な負担 ◇カロート式石塔墓の高級化による経済負担増 ◇無縁墓、他出地への改葬、無継承世帯の増加 ◇他出移住者より祖先の拝みと墓管理の相談
共同納骨堂建設の提案	◇都市移住者から共同納骨堂建設の提案 ◇1989 年に集落常会にて提案
建設をめぐる問題	◇建設に対する反対者(集落の約 1 割の人が反対) ⇒「イエ」観念に対する自責 ◇建設地の確保と跡地利用 ◇建設資金(当初概算予算 5 千万円)の工面をどうするか

ここでの反対者の意見については、当事者の意見を直接聞くことができず区長からの代弁となったことを記しておきたい。これらの共同納骨堂造立に対する問題点について、表



3-6 の通り整理する。

前述の聞き取りでなかで、推進派の意見として高齢化による墓管理や経済的な問題が大きく横たわっており、一方、反対者の意見として、祖先に繋がる家墓消滅の危惧があることがわかった。奄美では「家」に関する観念は希薄であると言われている反面、鹿児島をはじめ日本本土の人々と密接な関係をもつ一部の上層には「イエ」観念の存在が見られる。

及川高は、奄美の「イエ」的な親族構造について次のように述べている。奄美民衆の「近代化」ひいては「日本への同化」とは、親族制度の「イエ」、すなわち男系的・直系的な動きがあったことを指摘している。この平田集落における家墓の「〇〇家之墓」意識はまさしく、奄美大島における「イエ」観念の表れともいえ、約1割の世帯で強い「イエ」観念を持っていることがわかった。

### **(3) 共同納骨堂建設の経緯**

#### **反対者の問題**

当初の提案から10数年後の2009年によりやく実行委員会が設立されてから徐々に進展をみるようになった。まず、反対者については、自治会の役員が何度も説得に奔走したが翻意できなかった。結局、話し合いの末に自分たちの家墓は改葬しないが、集落で建設すること自体には反対しないということで決着した。集落としても共同埋葬墓地の跡地利用予定がないことから当該家数件の家墓は現状のままにしておくことになった。

しかしながら、この問題の解決は先送りとなっているため、いずれは何らかの解決を見出さなければならず、今後の課題として残されている。

#### **建設地の確保・資金工面**

次の建設地の確保については、墓地の隣接地をゲートボール場として利用していたが、高齢者が多く未利用状態であることから建設地に決めた。最後の関門は、建設資金集めである。実行委員会において建設計画を立案し、各郷友会に出向き説明したが資金集めの方策が具体的でなく多くの賛同を得るに至らなかった。

実行委員会の懸案事項を集落に持ち帰り、寄合で具体策の検討を重ねたが、委員会内における意見の隔たりが大きく結論が得られず時間だけが無為に過ぎてしまった。これはリーダー不在に負うところが大きいと考えられ、これを解消すべく2013年に元関西平田会会長のK氏がUターンし、区長として活動を始めてから建設に向けて動き出した。

#### **納骨堂壇の売却と寄付金募集**

表3-7は、共同納骨堂建設をめぐる問題から解決までを整理したものである。集落事業としての大きな懸案事項は、建設資金2,500万円の工面をどうするかであった。建設地の整備費は、村からの拠出金5百万円を充てることとし、上屋の建設費は、寄付金と納骨堂壇の売却でまかなうこととした。

寄付金と納骨堂壇の募集にあたって、役員が集落の寄合や名瀬郷友会、関西平田会、関東

太平会などの総会に出向き、共同納骨堂建立の趣旨と寄付金、納骨堂壇売却に関する説明を行った。

表 3-7 平田集落共同納骨堂造立をめぐる問題と解決

課 題	内 容	結 果
反対者の問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>●説得を試みたが翻意出来なかった</li> <li>●集落での建設には反対しない</li> <li>●区長のリーダーシップに期待</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●墓地の跡地利用計画がなく当該家の家墓は現状のままに残す。</li> </ul>
建設地の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>●墓地の隣接地のゲートボール場に建設</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●整備費用は村で拠出 ⇒5 百万円</li> </ul>
資金調達	<ul style="list-style-type: none"> <li>●建設資金 2,500 万円の工面</li> <li>●納骨堂売却 ⇒集落民：20 万円/一世帯 ⇒村外移住者：30 万円/一世帯</li> <li>●寄付金 ・集落民 ・村外移住者 1 万円以上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●調達資金(約 3,000 万円) ・納骨堂売却 ⇒1,850 万円</li> <li>●寄付 ⇒1,000 万円以上</li> <li>●剰余金は維持管理費</li> </ul>
共同納骨堂の完成	<ul style="list-style-type: none"> <li>●納骨堂建設による焼骨と改葬儀礼</li> <li>●落成式→集落民と出身者が 70 名出席</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●複葬儀礼の継承</li> </ul>
村外移住者との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生花や線香の提供</li> <li>●家族・親族の拝みの委託</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●集落と移動家族の空間的な社会的共同生活</li> </ul>
葬送祭祀の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>●宗教者の介在しない集落による運営</li> <li>●家族機能の外部委託</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地縁共同墓的な墓祭祀</li> </ul>

納骨堂壇募集は、当初 62 基の計画であったが予想以上の申し込みがあり、76 基<sup>56</sup>まで増設することとした。売却価格は 1 基あたり集落民 20 万円×40 基＝800 万円、村外移住者 30 万円×35 基＝1,050 万円とし、残り 1 基は無縁墓に充てることにした。その他、集落民や村外移住者から 1 千万円以上の寄付が寄せられ、納骨堂壇売却と寄付を合わせ、総額 3 千万円以上の資金が集まった。建設資金(2,527 万円)の支出以外の剰余金については、維持管理費として計上することになっている。

共同納骨堂建立後の維持管理についても検討がなされ、①敷地内の草取りや清掃は集落内で三ヶ月毎に行う。②納骨堂の電気、水道などは維持管理費でまかなうこととなった。③建物の劣化に伴う改修費用は今後の検討課題とした。今回の共同納骨堂建設にあたり、結果として集落民の総意はなく、反対者による墓地問題は当事者の解決すべき問題として先送りにされていることから今後の解決すべき問題であることに変わりはない。

#### (4) 共同納骨堂の完成

<sup>56</sup> 1 基あたりの面積は横(0.6m)×高さ(0.45m)×奥行(0.68m)、約 15 個の骨壺を納めることができる。

地元情報新聞「南海日日新聞」の2016(平成28)年10月24日付に掲載された「平田に共同納骨堂、宇検村で9集落目、落成、出身者も祝う」の見出し記事を紹介する。

#### <南海日日新聞の記事>

宇検村平田集落で(〇〇区長、50世帯)の共同納骨堂(墓地)がこのほど完成し、23日に同集落公民館で落成祝賀会があった。村内14集落のうち、共同納骨堂を建立したのは平田で9集落目、式には〇〇副村長や村会議員、集落住民、出身者など70人が出席し、落成式を祝うとともに集落の発展を願った。共同納骨堂は、集落の墓地隣に建設、建立計画は、集落の過疎、高齢化などによる墓地管理の問題から、1989年に提案があって以来検討を進めていた。落成式で〇〇区長(68)は「納骨堂建設には多大な寄付もいただいた。集落出身者の故郷を忘れず、絆を大切にする心の表れかと思う。この一大事業の完成は、必ずやこれからの集落の発展につながると力を込めた。」[南海日日新聞2016年10月24日朝刊](原文のまま一部抜粋)。

当日は、名瀬郷友会、関西平田会、関東太平会から20数名の出席があったという。この落成式は、集落の人達、行政、各郷友会の人達が一同に会し、「集落のこれからのこと」を話し合う絶好の機会を与えてくれている。

今回の共同納骨堂の建立にあたり、旧共同埋葬墓地とその家墓、個人墓は消滅していることから、完成した共同納骨堂は参拝壇が一箇所のみであり、それが一つの墓としてみなされるかどうかという疑問が残る。この疑問に対し、共同納骨堂の内部には各「イエ」と共に区画が明確に区切られており、表札も掲げられていることから、それぞれの区画を「家墓」として対応していると捉えることが可能である。

共同納骨堂の運営は、集落民をはじめとして親子山村留学のIターン者を含めた月毎の定期清掃や旧暦月1日の墓参は、シマ住民のコミュニケーションの場として機能していると考えられる。このような共同作業は、人口が減少する前の村落共同体の役割を引き継いでいると考えられ、かつての地縁・血縁による相互扶助を基盤とした村落共同体に近いものがある。まして共同納骨堂の建設は、シマの人々とシマを離れた人々との共同性なくしてなれないことであった。

平田集落共同納骨堂「精霊殿」が完成して初めての墓参り日である2016年旧暦11月1日(新暦11月29日)と三ヶ月後の2017年旧暦2月1日(新暦2月26日)には50人以上の墓参者があったという。死者をどのように偲ぶかという墓の機能をどのように確保していくかという問題について、平田集落は、宗教者の関与しないシマの人による「祭祀の共同性」に委ねた共同納骨堂を選択した。

#### (5)共同納骨堂への改葬

「精霊殿」完成に伴う共同墓地からの改葬にあたって、8基の無縁墓があることがわかった。この無縁墓を移動するときは継承者の承諾が必要であるが、この墓地の無縁墓の継承者



が不明であるため行政に問合せたところ、墓地内の移動であれば問題がないとの回答を得た[M 区長]。また、納骨堂式石塔墓からは 12 基の沖縄製骨壺が出土しており、いずれも土葬の頃の遺物である。

土葬の埋葬方法は、一般的に次のように行われている。まず埋葬した頭の方にツカ(墓標)を立て、それに龕蓋を被せる。その中に下駄、草履を入れる。龕蓋のそばには灯籠が立てられ、ナンカ(死去した日を含めて七日の祭り日)まで毎夕明かりが灯される。龕蓋は、埋めた場所の目印にはなるが薄い板で作られているため数年たつと朽ちてしまう。そうになると釘などが出て危ないので取り除き、代わりにナバイシ(茸石=テーブル珊瑚)が置かれる。戦後の墓は、ナバ石に変わって日本本土式石塔墓が移入され、地下式納骨堂石塔墓や地上式納骨堂石塔墓などに变化している。

洗骨改葬は、埋葬してから 7 年から 13 年ほどでカイソ(改葬)を行う。洗骨は女性の仕事とされ、海水(集落によっては焼酎で洗うところもある)で洗い、沖縄製の骨甕に足の骨から入れて、最後に頭蓋骨を入れる。石塔を移動して甕を埋めてから石塔を元の位置に戻す。

この地区では、1990 年初頭まで洗骨改葬を行っていたが、それ以降は火葬に移行している。共同納骨堂へのカイソ(改葬)にあたり、無縁墓古骨八体とナバイシ墓[写真 3-19: 筆者撮影]の地下に埋葬されていた 12 基の沖縄製と思われる骨壺<sup>59</sup>[写真 3-20: 筆者撮影]が出土している。洗骨されていない、無縁墓八体の古骨は墓地においてトタン板にのせ、ガスバーナー(プロパンガス)で火葬した。火葬骨は足骨から順に骨壺に入れ、喉仏と頭骨を上部に納めた。



写真 3-19 ナバイシ(テーブル珊瑚)



写真 3-20 沖縄製骨壺

ここでいう改葬について、1948(昭和 23)年に制定された墓地・埋葬法に関する法律では、改葬とは埋葬した死体を他の墳墓に移し、若しくは収蔵した焼骨を、他の墳墓または納骨堂

<sup>59</sup> 近世以降の宇検方の交易は、本土とよりは琉球との間で伝馬船や帆船や櫓漕ぎの渡航で行われていた。奄美の宇検からは、建築材、芭蕉の繊維、藍(染料)が琉球からは漆器、茶、泡盛などが運ばれた[若林 1981:273]。骨甕は一人入り甕、二人入り甕とあって、沖縄からマラン船の材木商人が持ってきて、集落のある人に預けていた[田畑 1992:74]。

に移すことをいう[昭和 23 年法律 48 号第 2 条 3 項]とある。また、八木透は、奄美を含む地域で行われてきた洗骨改葬の解釈について「一度埋葬した死体を何らかの処置をしたうえで改めて埋葬しなおす、その際に白骨化した遺体を酒や水で洗い清める習俗を洗骨改葬と称している。このような習俗に対して改葬、複葬、二重葬など様々な名称が与えられてきたが改葬という表現が一番ふさわしい」[八木 1995:261]と述べている。

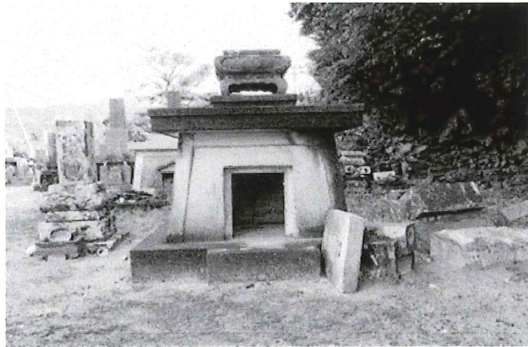


写真 3-21 改葬後の納骨堂式石塔墓

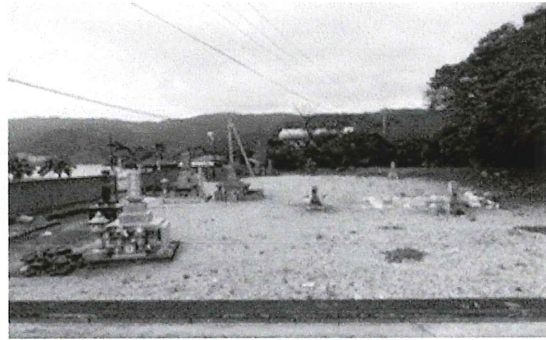


写真 3-22 共同納骨堂へ改葬後の墓地

写真 3-21 (2016 年 10 月筆者撮影)と写真 3-22 (2018 年 3 月筆者撮影)は、改葬後の納骨堂式石塔墓と改葬後の旧墓地である。中に数基の石塔墓が残されている、今後これをどのように処理するのか賢明な解決が望まれる。

今回の共同納骨堂改葬のなかで、洗骨改葬がなされていない遺骨が無縁墓を含め多数掘り出されている。このことは、宇検村を含めた他集落の墓地においても、洗骨改葬が亡くなったすべての人に行われているのではないということであり、人口移動によって数件といえども先祖供養が取り残されていることになる。

この無縁仏の取り扱いに関し、K 区長(2016 年当時)の話によると、無縁墓は戦前戦後の混乱期に職を求めて、沖縄や村外都市部に転出した人たちが多く、継承者が不明な墓があるため系譜をたどり調査中とのことである。

#### (6) 湯湾の共同墓地の分骨

湯湾共同納骨堂の建立にあたり、旧共同墓地とその家墓、個人墓は消滅していることから、完成した共同納骨堂の参拝壇が一箇所のみであり、それが一つの墓としてみなされるかどうかという疑問が残る。共同納骨堂の内部は、各「イエ」ごとに区画が明確に区切られ、表札も掲げられていることから、それぞれの区画を家墓として対応していると捉えることは可能である。

共同納骨堂の運営は、区長が責任者となり、集落民をはじめとして、U・I ターン者を含め毎月毎の定期清掃や旧暦月一回(他の集落は旧暦月二回)の墓参はシマのコミュニケーショ



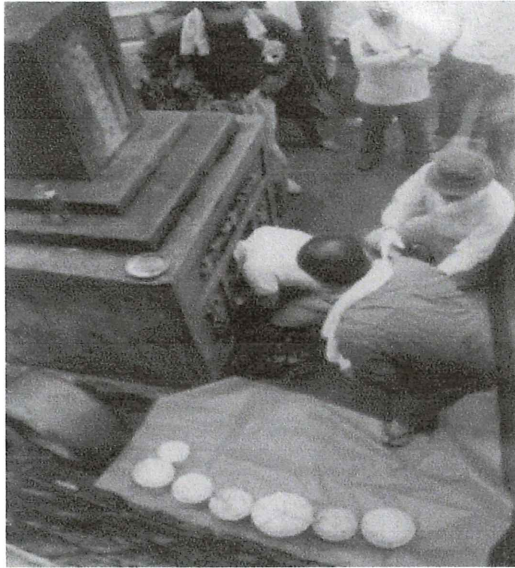


写真 3-23 共同墓地からの分骨作業

ンの場として機能している。また、湯湾において共同納骨堂の建立の際、従来の親族で利用する墓から、共同納骨堂への分骨が見られる〔写真 3-23 元田信有氏提供〕。

湯湾の N 氏(男性 70 歳代)の話によると、湯湾では、2015 年の共同納骨堂建立の際に親族で利用する墓から分骨を行い、ほとんどの人が家族単位で納骨堂壇を確保したことから現在 200 基(当初は 190 基)ほどの納骨堂壇になっているという。

平田と湯湾では共同納骨堂の完成により、葬儀のノウコツノギがそれぞれの共同納骨堂前の広場で行われるようになった。

## 2) 田検共同納骨堂「精霊殿」の事例 2

### (1) 共同納骨堂建設の経緯

田検集落共同納骨堂「精霊殿」〔写真 3-24〕は、1967(昭和 42)年に宇検村で最初に建設されたものである。旧墓地の石塔墓は参道脇に立てられている〔写真 3-25〕。

T 区長によれば、建設用地は地元篤志家からの寄付と集落有財産処分 150 万円、在郷集落民負担 50 万円、他出者からの寄付金 152 万円、村からの補助 13 万円など約 372 万円と造成工事は集落民の労力奉仕で建設(納骨収蔵 72 基)された。その後、増設の話があり、一基あたり 10 万円で 20 基を新規募集したと聞く。



写真 3-24 田検共同納骨堂「精霊殿」

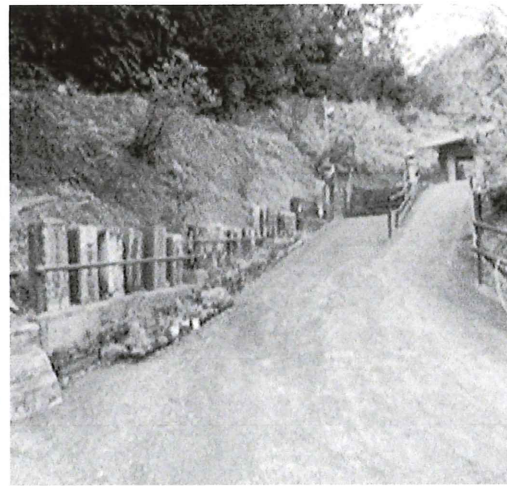


写真 3-25 参道に立てられた旧石塔墓



そもそも、なぜ昭和 40(1960)年代に田検集落で納骨堂造立の話がでたのか、福ヶ迫加那によれば、「田検集落の場合は将来的な可能性に対する、いくぶん先を見据えた活動にあったように見受けられる。それは、持続的な墓管理に対する不安の声があったものの、周辺集落に比べると人口減少率が低く、墓管理の代行や継承困難が危機的状況とまでは認識されていなかった。むしろ、火葬がはじまり、経費をかけて新しくノーコツドーを造ることをきっかけとして、先の見えないこれからの社会、あるいは家族、親族といった存在や関係性を見据えたときにそうした可能性を事前に回避する形で『墓の共同化』が案出されたと考えられる」[福ヶ迫 2014:17]と述べている。

## (2) 共同納骨堂の現状

田検集落の共同納骨堂は、火葬がはじまり、新しく経費をかけて個々人の納骨堂を造ることの是非がきっかけとなっていることにある。1960 年代といえば、奄美大島で火葬が本格化する時期でもある。平田集落の共同納骨堂造立の契機が高齢化と無継承者の増加の問題であることを考えると、田検集落のそれは新しく個々人の共同納骨堂を造る経済的な問題としての違いがみられる。しかし、いずれの造立の契機は異なるにしても田検集落の共同納骨堂造立は、日本の今日的墓問題における状況を先見していたものであると考えざるを得ない。

その田検集落「精霊殿」も建設から 50 年を過ぎ、外構壁のひび割れや屋根の劣化による漏水があり、2017 年に 60 万円(集落勘定)程かけて補修を余儀なくされた。ただ、納骨堂独自の台帳(集落の会計に一括)もなく、また積立金もないことから、これからの老朽化する建物改修費などだれがどのように負担するのか難しい問題が残されているという。このような課題について、T 区長から次のような話を聞いた。

**T 区長：(田検集落)**「近年、都市移住者による居住地への改葬が増えていることや継承者のいない遺骨が増えている。納骨堂の清掃日を毎月第三日曜日としているが若い世代の参加が少ない。また月 2 回の墓参りも若い人の墓参が少なく懸念している」[2018 年 3 月]。

田検集落共同納骨堂は、建物の老朽化による維持管理費の支出が増加傾向にあることから、共同納骨堂の「墓参」と「維持管理」について若い人の関心を如何に高めるかがこれからの課題としてある。田検集落では、共同納骨堂が建設されてから毎月の墓参やノウコツノギが伝統儀礼として続けられている。これから、老朽化した共同納骨堂の維持管理という問題が重くのしかかっている。

## 3) 高齢化が進む屋鈍共同納骨堂「精霊殿」の事例 3

### (1) 屋鈍の概要

屋鈍集落は三つの道筋で構成されている [図 3-6]。一つ目のヤマンミチヌカドグチ(山の

道に行く門口)は、山の道に通じ、右手に共同納骨堂が建てられている。二つ目のウトウルシャカドグチ(怖いところの門口)は、アシャゲ、カミミチからトネヤ、石敢當に通じる道筋となっている。三つ目のデンギンシャヌカドグチ(デイゴの木がある門口)の道筋は、デイゴの木やサンゴの石垣が並んでいる。

かつて大正期後半から昭和にかけて鰹漁が盛んであった、シマのはずれにあるカツオブシ製造工場跡地が、当時の面影を偲ばせる唯一のものとなっている。トネヤでは、かつて旧暦の1月10日(新年)、9月9日(クガツクンチ)に若い娘がミキ(神酒)を造っていた。また、台風対策として石垣に使われているテーブルサンゴは墓石としても利用されていた。

### 屋鈍集落位置図



図 3-6 屋鈍集落の共同納骨堂位置図、宇検村教育委員会：UKEN シマップ屋鈍編より転載

その屋鈍集落の 1970 年代から 1990 年代のシマの様子について次のような記述がある。1970 年代の屋鈍集落の記述として、「この集落は焼内湾に入口にあって、かつて海上航路の時分は名瀬に最も近い便利な場所であった。しかし、陸路と化した今日では次第に中心は湾奥の湯湾となり、そこから最も遠い辺境の地となった。大正期後半は鰹漁の最盛期であり、多いときは 130 世帯もあった世帯数が、前述の通り(1975 年 36 世帯)今では高齢者と病人ばかりの集落となっている」[若林 1981:327-328]。

また、1990 年代の記述として、「屋鈍集落では昭和 40 年代前半まで辛うじて存在したサトウキビ生産と漁業、紬織りだったが、その後、サトウキビ生産は消え、半農半漁も一層の縮小をみている。集落での生計を支えていたのは、紬織りによる現金収入と年金(生活保護受給を含む)であり、驚くべき過疎と不便に覆われた地域社会の解体状況が強調されている」[川原 2007:125]。

筆者は、上記のような記述がなされている当地を 2016 年～2018 年に訪れた。集落の第一印象は、カミミチを中心に整然とした道筋と建物の佇まい、アダンやデイゴの木が陽光に照らされ、東シナ海に青々と広がる海の光景は、とても高齢者と病人の集落という表現が似つかわしくないように感じた。それは、むしろ高齢者の暮らす南海の楽園という表現がもっともふさわしいのではないかとさえ思われた。その屋鈍集落の 2017 年の人口は、1990 年代の人口 55 人(世帯数 31)とほとんど変化がみられない。

このことは屋鈍集落が、高齢化と人口流出によって縮小衰退の一途をたどったのではなく、集落の世帯と U・I ターン者と住民の構成を様々に入れ替えながら、幾分に縮小しつつも再生産されて今日に至っていると考えられる。今日の屋鈍集落の人口は、毎年 1 人か 2 人の U ターン者と 2010 年から始まった阿室校区の親子山村留学による I ターン者の移住によるところが大きい。

U ターン者は、集落の区長・民生委員・老人会長など集落の運営職や高齢者見回り活動など集落の自治に欠かせない存在となっており、屋鈍集落は、移住者によって支えられているといっても過言ではない。

一方、親子山村留学の親御さんは、集落内のカフェ経営、農業、建設会社、大工、マグロ養殖会社、焼酎工場などに就業し、生活の糧としている。しかし、集落人口の 70%以上が年金生活者であり、それも低額受給の国民年金が大半である。これから介護保険料や健康保険等の増額などを考えるとき、経済的な困窮に追い込まれる懸念が依然として残されている。

## (2) 高齢化による労力的・経済的問題による共同納骨堂建設

屋鈍集落では、2000(平成 12)年に宇検村で 5 番目の共同納骨堂「精霊殿」を建立した[写真 3-27]。それまで、この集落の墓地には大小さまざまな個人墓・家墓が 130 基ほど並んでいた。この墓を僅か 34 世帯で墓守をしていた。この集落における共同納骨堂建設の理由として、高齢化による複数の墓管理が体力的・経済的な問題があった。屋鈍集落区長から、この共同納骨堂建設に関する次のような話を聞くことが出来た。

**屋鈍集落区長：(2016 年当時)**「従前の墓は<sup>タビシ</sup>屋形やナバ石(テーブル珊瑚) [写真 3-26] など、大小さまざまな個人墓が 130 基ほど並んでいたが、個人墓を廃し、共同墓地公園内の共同納骨堂に合祀した。1 人で数件の墓を管理するのは体力とお金の面でしんどいという人が多かったということから建設が始まった。資金の工面として、公園の整備は村からの補助と共同納骨堂の建設は他出者、および在郷集落民の寄付(他出出身者の 1 個人から 1 千万円以上の寄付があった)等で約 4500 万円を費やし 2000 年に完成している」。

**屋鈍集落区長：(2016 年当時)**「以前、この集落は、毎月 1 日、15 日の定期的な墓参の他、年中行事である盆、アラセツ、ドゥンガに祖霊のもてなしを行っていた。祀って



いる墓は、父母系の家族・親族、さらには祖父母の異父兄など多岐にわたっている。また、不明な墓や本土へ渡った人の墓まで忘れずに祀ってある。共同納骨堂には、これらのすべての遺骨が合祀されている」。

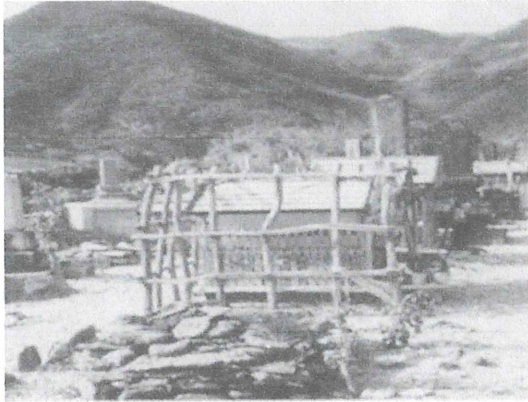


写真 3-26 屋形墓・手前はナバイシ墓

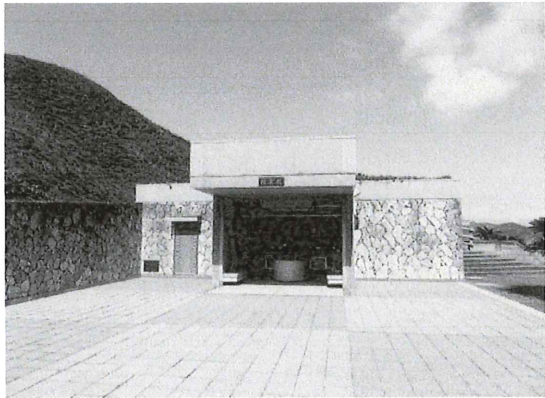


写真 3-27 屋鈍共同墓地公園「精霊殿」

出典:写真 3-26 酒井正子『奄美・沖縄哭きうたの民族誌』[酒井 2005:180]より転載。

酒井正子は、屋鈍におけるこのような無原則な祀り方について次のように述べている。「この無原則性は、秩序だった「祖先祭祀」というよりは、むしろ「死霊アニミズム」的心情の表れとみられ荒ぶる死霊を1日、15日という一定の繰り返しにより、リズムカルに慰撫し続け安定させたいという願いが感じられる。「祖先祭祀」であれば、一系性によってつながった子孫により祀られる「祖先」が対象である。しかし、「死霊的存在」はそうした原理とは異質であり、琉球孤の供養祭祀では、両者(祖霊と死霊)が混じり合い不分明な性格がみられる」[酒井 2005:179-181]。

屋鈍共同納骨堂は、親族・家族や無縁仏や他出者の遺骨を祀り、旧暦月1日・15日の墓参を欠かさず行っているという。つまり、この集落の祭祀は、酒井の述べている死霊のアニミズム的無原則な祀り方というよりも、「ヒキ」関係を成員とした「ハルチ・ハロチ」の親族関係に無縁者を加えた供養であると考ええる。

#### 4) 宗教法人の管理する鹿児島県大浦町「共同納骨堂」との比較事例4

井上治代は、1998年に行った鹿児島県大浦町(現南さつま市大浦町)四地区(越路、榊、仲組、有木)における共同納骨堂の建立に関する調査結果を報告している。この調査報告をもとに大浦町四地域の共同納骨堂と宇検村の共同納骨堂においてどのような相違がみられるのかみてる。

大浦町は東、西、南の三方が山で囲まれ、耕地の多くは火山岩地であるため、土壌はもろく農業には適していない。1995年の国勢調査による産業別就業比率では第一次産業が最も多く40.4%を占め、続いて第二次産業の39.9%、第三次産業19.7%となっている。大浦町に

は若者たちが生計を立て得る仕事がなく、多くの若者は県外に就職している[井上 2003: 81]。

井上は、大浦町で納骨堂建設に至った背景を次のように述べている。①1960年代には、共同墓地はすでに新たに埋葬ができる余地がないくらい密集していた。都市化というよりは、平地の少ない地形が埋葬地不足を深刻化させていた。②全国的な火葬化の流れの中で、焼骨を安置する納骨堂の建設が九州で流行していたことも、決断を促す要因になった。③大浦町は産業化と共に若者を流出させた過疎地域であったため、その結果として高齢者のみの世帯が多くなり、高齢者では山の墓の草取りや墓参が困難になる。それは同時に「子供が継がなくても誰かが守ってくれる」という最低限の安心感を与えてくれるものであった[井上 2003:86-87]。

1969年に750万円かけて156軒分の共同納骨堂を完成させた。建設費は、地区の共有林の杉材を売却してそれにあてた。当時の申込金は一戸7万円であった。また、榊地区でも1971年に150軒が加入する共同納骨堂が完成した。引き続き、仲組(66基)、有木(24基)の納骨堂が完成している。越路と榊は一つの納骨堂を持っている。ところが有木は西福寺のある集落に隣接し、西福寺も納骨堂の建設を行っていたことから西副寺の納骨堂を買う人も多く、一つある納骨堂は集落全体のものになっていない。また仲組も、4ヶ所あった墓地を改葬して大小二つの共同納骨堂を建設しているなど地区によって異なっている[井上 2003:87]。

有木地区(世帯数52戸)の共同納骨堂は、集落の共同納骨堂建設地が小高い所にあつたため、越路地区や榊地区と異なり、24基と小規模である。1972年時点での有木地区の寺の納骨堂加入者は45(町内41・町外4)で、4地区のうちでは一番多くの人が申し込んでいる。有木の共同納骨堂は24基中、14基が継続使用されているが、9基の所有者が西福寺の納骨堂を購入している。共同納骨堂へ移った理由として、「年をとってから小高いところにある納骨堂まで行かなくなった」からと、「若い衆が将来、自分が死んでから見守ってくれるかどうか信用できないが、お寺であれば信用できる」というものである[井上 2003:110-111]。

西福寺の納骨堂は1999年現在453基が稼働している。購入者は町内6割、町外4割となっている。ここでは集落の納骨堂を持ちながら、供養の永続性を考えあわせて寺の納骨堂を購入するケースが多いと考えられる。町外の加入者で多いのは集落の墓地や納骨堂の権利を継ぐ立場にない子世代が、自分の世帯用に購入するケースである[井上 2003:111-112]。

井上の報告から宇検村の共同納骨堂建設経緯と異なる点は、次の3点があげられる。まず、①共同納骨堂建設の最大の理由が、集落の共同墓地が新たに埋葬できないほどに密集していたこと、②大浦町にはお寺が存在し、大浦町4地域における供養は西福寺の僧侶によって行われていること、③共同納骨堂が集落と永続的な供養の見込める西福寺の2つの選択肢があることである。

井上治代は、大浦町共同納骨堂建設について次のように結んでいる。高度成長期の若年層の人口流出による人手不足から、墓が山の上の土葬墓から集会場近くの火葬墓(共同納骨



堂)へと変化した。そこには、残された高齢者でも容易に管理や祭祀が出来るようにという意図があったとしている。

宇検村の場合は、地域にお寺や宗教法人が存在せず、まして宗教者による介在もない状況での共同納骨堂の建設は、他出者からの強い建設の要望があったことや月 1 回の墓参、年忌、先祖祭など墓管理における高齢者の労力的、経済的な負担軽減が大きな理由であった。

大浦町共同納骨堂は、宗教者による永続的な供養が見込まれること、他方、宇検村共同納骨堂は「シマと他出者の互酬関係」と「シマへの共属性」による相互扶助によるものであり、その運営方法による意味合いは異なるものがある。

### 5) 宇検村共同納骨堂の総覧

宇検村共同納骨堂の建立は、1967 年の田検集落の建立を初めに平田集落を含め 10 ヶ所となっている。2016 年 9 月までに建立されている共同納骨堂は以下の 8 ヶ所である。これから須古での建立が予定されており、ゆくゆくはすべての集落において共同納骨堂建立の可能性がある。

宇検村共同納骨堂の建立は、①1967(昭和 42)年田検集落を筆頭に、②1996(平成 8)年芦検、③1997(平成 9)年部連、④2000(平成 12)年屋鈍、⑤2009(平成 21)年名柄、⑥2012(平成 24)年阿室、⑦2015(平成 27)年湯湾、⑧2016(平成 28)年久志、⑨2016(平成 28)年平田、⑩2021(令和 3)年佐念となっている。

写真Ⅲの部連共同納骨堂(1997 年建立)には、ブラジル移民の故 M 氏(享年 70 歳)の遺骨が納骨されている。「故 M 氏は、部連出身で 1959 年 10 歳の時に神奈川へ家族で移住した(俗にいう団塊世代であり少年時代をふるさとで過ごした思い出がある)。その後早稲田大学を卒業後、27 歳でブラジルに移住し花卉栽培で身を立て、在鹿児島県人会や奄美会で活動してきたが 2019 年 2 月に亡くなった。故人の遺志により 2019 年 12 月家族が来島して共同納骨堂に納骨された」[南海日日新聞 2019 年 12 月 10 日配信]。

前述のように宇検村共同納骨堂には、シマに住む人のみならず海外を含め他出地で亡くなった数多くの出身者の遺骨が納骨されている。奄美の特徴として特定の系譜関係に基づく祖先のみを自己の祖先として規定するのではなく、シマにおける血縁・非血縁関係や無縁者あるいは宗教性にとらわれない複数の遺骨を祀る許容性があることがわかる。

筆者の調査によると奄美大島における墓の向きは、西向きが最も多く次いで北向き、東向きの順となっている。宇検村の共同納骨堂の向きはどちらかというと、シマの祖霊(ウヤフジ)に守られているという意味から集落を向いて建立されているものが最も多く、次いで海の彼方に祖霊が住むといわれるニライカナイに向けられている。

このことは、シマの人々の祖霊崇拝の神霊感によるものと考えられる。宇検村では共同納骨堂の完成により、葬儀のノウコツノギが、それぞれの共同納骨堂前の広場で行われるようになった。また、月毎の墓参や定期清掃は集落民のコミュニケーションの機能を担う



場ともなっている。そして平田に隣接する阿室では、南島の正月のミハチガツに八月踊りが行われ、集落の共同祭祀の場ともなっている。

宇検村における葬墓制の変化の過程をみると、第一次葬における風葬から土葬への変化、および第二次葬におけるギシ・ギシ(洞穴墓)から骨甕(フニガミ)、石塔納骨堂(ノーコツドー)への変化がみられる。そして、1980年代以降、第一次葬における土葬から火葬への変化、および日本的な火葬である火葬骨を石塔納骨堂から共同納骨堂へ安置する変化がみられる。

#### 〈宇検村共同納骨堂一覧〉

##### I 田検集落共同納骨堂「精霊殿」



写真 3-28 1967(昭和 42)年完成

##### II 芦検集落共同納骨堂「精霊殿」



写真 3-29 1996(平成 8)年完成

##### III 部連集落共同納骨堂「精霊殿」

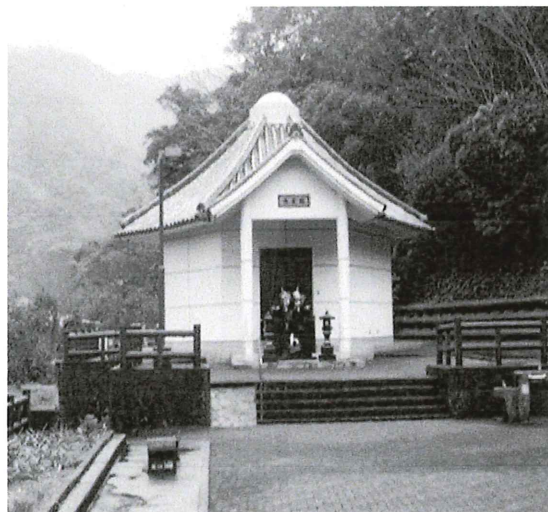


写真 3-30 1997(平成 9)年完成

##### IV 屋鈍集落共同墓地公園「精霊殿」

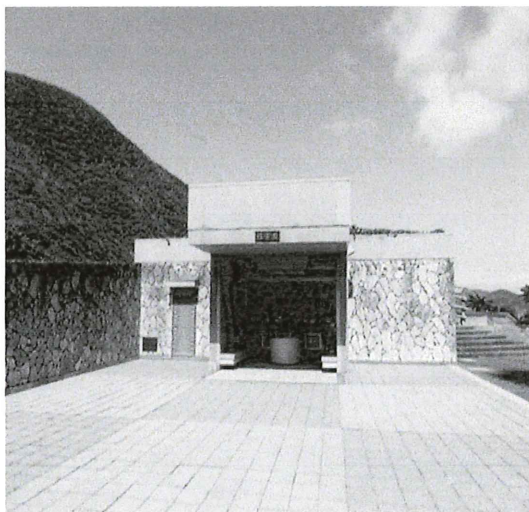


写真 3-31 2000(平成 12)年完成



V 名柄集落共同納骨堂「精霊殿」



写真 3-32 2009(平成 21)年完成

VI 阿室集落共同納骨堂「精霊殿」

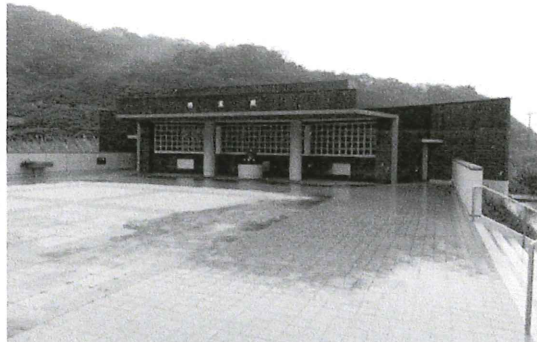


写真 3-33 2012(平成 24)年完成

VII 湯湾集落共同納骨堂「やすらぎの里」

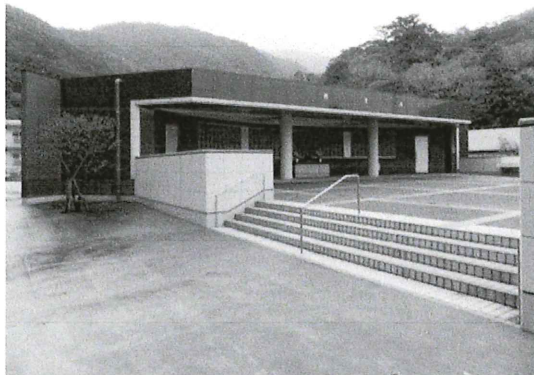


写真 3-34 2015(平成 27)年完成

VIII 久志集落共同納骨堂「精霊殿」

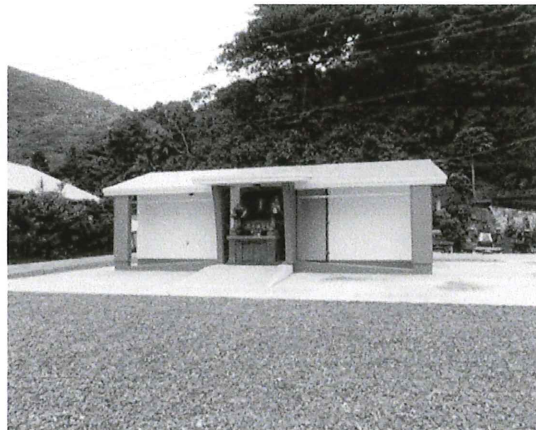


写真 3-35 2016(平成 28)年完成

IX 平田集落共同納骨堂「精霊殿」



写真 3-36 2016(平成 28)年完成

X 佐念共同納骨堂「やすらぎの里」

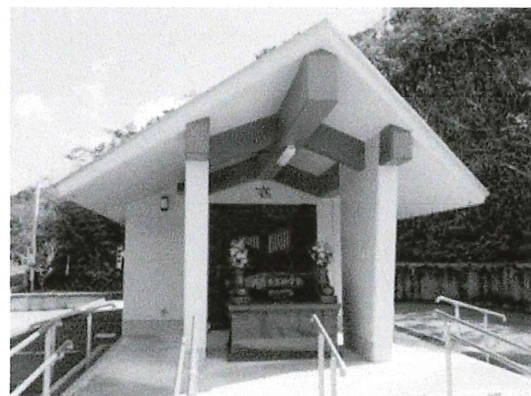


写真 3-37 2021(令和 3)年完成

※上記 I ～ X の共同納骨堂はいずれも筆者撮影による。

## 6 墓の共同化と都市移住者の関係性

### 1) 郷友会活動とその役割

図 3-7 は、関東地区における奄美出身者で作る東京奄美会連合会とその下部組織として市町村及び集落ごとの郷友会の組織を示したものである。

本項では、平田集落の共同納骨堂建設にあたり、関東太平(平田)会の活動を中心にみる。

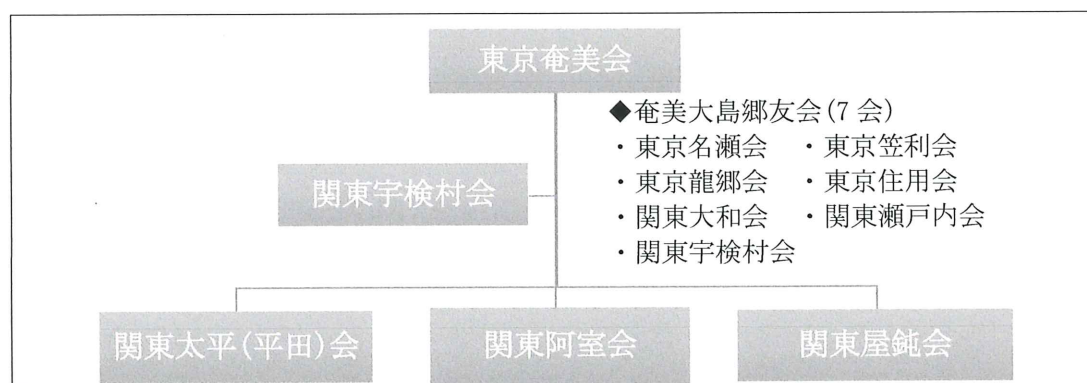


図 3-7 奄美大島郷友会組織図

表 3-8 関東および関西における宇検村各郷友会の世帯数・会員数

関 東			関 西		
郷友会名	世帯数	会員数	郷友会名	世帯数	会員数
関東屋鈍会	107	152	関西屋鈍会	148	245
々 阿室会	82	82	阪神阿室郷和会	101	176
々 太平会(平田)	96	107	関西平田会	111	191
々 佐念郷友会	46	46	々 佐念会	73	73
々 名柄会	65	65	々 名柄会	104	194
々 部連会	168	195	々 部連会	114	114
々 愛須会	81	83	々 愛須会	141	141
々 湯湾会	235	246	阪神湯湾石良会	160	160
々 田検会	61	68			
東京芦検会	387	387	関西芦検会	129	223
関東生勝会	42	42			
関東久志会	27	27	関西久志会	151	172
関東宇検会	96	107	々 宇検会	54	65
計	1,493	1,607	計	1,286	1,754

※出典：「奄美大島宇検村民の移住」[田島 1992：25]より作成。



東京奄美会連合会の会員総数は、二世、三世を含めて約 3,000 名～5,000 名とも言われている。各組織ともに年 1 回の総会が開催され、東京奄美会連合会約 400 人、各市町村郷友会約 100 人、各集落郷友会約 50 人が参加し、年次総会後の懇親会では飲食をともにしながら歌謡、踊り、漫談、カラオケなどが催される。

奄美出身者の多くは、いずれかの郷友会(複数の郷友会に所属している人もいる)に加入しており、この郷友会を中心に就職・進学の手助けや総会、渋谷おはら祭りへの参加、三線・六調・島唄・新民謡などの同好会参加など相互扶助的な活動を行っている。

表 3-8 は、田島康弘が 1990 年初頭の関東・関西における宇検村各郷友会の実態調査をしたものである。現在の各郷友会の会員数は、会員の高齢化や亡くなった人あるいはふるさとへの U ターン者を考慮すると約 30%～40%程度の減少が考えられる。

表 3-9 に示すように、関東太平会や関西平田会に所属している会員の多くは、郷友会活動とイベントに家族や親族ぐるみで参加し、村やシマに関する様々な情報の交換を行っている。さらには、郷友会による故郷への相互訪問、学校や祭りなどの寄付などを行い、また、鹿児島や奄美市(旧名瀬市)内に居住している出身者は頻繁に帰郷し、老親の手助け、家産や祖先の墓の管理、地元の祭り、老後の移住地の確保など家族や親族との関係を維持している。

また、村の首長やシマの区長など「関東太平会」および「関西平田会」などに参加し、シマと都市移住者との親睦を深めている。

表 3-9 郷友会活動内容(総会、行事などは各郷友会によって異なる)

項目	活 動 内 容
総 会	◇郷友会ごとに年 1 回開催 ・市長村・シマから首長、区長、議員参加 ・総会 年度事業実績と事業計画の提示 ・懇親会(歌謡、三線、踊り、抽選会、漫談、カラオケ、講演会など)
行 事	◇同好会(三線、島唄、八月踊り、六調、新民謡、シマウタ研究会) ◇渋谷おはら祭りへの参加、シマ対抗運動会 ◇ふるさと相互訪問(豊年祭、八月踊り、種おろしなど) ◇冠婚葬祭への参列 ◇親もとへの送金、学校への寄付 ◇就職・進学の手助け

## 2) 出身者が移住先で生きること

奄美の出身者にとって、一番の問題は都市へどう適応するのか、都市でどう生き抜いていくのかが大きな課題であった。

「資源の乏しい都市移住者がその制約を乗り越えるために移住先で他者との関係を取り

結ぶ際に、地縁や血縁にもとづく「同郷」という基準を用いることは手っ取り早く、その範囲は同じ県、同じ町、同じ村、同じ集落、同じ出身学校に及んでいる。都市移住者は同郷という基準をもとに郷友会を形成し、それを媒介として他者との絆を結んでいる」[北川 2016:159]。

関東圏で働いている東京奄美会の二人の出身者に対し、郷友会への入会動機について質問したところ次のような回答があった。

**B氏:男性(40歳代龍郷町出身で居酒屋を経営)**「東京に出てきたころは、このような組織があるとは知らなかった。居酒屋を始めた頃にシマの先輩から誘われ入会した。高校の同窓生や同郷の人達と知り合いになり、店もよく利用してもらっている」。

**T氏:男性(50歳代宇検村出身で関東太平会幹事)**「奄美会には、シンセキの先輩から誘われて入会した。今は会の幹事をしており、総会や冠婚葬祭などの人集めには、シンセキやシマの知り合い同士で誘い合って参加してもらっているので幹事として大いに助かっている。こちらの生活そのものは、シマで暮らしているのとあまり変わらない」。

二人の語りから、奄美出身者は、東京奄美会連合会、市町村および集落の郷友会に、親族や学校の先輩あるいは同郷の知り合いから誘われて入会するケースが多く、郷友会を媒介としたネットワークの形成がなされていることがわかる。

### 3) 関東太平会の共同納骨堂建設に対する役割

それでは、郷友会の具体的な活動事例として、平田共同納骨堂建設における関東太平会の役割についてみる。

関東太平会では、シマで計画されている共同納骨堂建設の実現に向けて自分たちでどのような貢献ができるか役員会で議論が重ねられた。その中で議論の中心は、太平会としてどれほどの資金調達ができるかという問題である。そこで、地元の建設計画案に基づき、納骨壇売却と寄付金を募ることとした。

まず、関東太平会会員には納骨壇の売却を最優先し、納骨壇を購入しない会員は1万円以上の寄付の呼びかけを行った。また、関東宇検村会、関東屋鈍会、関東阿室会などの郷友会に対しても寄付金を募り、納骨壇の売却と寄付で総額約1千万円の資金を調達することができた。

筆者は、平田共同納骨堂建立に関する関東太平会の役割について、さらに調査を進めるため、以前から交流のあった関東太平会の総会に出席する機会を得た。その席上で会員に対し、納骨堂建立に関するアンケート調査を依頼し、その承諾を得て次のようなアンケートを実施した。

#### 4) 共同納骨堂に関する関東太平会へのアンケート実施

平田集落の共同納骨堂建設は、2016年10月の完成予定であった。その完成直前の9月に行われた関東太平会総会の席上において、共同納骨堂建設に至るまでの経緯や祭祀儀礼に関する無記名方式のアンケートと聞き取りによる意識調査を行った。

アンケートは無記名方式で、2016年9月11日、第61回関東太平会総会の席上において実施した(出席者数38名のうち10名は小中高生のため、実質の回答数は28名、そのうち男性17名、女性11名、年齢は20代から70代であった)。

##### 〈アンケート質問事項〉

- ①将来の夢
- ②墓の継承
- ③集落の共同納骨堂の建立に関してお聞かせください。
- ④共同納骨堂建立の経緯をお聞かせください。(チェックは2つまで)
- ⑤集落において共同納骨堂の維持管理についての検討はなされていますか
- ⑥ご自身の葬儀に関して、どのような葬儀を望みますか。

##### 〈アンケートの調査結果〉

- ①項目ごとに回答数と無回答数を示す。
- ②結果は円グラフで示す。

##### 〈質問事項〉

Q1. 将来のご自身の住居についてどのようにお考えですか。

(チェックは1つ)

Q2. お墓の継承に関して該当するものにお答えください。

(チェックは1つ)

##### 〈調査結果〉

##### 将来の住まい

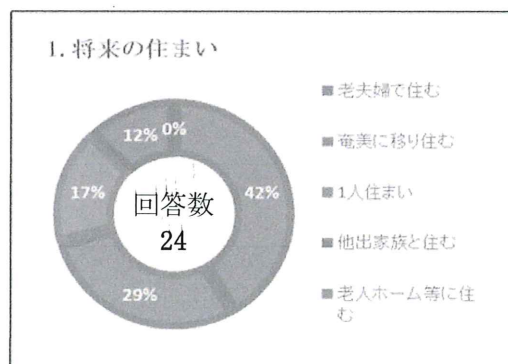


図 3-8

##### 墓の継承

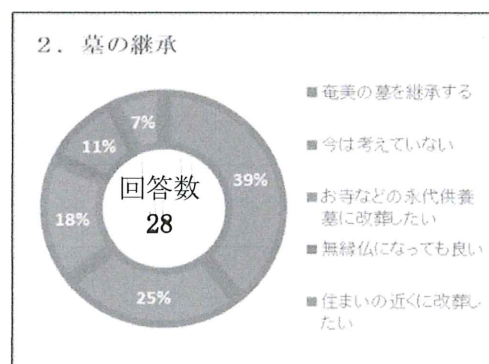


図 3-9

Q1 [図3-8]の将来の住む場所において、老夫婦で住む人の回答数が10人と多かったが、



一方ではシマに移り住むと回答した人が7名あった。内訳は70代女性(1名)、60代男性(1名)、50代男性(4名)、40代(1名)であった(無回答4)。

のちの懇親会で聞いたところによると、定年後のUターンを考えている人が8名いることがわかった。筆者としては、40歳から50歳代の人が故郷に移り住むことを考えていることは予想外であった。奄美の人が故郷に移り住む場合、単身者、あるいは夫婦でも同郷者同士であればそれほど問題はないと思われる。現在の引退Uターン者夫婦の多くは同郷生まれの一世である。

ところが、次の世代になってくると、双方共に同じ同郷生まれとは限らない。つまり、老後をどこで暮らすかという問題について、夫婦間での気持ちのズレが起きてくる。この気持ちのズレは容易に埋まらない。つまり、奄美出身の人達がUターンするとき、配偶者が同郷であればそれほど問題はないと思われるが、他府県出身者だと家族と離別して帰郷するケースが多いと言われている。

Q2 [図3-9]の墓の継承については、故郷の墓を継承すると回答した人が11名あったが、今回の納骨壇の出身者(村外移住者全体)の購入が35基あったことを考えると理解できる数値である。次に今は考えていないと回答した人が7名あったが、家族間の問題としてあえて考えていないということも考えられる。この墓の継承について、次のような意見も聞かれた(以下の語りは、総会後の懇親会の席上でインタビューしたものである)無回答0。

#### 墓継承に関する語り

**O氏：男性 60歳代**「兄弟で村を出てから、長兄が鎌倉に墓を改葬した。次男である自分は墓をどこにするかまだ決めていない。というのは妻が同じ村出身であり、死んだら故郷の墓に入りたいと言っている。妻の意見に従って故郷に墓を購入すべきかどうか迷っている」。

**P氏：男性 70歳代**「墓の継承については、各家庭において事情が異なるので、それぞれの家族で考えていくしかないのではないか」。

**K氏：男性 60歳代**「田舎に帰る予定もないので、僧侶の供養が見込めるお寺の永代供養納骨堂などの購入を考えている」。

このほか墓の継承については、自分のすんでいる場所で墓や永代供養納骨堂などの購入を考えている人が数名いた」。

#### 〈質問事項〉

Q3. 集落の共同納骨堂の建立に関してお聞かせください。

(チェックは1つ)。

Q 4. 共同納骨堂建立の経緯をお聞かせください(チェックは2つまで)。

# <調査結果>

## 共同納骨堂建立について

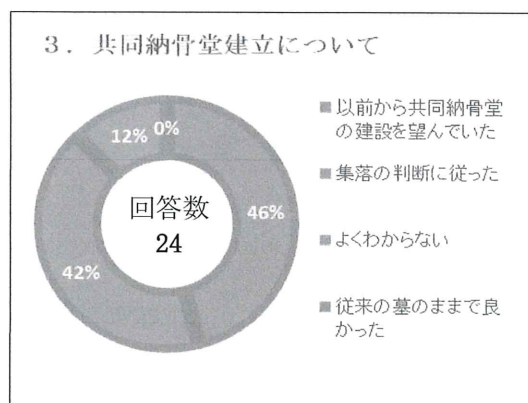


図 3-10

## 共同納骨堂建設の経緯

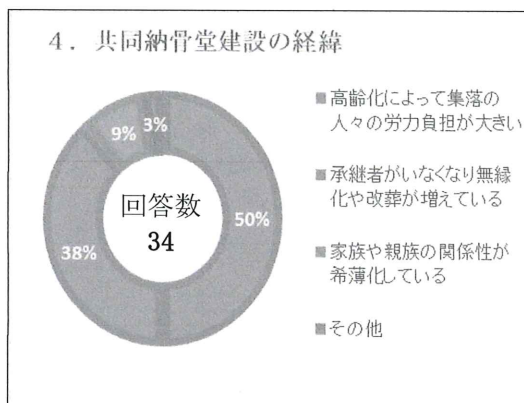


図 3-11

Q 3 [図 3-10]の、平田集落の共同納骨堂建立に関し、以前から納骨堂建立を望んでいたと回答した人が 11 名あり、次に集落の判断に従ったが 10 名であった。その中で、以前から共同納骨堂の建設を望んでいたと回答した人の中に次のような語りがあった(無回答 4)。

### 共同納骨堂建立に関する語り

H 氏：男性 60 歳代「他出移住者の一番心配することは、集落に残してきた先祖の墓が荒れていないかどうかということを心にかけてながらも、仕事の関係や経済的なこともあり、なかなか墓参りに帰れない悩みがあった。集落で所有し、管理する共同納骨堂の建立は以前からの希望でもあった。ようやく実現することになりほっとしている」。

R 氏：男性 60 歳代「自分は二世なので墓については、あまり考えたことはなかった。宇検村には共同納骨堂がいくつも建立されているが、出身者にとってはそのような墓に入るのも良いのではないかと思っている。ただ先祖代々の家墓は、長男が継ぐのが一般的だが、次男や三男、またその子供たちは、そのような墓に入るのは気になるのではないか。そうであれば、宇検村の共同納骨堂のような墓制もありだと思う」。

Q 4 [図 3-11]の、共同納骨堂造立の経緯については、集落の人達の高齢化による労力負担を上げる人が 17 名と最も多く、次に継承者がいなくなり無縁化や改葬が増えていることが 13 名となっている。その中で、前述の Q 氏のように満足な墓参ができなかったことも要因の一つとして考えられる(無回答 3)。

### <質問事項>

Q 5. 集落において共同納骨堂の維持管理についての検討はなされていますか

(チェックは2つまで)。

Q 6. ご自身の葬儀に関して、どのような葬儀を望みますか。

(チェックは1つまで)。

## 〈調査結果〉

### 維持管理について

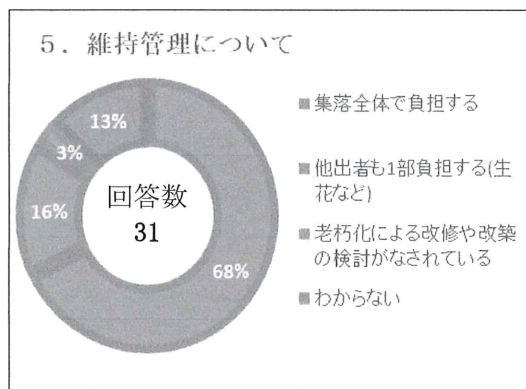


図 3-12

### 自身の葬儀について

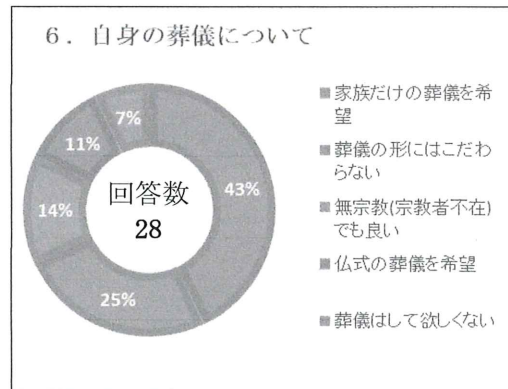


図 3-13

Q 5 [図 3-12]の、維持管理の問題については、集落全体で管理することについて 21 名の人が共有化しているが、将来的な老朽化や補修費用などの問題については、ほとんど地元との議論が進んでいないことが窺える(無回答 1)。

Q 6 [図 3-13]の、自身の葬儀のあり方については、家族だけの葬儀を希望するが 12 名と多く、形にこだわらないが 7 名、無宗教(宗教者不在)でもしてもよいが 4 名、そして、葬儀はして欲しくないが 2 名と、個人化志向の強く表れたアンケート結果となった(無回答 0)。

### 5) アンケートによる考察

アンケートに回答を頂いた大半の方は、高度成長期にシマの村落共同体的な生活から離れ、都市部へ移住したいいわゆる団塊の世代である。移住地においては、「家族単位」、「夫婦または個々人」で生活しながら、郷友会行事への参加、あるいはメンバーの葬儀への参列やシマで行われる親族の葬儀・法事にはバニラエア(現在ピーチ)を活用して参列している。団塊世代の都市移住者は、シマに住む人々とのネットワークを結び、移住先で出身者同士のネットワークを形成していることから互酬関係にあるといえる。

従って、この平田共同納骨堂造立は、出身者による寄付行為による互酬関係によって支えられていることを確認した。その出身者の先祖祭祀を考えた時、上記アンケートからも 11 名の人が、納骨堂壇を購入し、そして、生まれ育った郷里と断絶し関東に住み続けるとする家族も居住近辺に新たな墓地を設け、当該家族で祭祀すべき物故者を改葬祭祀していることが明らかになった。



一方、参加者の中に二世三世の人が3~4名参加していた。その親の世代は子供時代にシマでの暮らしを経験した最後の世代であるが、二世三世の世代は、関東で生まれシマは「親や祖父母の故郷」のイメージでしかなく郷友会への関りも消極的であると考えられる。

アンケートの中で、自身の葬儀について家族葬を望む回答が12名と多いことに関し、森謙二は、次のように論じている。「家族葬は、死者が高齢者で生前に繋がりがあった人達の葬儀への参列が困難になったことにより、結果として社会とのつながりを拒絶することになる。死者は家族の中だけでなく、社会の中で生きてきたのであり、先祖祭祀としての枠組みが壊れていくことにつながる」[森 2014:84-85]ことを指摘している。

アンケートでは、さらに、葬儀の形にこだわらない(7名)とか、無宗教の葬儀でも良い(4名)とか、葬儀はして欲しくない(2名)などの意見もあり、それぞれ個々人の死生観の多様性が窺える。

## 7 都市移住者の葬儀と改葬事例

都市移住者における葬儀はどのようなであったか、奄美大島出身者への4件の聞き取りによる事例について検討する。奄美出身者で組織する東京奄美会は、119年(1899年創立)の歴史(2018年時点)があり、3,000人~5,000人の会員を擁している。会員も年々高齢化し、亡くなる方も出てきている。そのような中で奄美出身者の葬送儀礼がどのように行われているのか、奄美大島南部地域出身の会員および遺族の方への聞き取り調査からみる。

事例1・2は、告別式およびノウコツシキを奄美大島で行った事例で、事例3は関東で告別式から納骨まで行った事例である。また、事例4は関東で告別式を行い、そのあと奄美大島の墓に納骨した。のちに遺族の意向で関東の墓へ改葬した事例となっている。

### 1) 事例1(故人男性・享年61歳)

#### (1) 関東での告別式

故人(男性・享年61歳)は、瀬戸内町出身で5人姉妹の末男、将来はシマに帰って家督を継ぐ予定であった。故人は千葉で会社を経営していたこともあり、葬儀は会社と〇〇家との合同葬であった。葬儀はある年、千葉県野田葬祭場で行われた。家族・親族50名、東京奄美会及び関東瀬戸内会100名、会社の取引先を含めた一般改葬者350名、総勢500名の参列者があった。火葬は千葉県野田市内の火葬場で荼毘に付した。

#### (2) 奄美大島での葬式

出身地の加計呂麻の親族や集落の人から奄美でも葬式をやって欲しいとの要望があり、瀬戸内町内の葬祭場で執り行った。参列者は、家族・親族50名、集落の人と一般会葬者170名の220名余の参列があった。

#### (3) 奄美大島でのノウコツシキ(納骨式)

加計呂麻の集落の共同墓地においてノウコツシキを行った。家族・親族、集落の人約50名の参列があった。参列者による焼香と拝みのあとに〇〇家の納骨堂石塔に納骨した。

## 2) 事例 2 (故人男性・享年 45 歳)

### (1) 関東での告別式

故人(男性・享年 45 歳)は、大和村出身で長男、内妻と 2 人暮らしであった。家族としての妻とは内縁関係にあったが、子供もいなかったこともあり離別している。告別は東京都内の葬祭場で行われ、参列者は奄美から両親と関東、名古屋の家族・親族 20 名、関東大和会 5 名の参列があった。同じ葬祭場で火葬の荼毘に付された。

### (2) 奄美大島でのノウコツシキ(納骨式)

東京でのソウシキを済ますとシマの共同墓地でノウコツシキを行った。東京での告別式に参列出来なかった親族や集落の人約 50 名の参列があった。墓地の焼香台での焼香が済むと納骨堂石塔に納骨した。そのあと自宅であと祓いを行った。故人は長男で将来はシマに帰る予定になっていたという。それが若くして亡くなりシマに骨を埋めることになった。

## 3) 事例 3 (故人女性・95 歳)

### (1) 関東での告別式

故人(女性・享年 95 歳)は、瀬戸内町出身で家族との同居暮らしであった。告別式は、東京都内の葬儀場で行われた。喪主は姪が務め、参列者は家族・親族 32 名、関東瀬戸内会 10 名、知人など一般会葬者 15 名が参列した。火葬は東京都内の火葬場で荼毘に付した。

### (2) 関東での納骨

納骨は千葉市内に墓地を求めて納骨した。

### (3) シマの墓じまいと他出地への改葬

奄美大島にある墓は、墓仕舞いをして先祖の遺骨は現在の墓地に改葬した。この葬送事例は、都市移住した人が亡くなった場合、居住地で葬式を行い、その居住地の近くに墓を求めて納骨している。故人の奄美の墓は、奄美に墓守する家族・親族がいないことから墓じまいをして千葉市内の墓に改葬した事例である。

## 4) 事例 4 (故人男性・61 歳)

### (1) 関東での告別式

故人(男性・61 歳)は瀬戸内町出身で東京都内に居住していた。告別式の喪主は娘が務めた。参列者は、家族・親族 60 名(そのうち鹿児島から 6 名参列)、関東瀬戸内会 30 名、他一般会葬者 20 名の参列があった。火葬は都内の火葬場で荼毘に付した。

### (2) シマの納骨と他出地への改葬

故人の生前からの希望により、奄美の墓地に納骨したが、墓の管理を人に任すと子供たちが墓参りに帰郷する際に困ることがあるので、千葉市内に墓地を購入し改葬した。

以上 4 つの葬儀と改葬事例を整理すると表 3-10 のようになる。奄美出身者が他出地で亡くなった場合の葬儀で特徴的なことは、東京奄美会や単位ふるさと会の会員の参列が必ず

見られることにある。まず、都市移住者が亡くなった場合、亡くなった場所で告別式を行い、火葬骨を奄美の墓地に納骨する場合(事例 1.2)と告別式も納骨も亡くなった場所で執行する(事例 3.4)の2つのケースに分類することが出来る。

表 3-10 都市移住者の葬送・改葬事例

事例	享年 性別	出身地	居住地	告別式 (ソウシキ)	ノウコツシキ (納骨式)	納骨地	改葬
1	61 歳 男性	瀬戸内町 (長男)	関東	千葉・奄美 2 回の葬儀	瀬戸内町墓地 (集落参列者 50 名)	瀬戸内	未
2	45 歳 男性	大和村 (長子長男)	関東	都内	大和村共同墓地 (集落参列者 50 名)	大和村	未
3	95 歳 女性	瀬戸内町	関東	都内	—	千葉	千葉に 改葬
4	61 歳 男性	瀬戸内町	関東	都内	一時的に瀬戸内町 の墓地に納骨	千葉	千葉に 改葬

事例 1.2 では、長男で家督を継ぐ予定の人が亡くなった場合、関東で告別式を行い火葬骨は奄美の墓地に納骨している。その際のノウコツシキには家族・親族はもとより集落の人達も参列し、故人の弔いを行っている。事例—1.2 からいえることは、都市移住者が関東で家族葬を行い、シマにおいて集落葬を執り行っていることは、将来シマに帰るか、あるいはシマに骨を埋めたいと考えていた故人の生前の意思を生者である遺族が引き継いだものであると考えられる。

次に事例 3 は、告別式と納骨ともに関東で執り行っている事例である。奄美大島にある墓は故人の死去に伴い奄美の墓は千葉の居住地に改葬している。事例 4 は、納骨は故人の希望もあり、一旦奄美の墓に納骨したが、墓守をする親族・家族がいないことから、のちに他出地に改葬している事例である。つまり、関東に永住を決めた移住者は、居住地の近くに墓地あるいは永代供養納骨堂を求め、シマの墓から祖先の遺骨を改葬していることがわかる。

## まとめ

本章では、奄美大島南部地域でもっとも過疎と高齢化の進む宇検村平田および湯湾の葬儀事例を取り上げ、土葬の頃の葬儀と今日的葬儀の聞き取りを中心に観察を行った。

宇検村では、近年まで第一次葬は土葬、第二次葬は土葬による遺骨を堀上げ、洗骨改葬が行われてきた。葬儀は神官や僧侶の儀式を受けずに地域の人々の手によって執行されてきた。葬儀は他の通過儀礼と異なり、直接的な参与観察が難しいことから、平田と湯湾における土葬のクベツシキ(告別式)については、土葬の葬儀を体験したシマ(集落)の長老 3 人に聞き取りを行った。



宇検村の各集落では、1950年代後半以降、それまで海路か徒歩であった道路網の整備によって名瀬から湯湾のバス開通(昭和37年)や村内一周道路開通(昭和44年)および瀬戸内町営火葬場の開設(昭和41年)などにより、1980年代以降火葬が一般的に行われるようになった。火葬の定着後の今日的葬儀について、平田と湯湾のкокベツシキ(告別式)と火葬およびノウコツノギ(納骨の儀)に立ち会ったことのある当事者の話を中心に3家の葬儀事例について聞き取りを行った。

平田の葬儀は、奄美市内でкокベツシキと火葬が行われている。火葬の後に集落の共同墓地(2016年以降は共同納骨堂)に移動し、ノウコツノギが行われる。

湯湾の葬儀は、奄美市内でкокベツシキと火葬が行われる。遺体が茶毘に付されると遺骨は一旦自宅に帰る。そのあと自宅からシマの人たちが関わるノウコツノギ(кокベツシキ)が行われる生活館(公民館)まで葬列する。生活館でのкокベツシキが終わると墓地まで葬列し、焼香と拝みによる納骨儀礼が行われる。一般参列者はここで帰る。残った家族・親族、近しい集落の人や知人で納骨する。納骨が済むとミキャンカが行われ、それが終わると生活館あるいは自宅で直会となる。もっとも、湯湾でのノウコツノギは2015年湯湾に共同納骨堂が建設されると、それまで行われていた葬列は廃止されている。

同じように、2016年平田に共同納骨堂が建設されると、それまで共同墓地で行われていたノウコツノギが共同納骨堂で行われるようになった。平田の長老の話によると「ノウコツノギ(納骨の儀)そのものは、土葬の頃に洗骨した遺骨を墓に改葬する際にシマの人たちの手でノウコツシキ(納骨式)として行われていた」という。また、宇検村共同納骨堂は集落内外の人の寄付行為と労力扶助などによって運営が成り立っていることを確認した。

平田共同納骨堂造立は、出身者の寄付行為による互酬関係によって支えられていることもわかった。その出身者の先祖祭祀を考えた時、アンケートからも11名の人が共同納骨堂を購入し、そして、生まれ育った郷里と断絶し関東に住み続けるとする家族も近辺に新たな墓地を設け、当該家族で祭祀すべき物故者を改葬していることも明らかになった。

奄美出身者が他出地で亡くなった場合、告別式には郷友会メンバーの参列があり、シマでのノウコツシキ(納骨式)には集落民が関わる相互扶助と互酬関係によって支えられていることも確認した。

## 4 章 二つの事例の比較検討

### はじめに

奄美大島での葬制の変化の過程をみると、第一次葬の風葬から土葬への移行後も、第二次葬は洗骨改葬が行われてきた。1960 年代以降の火葬の導入と普及により、それまで地域社会の自生的規範にしたがってシマの人々の手で行われていた葬儀が、外部の別の規範を持つ葬祭業者の手で行われるようになった。第 1 章で議論したように火葬の導入は、葬儀の一部分あるいは大部分の外部化を促し、道路など社会基盤の整備や、それに伴う社会生活の変化などと並行し、相互に影響しあっている [加藤 2010:16] という指摘がある。

本章では、第 2 章、第 3 章でみてきた龍郷町円と宇検村平田・湯湾の葬儀事例を比較し、今日的葬儀における外部化の部分と非外部化の部分について検討する。

### 第 1 節 葬儀における外部化の部分

第 1 章で、火葬の導入に伴う葬儀の外部化が、奄美においては土葬に伴う葬送儀礼の外部化の約 1 世紀もあとに二度目の外部化として起きている [津波 2012:86-87] ことを議論した。本節では、第 2 章と第 3 章の二つの事例を比較検討し、葬法の変化が葬儀にどのような影響を及ぼしたのか、および葬儀社の介在に伴う葬儀の外部化について検討する。

#### 1 奄美大島における葬儀の現状

奄美大島における、近世後半から近代初頭にかけての土葬の導入は、それまでの風葬ではなかったであろう、イキフリ(池堀り)やヘゴ切り、ナバイシの板加工、ヤギョ作りやツカ作りなどの労力をシマの人たちに押し付けるかたちで進行している。一方、火葬の導入は、過疎化と高齢化によってシマの人々の互助的な労力の交換ができなくなり、それを金で補う形で進行している。つまり、シマの人たちの労力という点で言えば、火葬は軽減し、土葬は増加させたことにある [津波 2012:87-88]。

表 4-1 に示すように、火葬の導入と普及は、シマの中で行われていたことの、ほとんどが火葬場と葬祭業者によって行われるようになった。それに伴い、金銭的負担は大きくなったが、他の負担は、シマの人々にとっても、喪家や親族にとっても確実に少なくなった。加藤の指摘にもあるように道路網の整備、貨幣経済の浸透、過疎や高齢化などと、火葬の導入と普及とは密接な関係がある。例えば、名瀬に火葬場はあったものの、1960 年代まで火葬が導入されなかった理由として、シマの人たちのいうには、遺体の搬送と見送りにいく遺族や親戚の移動手段がなかったことがあげられる。

それにも増して、土葬を支えるほどの人口があり、扶助関係が維持されていたこと、また経済的な負担も土葬が少なかったことなどが考えられる。さらに重要な点は、葬祭業者が参入していなかったことがあげられる。火葬が導入され、普及したから葬祭業者の参入があったのではなく、ほぼ同時期にシマの葬儀に関わるようになったことがあげられる。

ところが、火葬の定着した今日、龍郷町円と宇検村平田・湯湾における葬儀事例でみると、それまで自宅で執り行っていたソウシキあるいはコクベツシキを名瀬や瀬戸内町の葬儀社の提供する葬斎場に移行して行われるようになった。

この二つの事例では、家族・親族を中心に参列するソウシキ(葬式)またはコクベツシキ(告別式)のあと、集落の墓地あるいは共同納骨堂に場所を移し、シマの人も関わるノウコツノギ(納骨の儀)の一連の儀礼が行われる。

表 4-1 土葬の葬儀と火葬の葬儀の比較

土葬の葬儀		火葬の葬儀	
儀礼項目	儀礼内容	儀礼項目	儀礼内容
◇葬儀準備 ・自宅 ・公民館	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンセキや集落に告知</li> <li>・時計を止める。</li> <li>・遺体を北枕で安置する。</li> <li>・着物を裏表逆さに着せる。</li> <li>・飯茶碗に箸を1本立てる。</li> <li>・ショクアテをする。</li> <li>・弔問者は飲食して帰る。</li> <li>・死亡届、埋葬許可の手続きをする。</li> </ul>	◇通夜 ・自宅 ・葬祭場  ◇葬儀社打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集落の無線災害放送で告知</li> <li>・新聞社2社に広告掲載</li> <li>・時計を止める。</li> <li>・遺体を北枕で安置する。</li> <li>・着物を裏表逆さに着せる。</li> <li>・ご飯碗に箸を1本立てる。</li> <li>・ノウコツノギのショクアテをする。</li> <li>・弔問者がクヤミに訪れる。</li> </ul> ※喪家は葬儀社と葬儀内容の打合せ。
◇準備作業	・イキフリ、棺、ヤギョ 弔い旗などの葬具作り	◇ノウコツノギの準備作業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・墓掃除、花作り、葬具作り</li> <li>・炊事、会場設営</li> </ul>
◇ソウシキ/コクベツシキ ・野辺送り ・焼香 ・埋葬 ・親族の拝み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・台所で火を付けたタイをコショデ(逆手)でオモテグチから出す。</li> <li>・死者はオモテグチから出す。</li> <li>・茶碗を割る。</li> <li>・墓地の入口で左周りに三回廻る。</li> <li>・焼香台で参列者の焼香</li> <li>・会葬者は海水で清める。シュウバレ(潮祓い)</li> <li>・一般参列者が帰ると埋め役の青年により埋葬する。</li> <li>・埋葬後に親族による焼香と拝みを行う。</li> </ul> ※葬儀への僧侶の参与は喪家の都合によってそれぞれである。	◇ソウシキまたはコクベツシキ ・奄美市内葬祭場 ・瀬戸内町葬祭場  ◇火葬 ・奄美市斎場 ・瀬戸内町火葬場  ◇ノウコツノギ ・祭壇作り ・参列者受付 ・葬儀社による進行 ・読経と焼香 ・葬列(野辺送り) ・納骨 ・ミキャンカ	<ソウシキまたはコクベツシキ> ・家族・親族を中心とした参列 ・宗教者の参与がある。 ・お布施の用意 ・遺体とのお別れ ・火葬、拾骨儀礼 ・火葬が済むとシマの納骨の儀会場に移動する。 <ノウコツノギ式場へ移動> ・受付でお礼状と清め塩を渡す ・台所で火を付けたタイを逆手でオモテグチから渡す。 ・死者はオモテグチから出す。 ・墓地まで葬列する。 ・葬列は墓地の近くで左回りに三回廻る。 ・焼香台でシマの人の焼香 ・遺骨との別れの儀礼 ・ミキャンカ、シジュウクニチの引き寄せ
◇直会	・家族・親族が参列者を接待	◇直会	・家族・親族が参列者を接待
◇カイソ(改葬)	・埋葬後三年以上、三十三回忌までに実施する	・カイソ(洗骨改葬)は行われていない。	



## 2 葬儀社の役割

### 1) 葬儀の現状

本項では二つの事例でみてきた葬儀社による葬儀の外部化についてみる。奄美大島の葬儀社は、表 4-2 に示す、奄美市内(7 社)、瀬戸内町(2 社)、龍郷町(JA 系 1 社)となっており、その中で奄美市内の老舗 Y 社、中堅 V 社、JA 系 E 社の 3 社が市場シェアの大半を占めている。

表 4-2 奄美大島の葬送祭祀施設

施設名	所在地	内 容
葬儀社(葬祭場)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奄美市内 7 社</li> <li>・瀬戸内町 2 社</li> <li>・龍郷町 1 社</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葬儀社主要 3 社で奄美市内のシェア 70%を占有</li> <li>・JA 系葬祭場奄美市と龍郷町に各 1 件</li> </ul>
火葬場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奄美市斎場</li> <li>・瀬戸内町営火葬場</li> </ul> <p>火葬の他に直葬、家族葬、一般葬も行われる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆奄美市斎場利用料金</li> <li>・奄美市市民 1 万 3 千円</li> <li>・市外利用者 3 万円</li> </ul> <p>※火葬料金のみで会場利用などは別途</p>
寺院・宗教施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆仏教寺院</li> <li>・奄美市内 7 寺院</li> <li>・瀬戸内町 1 寺院</li> </ul> <p>※龍郷町、大和村、宇検村はなし</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆神社</li> <li>・高千穂神社他各集落にあり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浄土真宗 5 寺院</li> <li>・日蓮正宗 1 寺院</li> <li>・浄土宗 1 寺院</li> <li>・本門佛立宗 1 寺院</li> </ul> <p>※奄美大島の各地に創価学会、天理教、キリスト教などの支部、教会がある。</p>

V 葬儀社によれば、2015 年に 230 件の葬儀が執行されたが、そのうち仏式が 70%、キリスト教 20%、その他は神道、天理教、創価学会などの諸教が 10%の比率となっている。神道式が少ないのは奄美における戦前戦後の歴史観によるところが大きいのではないかと聞く。奄美大島において葬儀の外部化を担うとされる葬儀社の現状をみると、寺院は奄美市内 7 寺院と瀬戸内町の 1 寺院以外にみられず、その数も少ない。

### 2) 葬儀社による葬儀の外部化

第 1 章の先行研究で議論したように、葬制の近代化のなかで葬祭業の活動自体を無視することは出来ず、奄美大島で葬儀社が誕生し、葬儀のさまざまなサービスが商品化されていくことで、葬儀社という商品の提供者とそれを購買する消費者という、新たな相互依存関係が成立してきたことは明らかである。

本節では、土葬の頃の葬儀と火葬の葬儀における比較を通して、火葬の導入と普及による葬儀の外部化と簡略化、簡素化についてみる。表 4-3 に示すように、火葬の葬儀と

葬儀社の関係を示すものであるが、かつて寺院で葬儀を行うこともあったが、近年は宗教者の参与が葬儀社の葬儀システムに組み込まれ、寺院での葬儀はほとんど見られず、奄美市内の門徒が年忌の法事をするぐらいであると聞く。

このように寺院と葬儀社の役割を考えると葬儀に対する寺院の関りは小さく、葬儀社においては、死者の葬り方の代行として対価を受け取る葬儀サービスの提供を通じ、地域社会との密接な関係を構築している。

表 4-3 火葬の葬儀と葬儀社との関係

儀礼項目	家族・親族	集落の人たち	葬儀社
◇通 夜 ・自宅 ・葬祭場	・死亡告知 ・葬儀社打合せ ・焼香参列者接待 ・香典、供物提供	・通夜見舞い ・香典、供物提供 ・ショックアテ分担	・新聞広告掲載 ・死亡届 ・火葬利用届 ・葬儀費用見積り
◇ノウコツノギの準備 ・自宅 ・公民館	・参与せず	＜準備作業＞ ・墓掃除 ・花づくり ・炊事 ・会場設営など	＜葬具などの準備＞ ・祭壇設置 ・葬具(前卓、草履、ツカ・旗など) ＜遺体搬送＞
◇ソウシキ・コクベツシキ ・家族・親族のみ参列 ・奄美市内葬儀場	・門送り ・香典提供 ・参列、焼香	・参与せず	＜ソウシキ執行＞ ・僧侶手配 ・葬儀場提供
◇火 葬 ・奄美市斎場	・参列、焼香 ・直会(飲食) ・拾骨(骨壺)	・参与せず	・直会食事手配 ・埋葬許可書手配
◇ノウコツノギ ・集落共同納骨堂 ・ショックアテ ・ノウコツノギ作業 ・ノウコツノギ	・参列、焼香 ・参列者への挨拶 ・野辺送り ・納骨 ・ミキャナンカ ・シジュウクニチ	・参列、焼香 ・受付 ・香典提供 ・葬列 ・後片付け	＜式次第進行役＞ ・僧侶手配 ・葬具提供 ・喪家の祭壇作り
◇直会	・参列者の接待	・加勢の人は参列	・直会食事手配
◇互助会システム <sup>60</sup>	・互助会加入	・互助会加入	・顧客の囲い込み

表 4-2、4-3 に示す、火葬の普及による葬儀は、土葬の頃のイキフリ(池堀)、ヤギョ作り、

<sup>60</sup> 奄美大島で互助会システムを行っている葬儀社はV葬儀社のみである。

棺作り、ツカ作りなどシマの人の労力負担がなくなり、葬祭業者の参入によって、シマで行っていた葬儀を葬儀業者が提供する名瀬や瀬戸内町の葬祭場で行われるようになった。

葬儀に伴う死亡届、火葬利用届、埋葬許可書手配、地元新聞社2社への新聞広告掲載などの諸手続き、遺体搬送、生花・花輪の準備、宗教者の手配、ソウシキまたはコクベツシキおよびノウコツノギの祭壇作りや進行、ノウコツノギの葬具準備、直会の食事手配など葬儀のあらゆる部分に葬儀社が介在している。このように全国的な葬儀社としての論理による市場展開によって葬儀の外部化が進んでいるのである。

一方で、近年は高齢化が進み、葬送儀礼においても様々な影響が出ていると考えられる。例えば、参列者の中に棺を車まで運べる人が少なくなり、葬儀社の職員が手伝うことが多くなっていることや高齢者の参列者が減少していること、また亡くなる人の高年齢化によってシマとの社会関係の希薄化が進んでいることから、参列者の減少や年金生活者の葬儀費用に対する経済的な問題が挙げられる。

葬儀の参列者数でいえば、かつて200～300人が一般的であったが、近年は50人～150人程度と減少傾向にあるとされる。このことは、人口減少とともに高齢化によって施設に長期入所している人や葬儀に参列したくとも参列できない人が増えていることがあげられる。近年、奄美大島においても家族葬や1日葬が増えているといい、V葬儀社における家族葬の割合は20%と増加傾向にあると聞く。

ある葬儀社によると、現在の超高齢化に伴う多死社会にあって、低予算の家族葬が増えることは、死亡数の増加が必ずしも葬儀社の売り上げに結び付かないという経営上のジレンマを抱えていることも聞く。

### 3) 宗教者の葬儀システム化

土葬の葬儀における僧侶の参与は、経済的に余裕のある家に限られていたが、近年の葬儀は、葬儀社の葬儀システムの中で喪家の要望を聞いて宗教者を呼ぶ。ただ、ノウコツノギにおいて、宗教者を呼ぶ呼ばないは人それぞれである。もっとも宗教にこだわりのある家は少なく、お金がかかるので呼ばない人は、その旨を葬儀社に伝える。その場合、葬儀社は読経を録音したCDを用意し、参列者の焼香の時にながす。このような葬儀における仕組みは、宗教者の参与を葬儀社の葬儀システムに組み込んだ一種の外部化であるといえる。

### 4) 互助会システムによる部分的外部化

奄美市内の葬儀社では、不意の葬儀費用の備えとして互助会への加入を勧めている。この制度<sup>61</sup>は、全日本冠婚葬祭互助会協会で運営する互助組織で、掛金に応じて葬儀に限らず結婚式費用の割引が受えられるものであり日本全県で運用されている。この制度は利用者の経済的負担軽減とともに、葬儀社によるお客の囲い込み戦略として活用されている。

名瀬のV葬儀社では互助会積立金制度により、月3,000円で60ヶ月(5年)積立の会員募集を行っている。満期になると18万円となり、30万円相当の葬儀がだせることから龍郷町

<sup>61</sup> 奄美大島で互助会システムを行っている葬儀社はV葬儀社のみである。



円では約70%の人が加入しているという(宇検村においては、出入りする葬儀社の関係で加入している人は少ないという)。この互助会積立金制度は、顧客の囲い込みとともに、かつての扶助関係の肩代わりともいえる葬儀費用の部分的外部化といえるだろう。

### 3 死者儀礼の簡略化と簡素化

奄美における火葬導入以前の土葬の葬儀では、死亡後三日目をミキャンナカ(三日七日)といい、この日は近親者に集ってもらい拝みによる供養する。シジュウクニチ(四十九日)は、親族が集まって墓参をし、食事を共にする。この日で喪があけるといい、シマの行事にも参加できる。マブリワーシ(死霊別かし)をするのもこの日である。

しかし、火葬が普及するにつれ、それまでのソウシキからシジュウクニチまでの死者儀礼が1日～3日で完結するようになった。龍郷町円や宇検村平田では、火葬が始まった頃からノーコツドーに納骨した後にミキャンナカとシジュウクニチを併せて行っている。

宇検村湯湾では、納骨の後にミキャンナカを行い、その二三日以内にシジュウクニチを行っている。また亡くなってから七日から四十九日に行っていたマブリワーシも一部の地域を除き行われていない。

このミキャンナカやシジュウクニチの引き寄せに関し、二つの調査地域をみると、1960年代以降の高度成長期における若者の人口流出は、急激な人口減少と高齢化を招く結果となり、シマに残された親や親族が亡くなると喪主や遠方からの家族・親族は、シマから出て働いているので長期の休みが取れない。そのことが火葬や葬祭業者の利便性と一致し、現在では一般的な儀礼として受容されている。

宇検村湯湾のノウコツノギは、共同納骨堂が出来るまでシマの共同体による葬列が行われていた。しかし、2015年に共同納骨堂の完成後、それも行われなくなった。火葬の導入と普及は、通夜から埋葬(納骨)、ミキャンナカ、シジュウクニチに至るまで死者儀礼の期間を1日～3日に短縮し、死者儀礼そのものの簡略化と簡素化が進んでいるといえる。

## 第2節 葬儀における非外部化の部分

本節では、二つの事例にみる土葬の頃の儀礼と今日的葬儀の分離儀礼と伝統儀礼にどのような変化が見られるのか、またソウシキあるいはコクベツシキのあとに行われる、ノウコツノギ(納骨の儀)における非外部化の部分について検討する。

### 1 分離儀礼の継続性

通過儀礼<sup>62</sup>における弔いの儀礼の中で、表4-1に示す、土葬の頃の葬儀と今日の葬儀における分離儀礼をみると、死者が亡くなると時計を止める、写真や賞状の額を裏返しにする、死者を北枕で安置すること、着物を裏表逆さに着せること、また宇検村では葬列の際に台所で火を付けたタイをコショデ(逆手)でオモテトグチから渡すこと、墓地の入口近くで

<sup>62</sup> ファン・ヘネップ(1873-1973)は、人の誕生から死までの折々の儀礼、入会の儀礼などを分離・過渡・統合の過程を通過儀礼の視点で捉えた[綾部 2012:339-340]。

クワンバク(棺)に見立てた遺骨を左周りに三回まわること、焼香台でのシマの人の焼香、親族あるいは集落の人も参列する納骨と焼香、そして、会葬者は家に帰ると玄関先で塩をふりかけるなど、死の確認から納骨までの諸儀礼は、火葬が普及しても土葬の頃の葬儀と変わることなく行われている。

また、二つの葬儀事例で見る分離儀礼として、葬儀は逆手でやること、共同体で葬列を墓地まで行くこと、墓に草履と下駄をおいて帰ること、参列者が塩で身を清めること<sup>63</sup>、ミキヤナンカに酒宴を行うこと、納骨で頭骨を重要視することなど、第1章の恵原義盛の報告にあるように薩摩藩統治下の習俗を今に継続しているといえる。

ただ、二つの葬儀事例において、土葬から火葬に移行後、イケホリ(池堀り)や葬儀の参列者が穢れを祓うため海水でシュウバレ(潮祓い)をする事や第二次葬の洗骨による改葬、ユタによるマブリワシなど、今日ではほとんど見られなくなった。

龍郷町円と宇検村湯湾において、火葬骨をクワンバク(棺)に見立て、共同体が葬列を組んで墓地まで同行し、墓地の入口で火葬骨を左周りに三回まわし、焼香台でシマの人々が焼香する儀礼は、この世の象徴であるシマから死者をあの世界に分離する通過儀礼の様相を呈している(但し、宇検村湯湾では、2015年共同納骨堂「やすらぎの里」の完成以降、葬列は行われていない)。

## 2 伝統儀礼の変化と継続性

第1章で、奄美・沖縄への火葬の導入と普及は、伝統的な複葬文化の維持と変容〔加藤2010:16〕の問題であることを議論した。その中で、第一次葬で風葬から土葬へ変化し、第二次葬で洗骨改葬による複葬を行ってきた奄美大島の人々にとって、第一次葬への火葬の導入は、伝統的な複葬の破壊という問題が生じてくる、シマの人々は、この問題に対し、どのように対処してきたのか。本項では、火葬の定着後における伝統儀礼の変化と継続性について、第2章、3章の二つの事例から検討する。

### 1) 持続する頭骨の位置づけ

奄美では、人が死んだらそれを地上に安置して、風化による骨化を待って、残った骨を洗い清めるという風葬の習俗がある。これは人間の霊が、骨、特に頭蓋骨にとどまるという、骨を直接対象にして祀る、骨信仰がある〔松山 2004:77〕。風葬から土葬に移行後は、埋葬した死体を掘上げ土中で骨化した遺骨を洗骨し、頭骨を最上部に骨壺に入れ、石塔のそばに埋めるかノーコツドー(納骨堂)に安置する。

龍郷町円の事例では、火葬の導入期の1970年代に地下水に浸かった遺体を掘上げ、頭蓋骨は洗骨し白布で包まれ、トタン板の上に安置される。その他の骨はトタン板の上に安置された骨をプロパンガスのバーナーで焼いた。焼いた骨は骨壺に納められた火葬骨の上に、洗骨した頭蓋骨を置き、納骨堂石塔に安置されている。

<sup>63</sup> 土葬の頃、参列者は穢れを祓うため渚の海水でシュウバレ(潮祓い)を行っていたが、今日は自宅の玄関先で塩(マシュ)をふりかけ身を清める。

宇検村平田では、共同納骨堂の建立にあたり、無縁者八体の遺骨が掘り出された。遺骨は、墓地において、頭骨とその他の骨はトタン板にのせプロパンガスのバーナーで焼骨する火葬が行われている。その火葬骨を足から順に骨壺に入れ、最後に頭骨を納め、納骨堂壇に安置されている。

火葬が定着した今日、火葬場で遺体が焼きあがると火葬骨の拾骨が行われ、頭骨を一番上に骨壺に納めている。「頭骨を火葬するしないのいずれの場合も頭骨を別に扱うことは、頭骨に与えられてきた伝統的な価値を表出するための行為である」[加藤 2010:99]。葬法が風葬から土葬、そして火葬へと変化するなかで、頭骨を別に扱い、ノーコツドロー(納骨堂)に安置する儀礼は、頭骨に与えられたシマの人々の伝統的価値観の表れであるといえる。

## 2) 複葬の残存性と継続性

沖縄において、洗骨改葬は火葬化によって必ずしも消滅するものでなく、事実として火葬後の洗骨改葬が存在しており、墓制との関連において一定の根拠があるという津波一秋の報告がある[津波 2022:388]。ただ、奄美大島において、火葬後の洗骨改葬に関する研究者の報告は見られない。だとすると、奄美大島において複葬の残存性や持続性はあるのだろうか。

第2章で述べた1970年代の龍郷町円の洗骨改葬時の火葬事例において、第二次葬の火葬は頭骨の洗骨後に行われている。この部分でいえば、火葬は洗骨に対する付加行為である。また第3章で述べた宇検村平田の共同納骨堂における改葬は、古骨を洗骨しないまま火葬している。この部分で言えば、火葬は洗骨の代替である[加藤 2010:101]とする見解から、それはいずれも改葬行為であり複葬の残存である。

蔡文高によれば、火葬において人々の遺骨尊重による火葬は骨拾いという二次葬を伴っている。このため火葬も一般的には複葬とされている[蔡 2004:384]と述べている。この蔡文高の複葬に関する論拠は、堀一郎の「火葬は元来自然の風葬を特に人工を加えて短時間に風化せしめる手段と解されるから、死体焼却が第一次葬であり、火葬後の骨拾いは改葬または洗骨の中間葬にあたり、骨壺に納めた遺骨を埋葬することは、形は単葬であるが第二次葬を意味する」[堀 1951:229]ことが根拠となっている。

ここで蔡の、火葬は遺骨尊重による骨拾いという二次葬を伴う複葬とする議論を再考する。葬法には、死体を一度だけ処理する単葬、および一定の年限において二度以上処理する複葬との二種があるという定義がある[津波 2012:15]。この複葬の定義からすると、火葬が死体を一度だけ処理する単葬であることから、蔡のいう火葬が骨拾いを伴う複葬であるとは言い難い。ただ、洗骨改葬と火葬骨について、次のような解釈もある。

小熊誠は、洗骨改葬と火葬骨との比較について次のように述べている。「火葬が行われるようになると、新たに拾骨が葬儀の儀礼に組み込まれるようになる。伝統的な洗骨は、死後数年後に遺体の骨を洗って白骨化し、骨甕に入れて墓に納骨する。骨を白くすることが遺体の浄化であり、洗骨から火葬に移行することによって、その期間が大幅に短縮された。洗骨が遺体の浄化としての意味をもつならば、火葬に移行してもその目的は変わらな



い。影響を受けるのは洗骨改葬が無くなることである」[小熊 2009:73]と論じている。

葬法が風葬から土葬、そして火葬へと変化するなかで、シマの人々は伝統的に洗骨による頭骨を重要視してきた。洗骨が遺体の浄化の意味を持ち、火葬が骨を浄化する洗骨の代替であるとすれば、火葬に移行してもその価値は変わらない。二つの葬儀事例で言えることは、火葬後の白骨の骨拾いによる咽喉ボトケと頭骨を骨壺の最上部に納め、納骨堂に安置する行為は、かつての洗骨による納骨儀礼と同じような儀礼様式となっている。

### 3) ノウコツノギ(納骨の儀)の持続性

龍郷町円と宇検村湯湾の葬祭場および火葬場で行われているソウシキあるいはコクベツシキと火葬の後に、集落で行われる「ノウコツノギ(シマでは葬式あるいは告別式と同じ意味あいがある)」は、シマの人たちが参列し、焼香台での焼香ののち火葬骨を遺体と見做し墓地まで葬列する儀礼がある。二つの地域におけるノウコツノギの準備作業や焼香台での焼香とノーコツドー(納骨堂)への納骨はシマの人々の関りによって行われている。

宇検村平田の長老の話によると、ノウコツノギは、かつて洗骨改葬が行われていた頃より、シマの人々の手によって行われていたという。二つの事例で行われている葬儀をみると、奄美市内で行われるソウシキあるいはコクベツシキと火葬は、葬祭業者によって外部化された葬儀が行われ、集落でのノウコツノギは、シマの人々による遺骨との別れの儀礼となっている。

## 3 葬儀におけるシマの関係性

### 1) 龍郷町円におけるノウコツノギとシマの関係

表 4-4 は、第 2 章でみた A・B・C 家における葬儀の参与関係を示すものであるが、その関与の仕方はさまざまである。A・B・C 家の事例からすると家族、親族、近隣の人々だけでなく、職場の同僚、友人などの参列やノウコツノギの手伝い、弔電の提供などを含めると、かなり広い範囲の人々がソウシキに参与している。

例えば、通夜のみに参加する人、ノウコツノギの準備作業をする人、ソウシキだけに参与して帰る人、通夜、ソウシキ、火葬、ノウコツノギ、あと祓いの会食まで参加する人、香典や供物を提供する人などその関わり方は多様である。

図 4-1. 4-2. 4-3 に示す、ノウコツノギにおける集落民の参列は、A 家 91% (181 人)、B 家 39% (30 人)、C 家 53% (26 人) といずれも高い参列者数となっている。A 家の場合、故人の配偶者の出身集落の関係者が多いことや当主の勤務先の関係者が多かったことにある。B 家の割合が低いのは集落の 70% が親族関係にあることや高齢のために参列できない人が多かったことが考えられる。

C 家の場合、故人が U ターンして間もないことから集落の人との関係が希薄であったこと、近年の集落の人口減少(2006 年 262 人→2016 年 181 人=▲81 人)と超高齢のため参列したくとも参列できない人、あるいは施設に入居している人が増えていることなどが考えられる。ただ、B・C 家の参列者数だけをみると人口減少と高齢化に伴う葬儀の規模縮小化

は否めない事実としてあり、B・C家においてノウコツノギの山入と花つくりの手伝いがないということは労力を要する人手が手配できなかったことが考えられる。

表 4-4 円 A・B・C 家における葬送儀礼の参与関係

儀礼内容	内 容	A 家(2006 年)	B 家(2009 年)	C 家(2016 年)
儀礼	享年・性別	80 歳・男性	94 歳・女性	62 歳・男性
	社会的関係	林業関係	施設・大島紬織	U ターン者
通 夜	家族・親族	11 人	46 人	24 人
	集落・知人	145 人	30 人	8 人
納骨の儀 準備作業	墓サバクリ班	3 人	3 人	3 人
	炊事班	13 人	10 人	0
	山入班	2 人	0	0
	花つくり班	10 人	0	0
ソウシキ(葬式)	家族・親族	16 人	46 人	21 人
火 葬	家族・親族	16 人	46 人	12 人
ノウコツノギ (納骨の儀)	家族・親族	17 人	46 人	23 人
	集落・知人	181 人	30 人	26 人
香典提供	香典返礼なし	180 件	200 件	60 件
互助会加入有無	掛金に応じた割引 制度	有	有	有

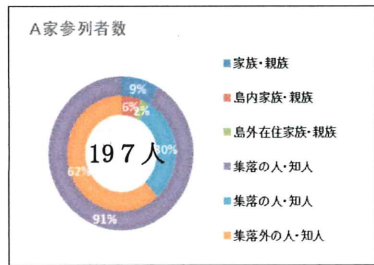


図 4-1 A 家参列者数

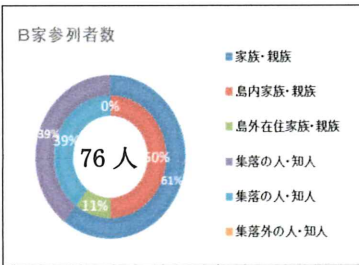


図 4-2 B 家参列者数

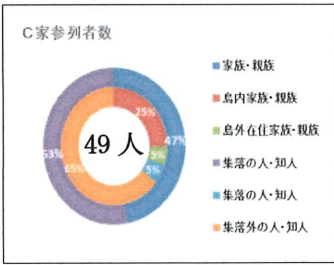


図 4-3 C 家参列者数

## 2) 宇検村平田・湯湾におけるノウコツノギとシマの関係

表 4-5 は、第 3 章の宇検村平田・湯湾における D・E・F・G 家の葬儀における参与関係を示すものである。その関与の仕方は、前述の龍郷町円の事例と同様にさまざまである。

表 4-5 平田・湯湾 D・E・F・G 家における葬送儀礼の参与関係

式次第	参列者	D 家 (2002 年)	E 家 (2016 年)	F 家 (1995 年)	G 家 (2022 年)
	享年・性別	80 歳(女性)	94 歳(女性)	110 歳(女性)	100 歳(女性)
通 夜	家族・親族	2 人	5 人		16 人
	集落・知人	37 人	16 人		150 人
ノウコツノギ 準備作業	炊事・会場設営 (集落・青年団)	10 人	5 人	20 人	15 人
告別式	家族・親族	2 人	5 人	14 人	20 人
	集落・知人	37 人	16 人	0 人	0 人
火 葬	家族・親族	2 人	5 人	14 人	20 人
	集落・知人	37 人	16 人	33 人	0 人
ノウコツノギ (納骨の儀)	家族・親族	4 人	5 人	14 人	20 人
	集落・知人	80 名	8 人	520 人	240 人
香典提供	香典返礼あり	143 件	30 件	700 件	427 件
互助会加入有無(割引制度)		無	無	無	無

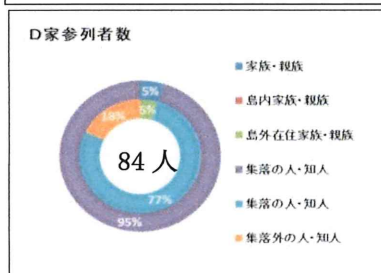


図 4-4 D 家参列者数

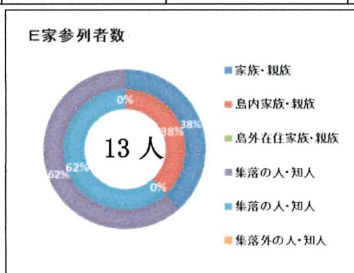


図 4-5 E 家参列者数

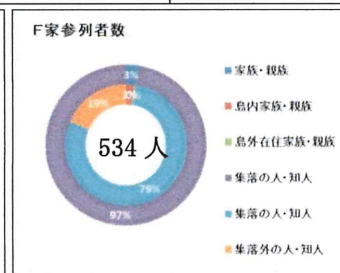


図 4-6 F 家参列者数

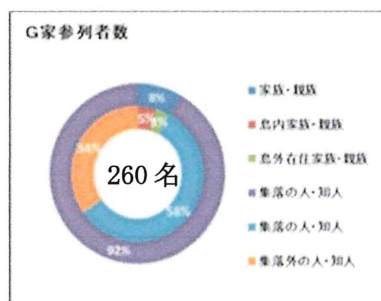


図 4-7 G 家参列者数

例えば、4 家の事例からすると家族・親族、島外に住む家族・親族、集落内の人、他集落の人だけでなく、喪主の職場の同僚、知人などの参列やノウコツノギの手伝い、弔電の提供などを含めると、かなり広い範囲の人々が葬儀に参加する。通夜のみに参加する人、ノウコツノギの会場設営の準備作業をする人、コクベツシキだけに

参与して帰る人、通夜、告別式、火葬、ノウコツノギ、夜の会食まで参加する人、香典や供物を提供する人などその関わり方は多様である。



図 4-4. 4-5. 4-6. 4-7 に示す、ノウコツノギにおける集落民の参列は、D 家 95% (80 人)、E 家 62% (8 人)、F 家 97% (520 人)、G 家 92% (240 人) といずれも高い参列者数となっている。

D 家の場合、故人はシマに長らく 1 人で住み、多くのシンセキや知人がいたこともあり、集落の約半数の参列者があった。E 家の故人は、平田出身で横浜に長男夫婦と住んでいたが、病気療養中に病院で亡くなり、横浜で葬儀を行い、その 2 年後にシマでノウコツノギを行った事例である。故人はシマを離れて長く、シマとのツキアイが少ないこと、また亡くなってから 2 年も経っていることから、シマの参列者は 8 人ほどであった。平田では高齢化が進み、体力的に参列したくともできないという人が多いことも参列者が少なかった要因の一つとしてあげられる。

F 家の場合は、故人が商売をやっていたこともあり、集落内でのツキアイも多かった。湯湾は役場の所在地であり、人口は村内で最も多く、ノウコツノギは集落のほとんどの人が参列している。G 家の故人は、旅館業を営んでいたが廃業後、110 歳で亡くなった。喪主は役場に勤めていたこともあり、村内外に広いツキアイがある。葬儀のコクベツシキとノウコツノギはコロナ禍の最中にあり、コクベツシキの参列者は 20 人と制限された。そのような中であって、ノウコツノギには 260 人もの参列者があった。シマの人は、シマに対する共属意識が強く、コロナ禍における葬儀も余程の理由がない限り参列しているのである<sup>64</sup>。

### 3) 葬儀の分化と継続性

第 2 章の龍郷町円の事例でみてきた、葬儀をソウシキ(家族葬)のみで集落でのノウコツノギを行わない理由に、ほとんどの人が集落に継承者や身内がいないことや施設に長期入所していることによる集落との関係希薄化をあげている。また、円に墓がある人で、入居施設に住所を移動している人や奄美市内または近郊集落に移住している人の大方は、奄美市内の葬儀場でソウシキ(家族葬)のみを行うと聞く。このことは、高度成長期に都市部に移動した世代がその親の死に対し、地域社会から分離した葬儀形態を取らざるを得ないような状況にあることが考えられる。

つまり、円における今日的な葬儀事情を考えると、葬儀そのものの変化というよりは、シマから離れていった人とシマに住む人の、死者と生者の生前における人間関係の変化による儀礼様式の分化であり、葬式慣習も規模縮小、簡略化、簡素化の動きが進んでいるといえる。このように人間関係の変化によって儀礼様式が分化するなか、シマに住む人々の葬儀は、今もって、ソウシキ(家族葬)とノウコツノギ(集落葬)の一連の儀礼がシマの伝統的な葬儀として受け継がれている。

### 4) シマの相互扶助と互酬関係

土葬の頃の葬儀の供物の提供は、自給自足の生活を反映した素麺、ワカメ、茶、昆布、

<sup>64</sup> 葬儀では、マスク着用や手洗いなどの感染予防は周知徹底されている。

メリケン粉、豆腐、菓子等々、葬儀に必要なものが集まっていた。それが1960年代以降になると、火葬の普及や貨幣経済の浸透などにより現金の提供が主体となってきた。今日の龍郷町円と宇検村平田・湯湾の葬儀事例でみると、龍郷町円のA家180件、B家200件、C家60件、宇検村平田・湯湾のD家143件、E家30件、F家700件、G家427件の香典が提供されている。その金額は、1,000円～30,000円までとそれぞれである。

龍郷町円では、集落の人の香典は1,000円と規定されているが、親族や集落外の人はそのつながり程度によって提供する金額は様々である。龍郷町円の場合は、香典のみで葬儀費用を賄えるケースは少なく、香典とV社の互助会システムの割引制度の利用により賄っていると聞く。

宇検村では、香典の提供に対する特別の決まりはなく、3,000円程度が多いとされる。これも故人や家族のつながりによって、その額はまちまちであるという。例えば、平田D家の場合、香典が143件(80万円)の提供があり、葬儀費用は十分に賄えたという。また、湯湾G家の事例でみると、全427件の香典が提供されている。全香典の内、湯湾161件、他集落139件となっている。香典の金額は3,000円、5,000円、10,000円、15,000円、30,000円とあり、5,000円の提供が一番多い。収入は200万円以上あり、歳出費用を十分に賄えている。

N氏によれば、葬儀に参列できない高齢者も知り合いに香典を依頼しているので集落の9割方の人から香典の提供があるという。湯湾の事例で見ると、ソウシキあるいはコクベツシキで死者に供えられるソナエモノ(供え物)は、死者への供物であり、実際に葬儀を演出し物的に支える機能を持っている。これは提供者が自主的に供えるもので、喪家との関係によって供花や果物籠など種類を変えて提供される。これはソナエモノを通じた家族・親族関係の表現であり形成である。

香典は、死者へ供えるものであるとともに、葬儀を経済的に支えるものである。香典をもらうと、もらった家で葬儀があると必ず返さなければならないということが意識されている。いわば借金の返済のようなものである。ある葬儀社の話によると、近年家族葬のみの葬儀が増える傾向にあり、香典そのものを辞退するケースが増えているという。これは経済的負担も物的負担も人的負担も全て喪家、あるいは近親者によって賄うことになる。

つまり、今日の奄美大島の葬儀において、香典や供物は良くも悪くも葬式という循環的扶助費用であり、シマの人の「相互扶助」と香典を提供する人の「互酬関係」<sup>65</sup>によって「ソウシキまたはコクベツシキおよびノウコツノギ」が支えられているという側面があることも考える必要がある。しかし、そもそもなかには葬儀費用が出せない人もいる。このような場合、シマの人々の共属意識のなか、葬儀に必要な材料や労力の提供など相互扶助

<sup>65</sup> 経済へ入ったり出たりする財と人間の移動を承認し、確認すること、および実体＝実在的な経済過程の物的要素を生産的に使用することが、血族組織のような社会構造のある部分に見られる。家族、血族組織は互酬関係の原形である。それは同時に友人間、隣人間、随時集団の成員間、同僚の集団およびそのたぐいのものの間にも典型的にみられる〔ポランニー 玉野井・栗本訳 1980:58〕。要約すると2つの集団、個人間の直接的な見返りを求めない財・サービスのやりとりおよびその集合をいう。



とともに公的扶助の検討も必要ではないだろうか。

### まとめ

本章では、第2章、第3章でまとめた龍郷町円と宇検村平田・湯湾の葬儀事例を比較し、今日的葬儀における外部化の部分と非外部化の部分について検討した。

外部化の部分でいえば、火葬の普及による葬儀は、土葬の頃のイキフリ(池堀)、ヤギョ作り、棺作り、ツカ作りなどシマの人の労力負担がなくなり、葬祭業者の参入によって、シマで行っていた葬儀を葬儀業者が提供する名瀬や瀬戸内町の葬祭場で行われるようになった。それに伴う死亡届、火葬利用届、埋葬許可書手配、地元新聞社2社への新聞広告掲載などの諸手続き、遺体搬送、生花・花輪の準備、宗教者の手配、ソウシキまたはコクベツシキおよびノウコツノギの祭壇作りや進行、ノウコツノギの葬具準備、直会の食事手配など葬儀のあらゆる部分に葬儀社が介在している。このことは、葬儀社という商品の提供者とそれを購入する消費者という相互依存関係が成立していることになる。

土葬の葬儀における僧侶の参与は、経済的に余裕のある家に限られていたが、近年の葬儀は、葬儀社の葬儀システムの中で喪家の要望を聞いて宗教者を呼ぶ。これは、葬儀社の葬儀システムへの組み込みであり、一種の外部化である。また、名瀬のV葬儀社による互助会積立金制度は、顧客の囲い込みとともに、かつての扶助互助の肩代わりともいえ、葬儀費用の部分的外部化といえる。

非外部の部分でいえば、死者が亡くなると時計を止める、写真や賞状の額を裏返しにする、死者を北枕で安置すること、着物を裏表逆さに着せること、葬列の際に台所で火を付けたタイをコショデ(逆手)でオモテグチから渡すこと、墓地の入口近くでクワンバク(棺)に見立てた遺骨を左周りに三回まわること、焼香台でのシマの人の焼香、親族と集落の人参列する納骨儀礼と焼香、そして、会葬者は、家に帰ると玄関先において塩で身を清めるなど、死の確認から納骨までの分離儀礼は、火葬が普及しても土葬の頃の葬儀と変わらない。

火葬が定着した今日、火葬場で遺体が焼きあがると火葬骨の拾骨が行われ、骨壺に頭骨を最上部に納めている。シマの人々が、頭骨を重要視し、ノーコツドー(納骨堂)に安置する儀礼は、遺骨との最終的な別れの儀礼である。

龍郷町円における葬儀の分化という今日的な葬儀事情を考えると、葬儀そのものの変化というよりは、シマから離れていった人とシマに住む人の死者と生者の生前における人間関係の変化による儀礼様式の分化であり、葬式慣習も規模縮小、簡略化、簡素化の動きを示すものである。しかし、人間関係の変化によって儀礼様式が分化するなか、今もって、シマに住む人々の葬儀は、ソウシキ(家族葬)とノウコツギ(集落葬)の一連の儀礼がシマの伝統的な葬儀として受け継がれている。

今日の奄美大島の葬儀において、香典や供物は良くも悪くも葬式という循環的扶助費用であり、シマの人々の「相互扶助」とともに香典を提供する人の「互酬関係」によってソウシキまたはコクベツシキおよびノウコツノギが支えられているという側面がある。



## 第5章 今日の葬儀の構造

### はじめに

本研究の発端は、土葬の複葬を行ってきた奄美大島において、火葬の導入と普及は、葬送儀礼の外部化とともに伝統の変化と継続という問題がないとは必ずしも言えないことからであった。

本論文では、奄美大島でもより少子・高齢化・人口減少の進んでいると考えられる、龍郷町円および宇検村平田・湯湾における今日の葬儀を取り上げ、地域において変化しながらも継続する奄美大島の伝統をみてとることを目的とした。奄美大島における二つの事例から今日の葬儀の構造をみてとることで課題の解明に取り組むことを試みた。

### 1 葬儀の外部化と非外部化の構造

奄美大島の龍郷町円と宇検村平田・湯湾の二つの葬儀事例を比較検討すると、外部化された部分と非外部化の部分の二つの構造で成り立っていることに気づく。

第2章、3章でみてきたように、葬儀の外部化の部分で言えば、葬儀社が提供する葬儀場や火葬場におけるソウシキまたはコクベツシキが挙げられる。それは、葬儀に関する死亡届、火葬利用届、埋葬許可書手配、地元新聞社2社への新聞広告掲載などの諸手続き、遺体搬送、生花・花輪の準備、宗教者の手配、ソウシキまたはコクベツシキおよびノウコツノギの祭壇作りや進行、ノウコツノギの葬具準備、直会の食事手配など葬儀のあらゆる部分が葬儀社の手によって執行されている。

近年の葬儀における宗教者の参与は、宗教者の参与を葬儀システムに組み込んだ一種の外部化である。また、名瀬のV葬儀社による互助会積立金制度は、顧客の囲い込みとともに、かつての扶助関係の肩代わりともいえる葬儀費用の部分的外部化といえるだろう。

次に、葬儀の非外部化の部分で言えば、土葬の頃の葬儀と今日の葬儀における分離儀礼をみると、死者が亡くなると時計を止める、写真や賞状の額を裏返しにする、死者を北枕で安置すること、着物を裏表逆さに着せること、宇検村では葬列の際、台所で火を付けたタイをコショデ(逆手)でオモテトグチから渡すこと、墓地の入口近くで遺骨を左周りに三回まわること、焼香台での一般参列者による遺骨との別れの儀礼、そして会葬者は家に帰ると玄関先において塩で清めるなど、死の確認から納骨までの儀礼は、火葬が普及しても土葬の頃の葬儀と変わることなく行われている。

非外部化の部分で最も重要な儀礼はノウコツノギである。ノウコツノギは、奄美市内でのコクベツシキのあとシマの墓地または共同納骨堂で行われる。龍郷町円では土葬の頃の葬儀と同じく、共同体による葬列が行われている。宇検村湯湾では、2015年に共同納骨堂が出来るまで龍郷町円と同じく葬列が行われていた。宇検村平田では、共同納骨堂においてシマの人が参与するノウコツノギが行われている。要するに二つの事例では、葬列が行われていたかないかの違いはあるが、シマの人が参与するノウコツノギは、今でも等しく行われ

ているという共通項がある。

このノウコツノギの準備に要する労力は、葬儀社による香典返しや会葬礼状の用意および祭壇作りと式次第進行を除き、会場設営や受付および直会の食事作りなどほとんどがシマの人々の関りによるものである。また、ほとんどの住民が、ノウコツノギに参列し、香典を提供している。香典や供物は今日においても、良くも悪くもソウシキという循環的扶助費用であり、シマの人の「相互扶助」と香典を提供する人の「互酬関係」によって葬儀が支えられていることも明らかになった。

このようなシマの相互扶助的な関係は、そこに生活している人にとって当然の事かもしれないが、最終的にそこに住むシマの人々の関りによって、葬儀そのものが成り立っているのである。

第3章でみてきた宇検村で建設された共同納骨堂<sup>66</sup>は、集落内外からの寄付が大きな資金源となっている。この他出者からの寄付は、共同納骨堂を管理する集落への感謝の表出として認識されていることから集落と他出者を結ぶ結節点ともなっている。宇検村の共同納骨堂の運営は、集落内外の人々の共属意識による「寄付提供」や「相互扶助」および「互酬関係」によって成り立っていることも明らかになった。

## 2 葬儀の伝統と遺骨との別れの儀礼化

奄美大島の二つの事例における、ソウシキまたはコクベツシキおよび火葬とノウコツノギの儀礼についてみる。今まで見てきたように、龍郷町円では、奄美市内においてソウシキと火葬のあと、シマの共同墓地において人々が葬列をとまなうノウコツノギ(納骨の儀)を行っている。一方、宇検村湯湾では、2014年頃まで奄美市内でのコクベツシキと火葬のあと、火葬骨は一旦家に戻り、そのあとシマの人々が参列する告別式と納骨の儀礼を行う式場まで葬列が行われていた。いずれも葬列の伝統を今に生かす葬儀手順である。

円の事例では、一度家を出た死者は家に再び戻らないというシマの規範に従っていることにあり、一方、湯湾の事例は、家から遺骨を遺体に見立て式場まで葬列行進する葬儀手順となっている。そのいずれの事例も、死者が家を出たあと火葬後に家に戻るか戻らないかの違いはあるが、それぞれのシマの伝統的な葬儀手順をそのまま概念化したものであると考えられる。

火葬が定着後の奄美大島では、人が亡くなると自宅または葬儀場で通夜を行い、遺体は葬儀場に運ばれてソウシキまたはコクベツシキを行う。家族・親族は、葬儀場あるいは火葬場で遺体に対して別れの儀礼を行った後に茶毘に付され、遺体が焼きあがると家族・親族など身内による拾骨儀礼が行われる。「火葬場での拾骨儀礼の際、頭骨は骨壺の最上部に置かれ、頭骨への価値観が表出される」[加藤 2010:109]。

二つの事例において、ソウシキまたはコクベツシキと火葬の後、シマの共同墓地または共

<sup>66</sup> 宇検村の葬儀におけるノウコツノギ(納骨の儀)は、各集落の共同納骨堂で行われている。

同納骨堂に移動し、遺骨との別れの儀礼としてノウコツノギが行われる、祭壇に焼香台が置かれ、骨壺に納めた遺骨を安置し、参列した多くの人は遺骨に対して焼香と拝みをする。

つまり、二つの事例におけるソウシキまたはコクベツシキでは、遺体に対して別れの儀礼をするのに対し、ノウコツノギでは、遺骨に対して別れの儀礼をするという一連の儀礼様式となっている。

奄美大島の葬制は、第一次葬で土葬した遺体を掘り出し、洗骨改葬して死者を葬る第二次葬として行われてきた。伝統的な洗骨は、遺体や遺骨を水や酒で拭くなどして洗い清める儀礼であり〔津波 2022:368〕、骨の白骨化と靈魂の浄化であった。土葬から火葬に移行すると遺体が白骨化するまでその期間が大幅に短縮となった。

火葬は死後すぐに遺体を白骨化して納骨する。洗骨が遺体の浄化としての意味をもつならば、火葬に移行してもその目的は変わらないとする小熊誠と火葬が骨を浄化する洗骨の代替であるとする加藤正春の見解や遺骨尊重による骨拾いと墓への安置は、遺骨との別れの儀礼様式として受け継がれている。実のところ、二つの事例における火葬は、本土他府県での火葬骨が、儀礼行為の対象とはならず、奄美大島では、頭骨を重要視する儀礼行為として継続されているのである。

今まで見てきたように、奄美大島の葬墓制の変化過程をみると、第一次葬における風葬から土葬への変化、および第二次葬の洗骨を伴うジシ・ギシ(洞穴墓)から骨甕(フニガミ)、石塔納骨堂(ノーコツドー)へ改葬の変化がみられる。そして 1980 年代以降、第一次葬における土葬から火葬への変化、および日本的な火葬である火葬骨を石塔納骨堂、あるいは宇検村にみられる共同納骨堂へ安置する変化がみられる。

奄美の人によれば、ジシ・ギシもフニガミもノーコツドーも役割はすべて「納骨堂」であるという考え方からすると、奄美大島における墓の形態に変化はみられるものの「納骨堂」としての役割に大きな変化はみられない。

前述のようにノウコツノギは、共同体による「葬列」<sup>67</sup>あるいは焼香台での「焼香」と「拝み」によって、あの世に死者を送り出す遺骨との別れの儀礼化である。つまり、ノウコツノギは、土葬の頃の葬儀と遺骨を納骨堂に安置する儀礼が同次元で再現されているのである。伝統的に頭骨を重要視する奄美大島において、最終的な遺骨との別れの儀礼がノウコツノギ(納骨の儀)の中心となっている。

### 3 葬儀の外部化と奄美大島の伝統の継続性

第 1 章で議論したように、奄美において火葬が導入されるおよそ 100 年以前に風葬から土葬への転換期があり、それにとまって葬送への儀礼の一度目の外部化が起きた。そして、その後の火葬の導入は、葬送儀礼の二度目の外部化であると津波高志は位置づけている。

奄美大島は、近世以降、薩摩・鹿児島の影響下にあつて、日本本土からの長期的文化接触

<sup>67</sup> 宇検村湯湾のノウコツノギ(納骨の儀)での葬列は、2015 年に共同納骨堂が出来てから行われていない。



の影響を受けてきた。例えば、家には仏壇や神棚が置かれ、葬儀も家から葬儀社の提供する外部施設へと葬送儀礼の場を移してきた。また、葬儀に宗教者の参与がシステム化され、式次第も本土様式で行われるなど本土化が進展している。

ところが、第2章、3章でみてきた二つの事例を比較検討すると、外部化された部分と非外部化の部分が存在していることに気づく。そのことは、ソウシキ(葬式)またはコクベツシキ(告別式)の後に集落の墓地あるいは共同納骨堂で行われるノウコツノギ(納骨の儀)に如実に表れている。

津波高志が指摘しているように、奄美では集落のことをシマと呼んでおり、それは薩摩支配のはるか以前の古琉球の頃から用いられ、土地の人々がもっとも共属意識を感じる用語である。

第2章、第3章でみてきた龍郷町円および宇検村平田・湯湾の事例では、葬儀社により外部化された葬儀のあと、集落の墓地あるいは共同納骨堂で行われるノウコツノギは、集落民の関りによる外部化されていない最終的な儀礼として実践されている。つまり、両者の葬儀は、シマの人々によるノウコツノギへの関りとシマへの共属意識が両者の共通項として存在しており、奄美大島の伝統儀礼の根底をなすものである。伝統的に頭骨を重要視する最終的な遺骨との別れの儀礼がノウコツノギ(納骨の儀)の中心となっていることが明らかになった。

一方、都市移住者の葬儀事例をみると、コクベツシキ(告別式)を他出地で行い、ノウコツノギ(納骨の儀)、あるいはノウコツシキ(納骨式)をシマで行うことも多く、シマに住む人と他出地に住む人々の「相互扶助」と「互酬関係」によって葬儀が成り立っていることがわかる。また都市移住者の多くがシマにおける墓の継承や共同納骨堂の購入を考えていることもわかった。そして、シマに帰らない人は、居住地近辺に墓地を設けるか、あるいは永代納骨堂を購入し、祭祀財産の継承が行われている。

ただ、第3章3節の関東太平洋会会員対象への平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査にみるように、自身の葬儀に関し、葬儀の形にこだわらないとか、葬儀はして欲しくないとか、無宗教の葬儀でも良いなど、都市移住者のなかで死生観に対する多様性がみられる。

このような中、龍郷町円と宇検村平田・湯湾の二つの葬儀事例でみえることは、1990年代以降、シマの人口減少と高齢化とが相俟って、急速に葬墓制の変化が進み、従来の葬儀や墓の維持が困難となり、葬送儀礼は小規模化や簡略化が進み、宇検村では墓管理の困難さから墓の共同納骨堂化が進んでいることも現実としてある。

しかし、このような状況下、二つの事例でみるように、全国的な葬祭業者としての論理で葬儀の外部化が進んでいるにもかかわらず、奄美大島では、近世以降、薩摩・鹿児島の影響下であって、葬儀の本土化が進む中、変化しながらも、今なお、それぞれの地域において伝統的な葬儀のやり方が受け継がれていることが明らかになった。

つまり、奄美大島における今日的葬儀の構造は、外部化された部分と外部化されていない部分の抱き合わせということになる。それが維持されるかぎり、奄美大島の葬儀の文化が

存続することになる。

## 謝 辞

本論文の執筆にあたり、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の小熊誠教授、後田多敦教授、周星教授、および琉球大学の津波高志名誉教授より細部にわたり、ご教示とご指導をいただき厚く御礼申し上げます。また本論文に対して有益なコメントをいただいたゼミの皆様にお礼申し上げます。

そして、本研究の調査において、資料提供を含めてご協力いただいた龍郷町円の圓山和昭氏、柿均氏、宇検村教育委員会の元田信有氏、宇検村平田の益英勝氏、大和村湯湾釜の蔵正氏、東京奄美会、関東太平会、関東屋鈍会、関東阿室会、他の皆様に感謝いたします。尚、本論文に対して有益なアドバイスとコメントをいただいた本多俊和(スチュアート・ヘンリ)氏と関係者の皆様にお礼申し上げます。

以上

## 参考文献

赤田 光男

1993 「与論島の洞穴墓と改葬習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集、pp323-347、国立歴史民俗博物館。

綾部 真雄

2012 「儀礼研究受難の時代—「通過」概念の汎用性をめぐって」『通過儀礼』ファン・ヘネップ著、pp335-355、岩波文庫。

奄美市教育委員会

2015 『史跡赤木名城跡保存管理計画書』、奄美市教育委員会。

井上 治代

2003 『墓と家族の変容』岩波書店。

井上 順孝

2004 「信仰共同体の今—変質しつつある絆」『絆：共同性を問い直す』（岩波講座宗6）、小田淑子、島藺進、末木文美土、関一敏、鶴岡賀雄（編）、pp27-51、岩波書店。

内堀 基光

1987 「墓」『文化人類学事典』石川栄吉ほか編、pp584-585、弘文堂。

恵原 義盛

2009 『奄美生活誌』南方新社。

沖縄タイムズ社

1983 『沖縄大百科事典』沖縄タイムズ社。

大野 晃

2008 『限界集落と地域再生』南日本新聞社。

小熊 誠

2009 「門中と祖先祭祀」『日本の民俗 12 南東の暮らし』萩原左人・小熊誠・古家信平編、pp93-194、吉川弘文館。

2007 「風葬から火葬へ」『東アジアの死者の行方と葬儀』pp63-73、勉誠出版。

及川 高

2014 「近代奄美における親族と墓の変容」『沖縄文化研究紀要』42; pp227-240、法政大学沖縄文化研究所。

沖縄県立博物館・美術館

2017 『琉球弧の葬墓制—風とサンゴの吊い』沖縄県立博物館・美術館。

川原 晶子

2007 「鹿児島県宇検村に見る過疎集落の縮小『再生産』の仕組み」『志學館大学人間関係学部研究紀要』Vol. 28 No. 1, pp117-136、志學館大学人間関係学部。

加藤 正春

2010 『奄美沖縄の火葬と葬墓制—変容と持続—』榕樹書林。



北川由紀彦

2016 「都市移動と過疎」「都市移動と同郷団体」『移動と定住の社会学』丹野清人(編)、pp138-161、放送大学教育出版会。

久万田 晋

2011 『沖縄の民俗芸能論 神祭り、臼太鼓からエイサーまで』ボーダインク。

小松みどり

2014 「わたしの死の行方—現代日本の葬送への意識の変容」変容する死の文化—現代アジアの葬送と墓制』国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)、pp95-122、東京大学出版。

2014 「記憶の中へ」『冠婚葬祭の歴史—人生儀礼はどう営まれてきたか』互助会保証、一般社団法人全日本冠婚葬祭互助協会(編)、pp111-121、水曜社。

五来 重

2021(1994) 『日本人の死生観』講談社。

2022(1992) 『先祖供養と墓』角川ソフィア文庫。

蔡 文高

2004 『洗骨改葬の比較民俗学的研究』岩田書院。

酒井 正子

2005 『奄美・沖縄 哭きうたの民族誌』小学館。

佐々木尚之

2013 「日本における健康長寿と世代間介入」『健康長寿の社会文脈』pp91-103、風間書房。

新谷 尚紀

2018(1983) 「墓と祖先祭祀」『日本民俗概論』福田アジオ・宮田登編、pp134-145、吉川弘文館。

末本文美士

2006 『日本宗教史』岩波新書。

曾根 信一

1983 「捌里」『沖縄大百科事典(中)』p233、沖縄タイムズ社。

田畑 千秋

1992 『奄美の暮らしと儀礼』第一書房。

田島 康弘

1992 「奄美大島宇検村民の移住」『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編、第44巻、pp21-39、鹿児島大学教育学部。

財部めぐみ

2010 「奄美大島における近代仏教の布教過程—宗教者の移動性と布教スタイルを中心として」『South Pacific Studies』30.N02, 2010. 鹿児島大学南太平洋海域研究セン

ター。

立神 作造

2017 「奄美における芸能文化の生成と現状―節田マンカイと湯湾釜むちもれ踊りを事例として」『民俗芸能研究』63;pp56-74, 民俗芸能学会。

2020 「奄美大島における葬制の変容と現状」『葬送文化 21 号』、pp 18-31, 日本葬送文化学会。

2021 「奄美大島における墓制の変容と墓祭祀の共同化」『葬送文化 22 号』、pp6-24, 日本葬送文化学会。

田中 大介

2017 『葬儀業のエスノグラフィ』東京大学出版会。

2019 「多死社会」『現代思想』pp139-144、青土社。

津波 高志

2010 「民俗 総論」『大和村誌』pp651-666、大和村。

2012 『沖縄側から見た奄美の文化変容』第一書房。

2015 「奄美諸島の葬墓制」『琉球弧の葬墓制―風とサンゴの弔い』pp44-45, 沖縄県立博物館・美術館。

津波 一秋

2022 「火葬後の洗骨改葬に関する問題の可視化と再定位―那覇市小禄地区の事例研究から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 234 集、pp367-394、国立歴史民俗博物館。

戸谷 修

1981 「奄美農村にみられる社会的性格の諸相―本土農村との比較を中心に―」『奄美農村の構造と変動』松原治郎、戸谷修、蓮見音彦(編)、pp413-437, 御茶ノ水書房。

名嘉正八郎

1983 「按司」『沖縄大百科事典(上)』pp30-31, 沖縄タイムズ社。

中根 千枝

1964 「ヒキの分析」『東洋文化研究所紀要』40;pp119-155。

名越佐源太

1984 『南島雑話 1』『南島雑話 2』國分直一・恵良宏校注、平凡社。

中山 清美

2009 『掘り出された奄美諸島』奄美文庫 8、財団法人奄美文化財団。

長嶺 操

2012 「糸満漁民の分村と墓―八重瀬町字港川の場合―」『沖縄民俗研究』30;pp1-31, 沖縄民俗学会。

南海日日新聞

2016 「平田に共同納骨堂」10 月 24 日朝刊、9 面(社会)。

- 2019 「ブラジル移民の里帰り納骨」12月10日配信。  
農村振興部農村計画課
- 2017 『むらネット九州』九州農政局。
- 蓮見 音彦  
1981 「奄美における農業の変化と農村」『奄美農村の構造と変動』松原治郎、戸谷修、蓮見音彦(編)、pp19-55, 御茶ノ水書房。
- 芳賀日出男  
1983 『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村むかしいま』芳賀日出男・先田光演・濱田康作共著、財団法人宇検村振興育英財団。
- 平敷 令治  
2006 「洗骨」『日本民俗事典』pp308-309, 吉川弘文館。
- 福ヶ迫加那  
2014 「奄美大島宇検村における墓の共同化―田検『精霊殿』創設の事例から」『South Pacific Studies』35. N01, 2014. pp1-20, 鹿児島大学南太平洋海域研究センター。
- 堀 一郎  
1951 『民間信仰』岩波全書 151。
- ポランニー・K  
1980 『人間の経済 I・II』玉野井芳郎・栗本慎一郎訳、岩波現代新書。
- 松原 治郎  
1981 「奄美農村研究の課題と研究経過」『奄美農村の構造と変動』松原治郎、戸谷修、蓮見音彦(編)、pp1-15, 御茶ノ水書房。
- 松山 光秀  
2004 『徳之島の民俗 シマのこころ』未来社。
- 槇村 久子  
2014 「社会の無縁化と葬送墓制―人口動態と墓制の変化を中心として」『変容する死の文化―現代アジアの葬送と墓制』国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)、pp54-74、東京大学出版会。
- 町 泰樹  
2019 「国民国家形成における民俗信仰と葬制の変容:鹿児島県与論島の事例から」『地政策科学研究』16;pp145-161、鹿児島大学リポジトリ。
- 宮下 正昭  
1999 『聖堂の日の丸―奄美カトリック迫害と天皇教』南方新社。
- 森 謙二  
2014 「死の自己決定と社会―新しい葬送の問題点」『変容する死の文化―現代東アジアの葬送と墓制』国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)、pp31-54、東京



大学出版会。

山下欣一

1977 『奄美のシャーマニズム』弘文堂。

八木 透

1994 「家と祖先祭祀をめぐる日韓比較民俗試論—その研究視角と課題を中心とした予備的考察」『佛教大学総合研究所紀要』創刊号;pp373-390, 佛教大学総合研究所。

2001 『日本の通過儀礼』八木透編、思文閣出版。

山田 慎也

2007 『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会。

2014 「東アジアにおける葬墓制の変動」『変容する死の文化現代東アジアの葬送と墓制』国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編). pp i - x, 東京大学出版会。

山下 祐介

2012 『限界集落の真実—過疎の村は消えるのか?』筑摩書房。

弓削 正己

2015 「前近代史の歴史」『大和村誌』pp284-285, 大和村。

吉本 隆明

1985 『死の位相学』潮出版社。

若林啓子

1981 「奄美における農業の変化と農村」『奄美農村の構造と変動』松原治郎、戸谷修、蓮見音彦(編)、pp296-340, 御茶ノ水書房。

渡邊欣雄

1990 『民俗知識論の課題：沖縄の知識人類学』凱風社。

## 参考資料

奄美市教育委員会 2015 『史跡赤木名城跡保存管理計画書』。

宇検村住民税務課 2017 「人口統計資料」。

鹿児島県大島支庁 2017 『奄美群島の概要』。

龍郷町総務企画課 2017 「人口統計資料」。

龍郷町 1988 『龍郷町誌』。

農林水産省九州農政局 2017 『むらネット九州』

大和村 2010 『大和村誌』。

# 図表・写真リスト

## 第1章～第5章

図表・写真番号	図表・写真名	頁
第1章		
図1-1	奄美群島・奄美大島位置図(国土地理院地図より作成)	3
第2章		
図2-1	龍郷町20集落位置図〔国土地理院地図より作成〕	14
図2-2	円地図〔国土地理院より作成〕	15
図2-3	円2017年人口・世帯数・高齢者率推移	16
図2-4	奄美・龍郷町・円高齢者率推移	16
図2-5	Uターン者数推移〔区長の資料に基づき作成〕	16
図2-6	所得者・就業者比率(2016年)	17
図2-7	墓の作り〔恵原義盛『奄美の生活誌』より転載作成〕	20
図2-8	A家ソウシキ参与者系譜	27
図2-9	B家ソウシキ参与者系譜	32
図2-10	円集落の死亡者数とソウシキ件数推移	47
表2-1	A家葬儀参列者数	25
表2-2	B家葬儀参列者数	31
表2-3	C家葬儀参列者数	38
表2-4	ソウシキ(家族葬)のみの要因(N=18件/39件)	47
写真2-1	共同埋葬墓地からの円集落全景(2015年11月筆者撮影)	15
写真2-2	ハマオレ(浜下り)〔圓山和昭氏提供〕	17
写真2-3	タネオロシ(種おろし)〔圓山和昭氏提供〕	17
写真2-4	マブリワーシ『奄美のシャーマニズム』〔山下1977〕より転載。	22
写真2-5	納骨堂式石塔(1970年代建立)	23
写真2-6	共同焼香台	29
写真2-7	橋(三途の川)	29
写真2-8	共同埋葬墓地	29
写真2-9	タイ・ツカ・灯籠・杖・花・旗〔柿均氏提供〕	29
写真2-10	墓飾り(マエジュク・ツカ・灯籠)〔柿均氏提供〕	29
写真2-11	草履・下駄〔柿均氏提供〕	29
写真2-12	V社葬祭場	34
写真2-13	奄美市斎場	34
写真2-14	ノーコツドー(納骨堂=カロート)	35
写真2-15	安木屋場(マエジュク・灯籠)	36

写真 2-16	安木屋場(花・弔い旗)	36
写真 2-17	龍郷町円士族の墓(文久三年)	42
写真 2-18	龍郷町大勝石塔(慶應元年)	42
写真 2-19	石塔墓	43
写真 2-20	石塔墓	43
写真 2-21	納骨堂式石塔	43
写真 2-22	納骨堂式石塔	43
写真 2-23	龍郷町円共同墓地	44
写真 2-24	円納骨堂式石塔	44
写真 2-25	円の改葬後の墓地 A	45
写真 2-26	円の改葬後の墓地 B	45
写真 2-27	安木屋場共同墓地の生花	46
写真 2-28	戸口の生花焼却場	46
第 3 章		
図 3-1	宇検村 14 集落位置図 [国土地理院地図より作成]	51
図 3-2	平田集落地図 [国土地理院地図より作成]	52
図 3-3	湯湾集落地図 [国土地理院地図より作成]	53
図 3-4	平田・湯湾人口・高齢者率推移	53
図 3-5	平田高齢者世帯(65 歳以上)推移	53
図 3-6	屋鈍集落位置図	82
図 3-7	奄美大島郷友会組織図	89
図 3-8	将来の住まい	92
図 3-9	墓の継承	92
図 3-10	共同納骨堂建立について	94
図 3-11	共同納骨堂建設の経緯について	94
図 3-12	維持管理について	95
図 3-13	自身の葬儀について	95
表 3-1	宇検村出稼ぎ者実態調査(1971 年～1977 年) [若林 1981:287]	54
表 3-2	D 家葬儀参列者数	62
表 3-3	E 家葬儀参列者数	65
表 3-4	F 家葬儀参列者数	67
表 3-5	G 家葬儀参列者数	70
表 3-6	共同納骨堂建設をめぐる問題	74
表 3-7	平田集落共同納骨堂をめぐる問題の解決	76
表 3-8	関東および関西における宇検村郷友会の世帯数	89



表 3-9	郷友会の活動内容(総会・行事などは各郷友会によって異なる)	90
表 3-10	都市移住者の葬送・改葬事例	98
写真 3-1	宇検村平田集落衛星写真〔国土地理院衛星写真より転載〕	51
写真 3-2	湯湾集落衛星写真〔国土地理院衛星写真より転載〕	52
写真 3-3	ヤギョ作り [『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村 むかしいま』転載]	56
写真 3-4	葬列 [『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村 むかしいま』転載]	57
写真 3-5	告別式 [『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村 むかしいま』転載]	58
写真 3-6	改葬 [『ウムイ 思い 奄美大島・宇検村 むかしいま』転載]	60
写真 3-7	佐念ナバイシ(テーブル珊瑚)	61
写真 3-8	ヤギョ・石塔・骨壺 [高木勇氏提供]	61
写真 3-9	奄美市斎場	63
写真 3-10	旧平田共同墓地(共同納骨堂改葬後)	63
写真 3-11	平田共同納骨堂「精霊殿」	66
写真 3-12	自宅から公民館までの葬列 [元田信有氏提供]	68
写真 3-13	告別式焼香 [元田信有氏提供]	68
写真 3-14	公民館から墓地までの葬列 [元田信有氏提供]	68
写真 3-15	墓地での納骨と焼香 [元田信有氏提供]	68
写真 3-16	Ⅱ 葬儀社葬祭ホール(HP より転載)	70
写真 3-17	奄美市斎場	70
写真 3-18	共同納骨堂「湯湾やすらぎの里」	72
写真 3-19	ナバイシ墓(旧平田共同墓地)	78
写真 3-20	出土した骨壺(旧平田共同墓地)	78
写真 3-21	改葬後の納骨堂石塔	79
写真 3-22	共同納骨堂へ火葬後の旧墓地跡	79
写真 3-23	共同墓からの分骨作業 [元田信有氏提供]	80
写真 3-24	田検集落共同納骨堂「精霊殿」	80
写真 3-25	参道に立てられた旧石塔墓	80
写真 3-26	屋形墓、手前はナバイシ墓	84
写真 3-27	屋鈍集落共同納骨堂「精霊殿」	84
写真 3-28	I 田検集落共同納骨堂「精霊殿」	87
写真 3-29	II 芦検集落共同納骨堂「精霊殿」	87
写真 3-30	III 部連集落共同納骨堂「精霊殿」	87
写真 3-31	IV 屋鈍集落共同納骨堂「精霊殿」	87
写真 3-32	V 名柄集落共同納骨堂「精霊殿」	88
写真 3-33	VI 阿室集落共同納骨堂「精霊殿」	88

写真 3-34	VII湯湾集落共同納骨堂「やすらぎの里」	88
写真 3-35	VIII久志集落共同納骨堂「精霊殿」	88
写真 3-36	IX平田集落共同納骨堂「精霊殿」	88
写真 3-37	X佐念集落共同納骨堂「やすらぎの里」	88
第 4 章		
図 4-1	A 家参列者数	109
図 4-2	B 家参列者数	109
図 4-3	C 家参列者数	109
図 4-4	D 家参列者数	110
図 4-5	E 家参列者数	110
図 4-6	F 家参列者数	110
図 4-7	G 家参列者数	110
表 4-1	土葬の葬儀と火葬の葬儀の比較	101
表 4-2	奄美大島の葬送祭祀施設	102
表 4-3	火葬の葬儀と葬儀社の関係	103
表 4-4	円 A・B・C 家における葬送儀礼の参与関係	109
表 4-5	平田・湯湾の D・E・F・G 家における葬送儀礼の参与関係	110
参考資料		
表 5-1	A 家(男性・享年 80 歳)葬儀参列者数	128
表 5-2	B 家(女性・享年 90 歳)葬儀参列者数	129
表 5-3	C 家(男性・享年 62 歳)葬儀参列者数	130
表 5-4	D 家(女性・享年 94 歳)葬儀参列者数	131
表 5-5	E 家(女性・享年 86 歳)葬儀参列者数	132
表 5-6	平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査表	133
表 5-7	平田集落共同納骨堂に関するアンケート結果	135

表5-1 A家(男性・享年80歳)葬儀参列者数

## 龍郷町 円

## A家(男性・享年80歳)葬儀参列者数

儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜(自宅)	子供	1	1	2	嫁(1)						1	1	娘(1)	3
・仮通夜	兄弟姉妹	1		1		1		1						2
某年6月24日	孫	2		2						1		1		3
・本通夜	いとこ													0
某年6月25日	甥・姪	1	1	2	嫁(1)		1	1						3
・葬具手配	集落の人	20	25	45		24	40	64						109
(V葬儀社)	知人					12	24	36						36
	参列者合計	25	27	52		37	65	102		1	1	2		156
・墓さばくり班	集落の人	3	0	3				0						3
・炊事班	集落の人		13	13				0						13
・山入り班	集落の人	2		2				0						2
・花つくり	集落の人	10		10				0						10
	加勢人数	15	13	28		0	0	0		0	0	0		28
火葬	子供	1	1	2	嫁(1)						1	1	娘(1)	3
某年6月26日	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
12時自宅から出棺	孫	2		2						2		2		4
奄美葬斎場にて火葬	いとこ													0
	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	嫁(1)					6
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	5	2	7		2	3	5		3	1	4		16
告別式	子供	1	1	2	嫁(1)					1	1	2	婿(1) 娘(1)	4
(於)共同墓地	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
某年6月26日	孫	2		2						2		2		4
17:00～	いとこ													0
僧侶は葬儀社手配	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	婿(1)					6
	集落の人	28	31	59		30	22	52						111
	知人					38	32	70						70
	参列者合計	33	33	66		70	57	127		4	1	5		198
ノウコツノギ	子供	1	1	2	嫁(1)					1	1	2	婿(1) 娘(1)	4
(於)共同墓地	兄弟姉妹	1		1		1		1		1		1		3
某年6月26日	孫	2		2						2		2		4
17:30～	いとこ													0
僧侶は葬儀社手配	甥・姪	1	1	2	嫁(1)	1	3	4	婿(1)					6
	集落の人	28	31	59		30	22	52						111
	知人					38	32	70						70
	参列者合計	33	33	66		70	57	127		4	1	5		198



表5-2 B家(女性・享年94歳)葬儀参列者数

龍郷町 円

B家(女性・享年94歳)葬儀参列者数

儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜(自宅)	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4	婿(1)	1	1	2		10
某年1月29日	兄弟姉妹	2	1	3										3
◆1月29日未明	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
病院で死去。	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人	4	6	10										10
	知人					8	12	20						20
	参列者合計	13	13	26		19	23	42		7	1	8		76
・墓さばくり班	集落の人	3		3										3
・炊事班	集落の人		10	10										10
・山入り班	集落の人													0
・花づくり班	集落の人													0
	加勢人数	3	10	13		0	0	0		0	0	0		13
告別式	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)V葬儀社	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
僧侶は葬儀社手配	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	9	7	16		11	11	22		7	1	8		46
火葬	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)奄美市斎場	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	9	7	16		11	11	22		7	1	8		46
ノウコツノギ	子供	2	2	4	婿(1)嫁(1)	2	2	4		1	1	2		10
某年1月30日	兄弟姉妹	2	1	3										3
(於)共同墓地	孫	2	2	4		1	1	2		5		5		11
	いとこ									1		1	ふたいとこ	1
	甥・姪	3	2	5	婿(1)嫁(1)	8	8	16	婿(6)嫁(2)					21
	集落の人	12	18	30										30
	知人													0
	参列者合計	21	25	46		11	11	22		7	1	8		76

表5-3 C家(男性・62歳)葬儀参列者数

龍郷町 円

C家(男性・62歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				奄美市・他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜	子供									2	1	3		3
某年11月20日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
◆定年後Uターン	孫													0
事故死	いとこ	5	5	10	嫁(5)	1	2	3						13
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人	1	2	3	同級生	3	2	5	同級生					8
	参列者合計	6	7	13		8	7	15		3	1	4		32
・墓さばくり班	集落の人	3		3										3
・炊事班	集落の人													0
・山入り班	集落の人													0
・花つくり	集落の人													0
	加勢人数	3	0	3		0	0	0		0	0	0		3
告別式	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)V葬儀社	孫													0
僧侶は葬儀社で手配	いとこ	2	2	4	嫁(2)	2	2	4						8
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人	1	1	2	同級生	1		1						3
	参列者合計	3	3	6		7	5	12		2	1	3		21
火 葬	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)奄美市斎場	孫													0
	いとこ	1		1			1	1						2
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人													0
	知人													0
	参列者合計	1	0	1		4	4	8		2	1	3		12
ノウコツノギ	子供									1	1	2		2
某年11月21日	兄弟姉妹					1		1	長兄	1		1	次兄	2
(於)共同墓地	孫													0
17:00～	いとこ	5	5	10	嫁(5)	1	2	3	姪(1)嫁(1)					13
	甥・姪					3	3	6	婿(1)嫁(2)					6
	集落の人	7	13	20										20
	知人		2	2	同級生	3	1	4	同級生					6
	参列者合計	12	20	32		8	6	14		2	1	3		49

表 5-4 D家(女性・享年94歳)葬儀参列者数

宇検村 平田

D家(女性・享年94歳)葬儀参列者数

儀礼項目	故人との 関係	集落の人達				他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜	子供		0	0							1	1		1
某年2月4日	兄弟姉妹													0
	孫	0		0						0	1	1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		0	2	2		39
式場設営・片付け	集落の人	3	2	5										5
	加勢人数	3	2	5		0	0	0		0	0	0		5
告別式	子供										1	1		1
某年2月5日 (於)奄美市斎場	兄弟姉妹													0
	孫										1	1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		0	2	2		39
火 葬	子供	0	0	0							1	1	嫁1	1
	兄弟姉妹													0
	孫	0	0	0						1		1		1
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	16		16										16
	知人	5		5		16		16						21
	参列者合計	21	0	21		16	0	16		1	1	2		39
ノウツノギ 某年2月5日 (於)平田共同墓地 16:00～	子供	0	0	0						1	1	2	嫁1	2
	兄弟姉妹													0
	孫	0	0	0						1	1	2		2
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	45		45										45
	知人	20		20		15		15						35
	参列者合計	65	0	65		15	0	15		2	2	4		84



表5—5 E家(女性・享年86歳)

宇検村 平田

E家(女性・享年86歳)葬儀参列者数														
儀礼項目	故人との 関係	平田集落の人達				他集落に居住				島外他都市部に居住の人達				参列者合 計(人)
		性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	性 別		人 数	婿・嫁	
		男性	女性			男性	女性			男性	女性			
通 夜	子供	0	0	0						1	1	2	嫁1	2
某年9月28日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0		0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	0		0										0
	知人	0		0		0		0		15	1	16		16
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
式場設営・片付け	集落の人													
	加勢人数	0	0	0		0	0	0		0	0	0		0
告別式	子供	0	0	0						1	1	2		2
某年9月29日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0		0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人													0
	知人									15	1	16		16
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
火 葬	子供	0	0	0						1	1	2	嫁1	2
某年9月29日	兄弟姉妹													0
横浜戸塚葬儀場	孫	0	0	0						3		3		3
	いとこ													0
	甥・姪													0
	集落の人	0		0										0
	知人	0		0		0		0		15	1	16		21
	参列者合計	0	0	0		0	0	0		19	2	21		21
ノウコツノギ	子供	1	1	2										2
某年4月25日	兄弟姉妹	1		1										1
平田共同納骨堂	孫	0	0	0						0	0	0		0
	いとこ													0
	甥・姪		2	2										2
	集落の人	5	1	6										6
	知人	2		2		0		0						2
	参列者合計	9	4	13		0	0	0		0	0	0		13

表5－6 平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査票

関東大平会の皆様へ

平田集落共同納骨堂に関するアンケートのお願い

私は千葉大学大学院人文社会科学研究科において「奄美の葬送・祭祀儀礼」をテーマとした研究を行っております。現在、平田集落では集落の運営による共同納骨堂を建設中です。このことに関し、下記のアンケート（無記名）にお答え頂きたく宜しくご協力願います。

**Q1 将来のご自身の住居についてどのようにお考えですか(チェックは1つ)**

- 1. ☐ 他出家族と一緒に住む
- 2. ☐ 老夫婦で住む
- 3. ☐ 独居住まい
- 4. ☐ 故郷に移り住む

**Q2 お墓の継承に関して該当するものにお答えください(チェックは1つ)**

- 1. ☐ 故郷の実家の墓を継承する
- 2. ☐ お寺や永代供養墓に改葬したい
- 3. ☐ 無縁仏になっても良い
- 4. ☐ 現在住んでいる場所に墓を改葬したい
- 5. ☐ 考えていない

**Q3 集落の共同納骨堂建設に関してお聞かせください(チェックは1つ)**

- 1. ☐ このような共同納骨堂の建設を望んでいた
- 2. ☐ 従来の墓地のままで良かった
- 3. ☐ 墓のあり方は個々人の判断に任せるべきである
- 4. ☐ 良くわからない ( )

**Q4 集落の共同納骨堂建設の経緯をお聞かせください(チェックは2つ)**

- 1. ☐ 高齢化によって集落の人々の労力負担が大きい
- 2. ☐ 継承者がいなくなり無縁化や改葬が増えている
- 3. ☐ 家族や親族の関係性が薄れているから
- 4. ☐ その他 ( )

**Q5 共同納骨堂の維持管理の検討はなされていますか(チェックは2つまで)**

- 1. ☐ 集落全体で負担する

2. ☐ 他出者も管理費を負担する
3. ☐ 老朽化に対する改修や改築の段階まで検討されている
4. ☐ わからない

Q 6 ご自分の葬儀に関してどのような葬儀を望みますか(チェックは1つまで)

1. ☐ 仏式の葬儀を希望
2. ☐ 仏教以外の宗教で葬儀を希望
3. ☐ 無宗教(宗教者不在)でしても良い
4. ☐ 葬儀はして欲しくない
5. ☐ 家族だけの葬儀を希望
6. ☐ こだわらない

Q 7 現在の葬儀や墓のあり方についてなんでも結構ですでお聞かせください。

Q 8 現在のご自身の家族構成をお聞かせください。

続柄	年齢(代)	性別	職業
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生
		<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 年金 <input type="checkbox"/> 無職 <input type="checkbox"/> 学生

以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。



表 5-7 平田集落共同納骨堂に関するアンケート調査結果(回答者数 28 人)

1. 調査日：2016 年 9 月 11 日(日) [時間]12 時～16 時半
2. 調査場所：関東太平会総会(池上徳持会館)
3. 出席者数：関東太平会会員 42 名(他集落来賓 4 名、小中高生 10 名)
4. 回答対象者数：28 名

Q 1. 将来のご自身の住居についてどのようにお考えですか(✓は 1 つ)無回答 4 名。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 老夫婦と住む	10	42	
<input type="checkbox"/> 奄美に移り住む	7	29	
<input type="checkbox"/> 独居住まい	4	17	
<input type="checkbox"/> 他出家族と住む	3	12	
<input type="checkbox"/> 老人ホーム等に住む	0	0	

24 100

Q 2. お墓の継承に関して該当するものにお答えください(✓は 1 つ)無回答 0。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 奄美の墓を継承する(共同納骨堂も含む)	11	39	
<input type="checkbox"/> 今は考えていない	7	25	
<input type="checkbox"/> お寺などの永代供養墓に改葬したい	5	18	
<input type="checkbox"/> 無縁仏になっても良い	3	11	
<input type="checkbox"/> 良くわからない	2	7	

28 100

Q 3. 集落の共同納骨堂の建立に関してお聞かせください(✓は 1 つ)無回答 4。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 以前から共同納骨堂の建設を望んでいた	11	46	
<input type="checkbox"/> 集落の判断に従った	10	42	
<input type="checkbox"/> 良くわからない	3	12	
<input type="checkbox"/> 従来の墓地のままで良かった	0	0	

24 100

Q 4. 共同納骨堂建設の経緯についてお聞かせください(✓は 2 つまで)無回答 3。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 高齢化によって労力負担が多くなっている	17	50	
<input type="checkbox"/> 無縁仏や改葬が増えている	13	38	
<input type="checkbox"/> 家族や親族の関係性が希薄化している	3	9	
<input type="checkbox"/> その他	1	3	

34 100

Q 5. 集落における共同納骨堂の維持管理についての検討はなされていますか。

(✓は2つまで)無回答 1。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 集落全体で管理する	21	68	
<input type="checkbox"/> 他出者も1部負担する(生花など)	5	16	
<input type="checkbox"/> わからない	4	13	
<input type="checkbox"/> 改修や改築のことまで検討されている	1	3	

31 100

Q 6. ご自身の葬儀に関してどのような葬儀をのぞみますか(✓は1つ)無回答 0。

質問項目	回答数	比率(%)	備考
<input type="checkbox"/> 家族だけの葬儀を希望	12	43	
<input type="checkbox"/> 葬儀の形にはこだわらない	7	25	
<input type="checkbox"/> 無宗教(宗教者不在)葬儀でも良い	4	14	
<input type="checkbox"/> 仏式の葬儀を希望	3	11	
<input type="checkbox"/> 葬儀はして欲しくない	2	7	

28 100

7. 現在の葬儀や墓のあり方についてなんでも結構ですのでお聞かせください。

[共同納骨堂に関する回答]

- ・生者が満足できるものであれば良い(20 歳代男性)。
- ・これからは僧侶に供養してもらって永代供養墓などが良いと思う(70 歳代男性)。
- ・それぞれの家族で考えていくべき問題だと思う(60 歳代男性)。
- ・共同納骨堂は集落の人に墓参を頼めるから良いと思う(60 歳代男性)。
- ・老後の問題は子供の考えに従う(70 歳代女性)
- ・二世で墓の事は、まだ考えていないが宇検村の共同納骨堂に入ることも考えている。  
墓は長男が引き継いでいくが、次男、三男やその子供などはその墓に入るのは抵抗がある  
のではないかと(60 歳代男性)

[葬儀に関する回答]

- ・これから孤独死が増えてくると思われるので、行政で葬儀などの面倒をみる仕組みを考えて欲しい(60 歳代男性)

以上